

茨城県教育財団文化財調査報告第381集

# 五 嵌 遺 跡

県立土浦第三高等学校老朽校舎改築  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県教育委員会  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第381集

# 五 咸 遺 跡

県立土浦第三高等学校老朽校舎改築  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県教育委員会  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

茨城県では、「一人一人が輝く教育立県を目指して」の教育理念の具現化のため、各種の施策のもと、様々な社会環境の変化に的確に対応し、茨城や日本を支える人材の育成を進めています。

茨城県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業は、本県教育の一層の振興を図るため、茨城県教育委員会が推進する耐震強化及び教育施設の充実の一環として行われるものであります。しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である五蔵遺跡が所在することから、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県教育委員会から埋蔵文化財の発掘調査の委託を受け、平成23年8月17日から12月16日までの4か月間にわたり、これを実施しました。

本書は、五蔵遺跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化的向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県教育委員会から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、阿見町教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一



## 例　　言

1 本書は、茨城県教育委員会財務課の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が有限会社毛野考古学研究所を調査体制に組み込み、平成23年度に発掘調査を実施した、茨城県土浦市大岩田1599番地および茨城県稲敷郡阿見町丸山5番地ほかに所在する五蔵遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成23年8月17日～12月16日

整理 平成24年6月1日～10月31日

3 発掘調査は、調査課長樋村宣行のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長 皆川 修

茨城支所長 土生朗治（有限会社毛野考古学研究所）

調査係長 石丸敦史（有限会社毛野考古学研究所）

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、以下の者が担当した。

調査係長 石丸敦史（有限会社毛野考古学研究所）

5 本書の執筆、編集、遺物写真撮影は石丸敦史が行った。

6 本書の作成にあたり、古墳時代前期の出土土器については、愛知県埋蔵文化財調査センターの赤塚次郎氏、神奈川県立追浜高校学校の西川修一氏にご指導いただいた。文献収集については北九州市芸術文化振興財团埋蔵文化財調査室の佐藤浩司氏にお世話になった。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 500 m, Y = + 17,480 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 …とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット SA - 柱穴列 SD - 溝跡、地下壕作業道 SI - 壴穴遺構 SK - 土坑  
SX - 地下壕、性格不明遺構

遺物 DP - 土製品 G - ガラス製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器  
土層 K - 搅乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は 400 分の 1, 各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩		炉・火床面						
	黒色処理・炭化材範囲								
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品	△	金属製品	■	ガラス製品

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位はm, cm, gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。
- (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 遺構の主軸方向は、その長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたもののは以下のとおりである。

変更 SK13 → SI1, SD4・SD5 → TM3, SD8 → SX4, SD12 → SX7, SD14 → SX8, SD15 → SX9,  
SX7 → SX10

欠番 SK22

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
陥し穴	12
2 古墳時代の遺構と遺物	14
(1) 古墳	14
(2) 堅穴遺構	26
(3) 土坑	27
3 近代の遺構と遺物	30
(1) 地下壕	30
(2) 施設跡	64
(3) 溝跡	68
(4) 土坑	78
4 その他の遺構と遺物	81
(1) 土坑	81
(2) 溝跡	82
(3) 柱穴列	82
(4) 調査区中央南部の遺構外出土遺物	84
(5) その他の遺構外出土遺物	88
第4節 まとめ	89
写真図版	PL 1 ~ 22
抄 錄	



# 五 蔵 遺 跡 の 概 要

## 遺跡の位置と調査の目的

五蔵遺跡は、阿見町と土浦市との境、霞ヶ浦を東側に望む標高 22 m ほどの台地上に位置しています。茨城県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業にともない、遺跡の内容を記録保存するために茨城県教育財団が平成 23 年度に 4,659m<sup>2</sup>について発掘調査を行いました。



## 調査の内容

調査区は、台地上の高台にあり、その南と東側は崖状に急激に落ち込んでいます。調査の結果、縄文時代の陥し穴、古墳時代の竪穴遺構、古墳、太平洋戦争時の地下壕などが確認できました。主な出土遺物は、縄文土器、土師器、埴輪、陶器、磁器、ガラス製品、金属製品・機械部品などです。



調査区全景（北西上空から）



第1号墳周溝の埴輪出土状況



終戦直後の海軍航空要員研究所（米軍撮影）



第4号地下壕出入り口部分の階段



第4号地下壕出土遺物

## 調査の結果

古墳時代前期の土器が多量に出土しました。それらは畿内以東の様々な系譜のものがあり、広く人々が移動していたことが分かりました。

古墳が3基確認されました。その埋葬施設<sup>まいそうしせつ</sup>は残っていませんでしたが、周溝の中から円筒埴輪や土師器<sup>えんとうはにわ</sup><sup>つき</sup>の壊<sup>つき</sup>が出土しました。出土した遺物から6世紀初頭の古墳であることが分かりました。

太平洋戦争時の地下壕は、ここに建てられた海軍航空要員研究所<sup>かいぐんこうくうよういんけんきゅうじょ</sup><sup>てきせいぶ</sup>（適正部）のものです。この研究所は、1945年（昭和20年）に現在の私立霞ヶ浦高校の場所から当地に移転し、飛行兵の採用試験や適性検査が行われていました。出土した遺物には、適正検査で使われた検査器械などがありました。それらは製品を分解した状態で出土しており、また一部では燃やした痕跡<sup>しゅうせん</sup>が確認されました。このような状況からは、終戦直後の状況を如実に見ることができます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、教育施設の充実のため、耐震強化等の現状に即した校舎の改築を計画的かつ迅速に進めている。

平成22年9月27日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、茨城県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成22年10月4日に現地踏査を、平成22年10月13日、平成23年1月28日、2月17日、3月8日、9日に試掘調査を実施した。平成23年1月14日、3月28日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事に対して、事業地内に五歳遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成23年6月3日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成23年6月17日、茨城県知事に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年6月24日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、茨城県立土浦第三高等学校老朽校舎改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年6月27日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事に対して、五歳遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県知事から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、茨城県教育委員会の定める「財団法人茨城県教育財団の発掘調査における民間発掘調査組織の導入に関する指針」に基づき、民間発掘調査組織を組み込んで、平成23年8月17日から12月16日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

五歳遺跡の調査は、平成23年8月17日から12月16日までの5か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	8月	9月	10月	11月	12月
調査準備 表土除去 遺構確認					
遺構調査					
遺物洗浄 注写真整 理					
補足調査 撤収					

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

五蔵遺跡は、茨城県土浦市大岩田1599番地および茨城県稻敷郡阿見町字丸山5番地ほかに所在している。調査区域の大部分を占める阿見町は茨城県南部に位置し、北は土浦市、南から西にかけては牛久市、東は美浦村と隣接しており、東側には霞ヶ浦が広がっている。町域の大半は筑波・稻敷台地と呼ばれる台地上に位置し、比較的平坦な地形をなしている。筑波・稻敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部にあたり、東を桜川低地、西を鬼怒川・小貝川低地に挟まれた南北に伸びる台地である。地点によって地質の異なる箇所があるようだが、基本的には下から成田層と呼ばれる砂礫の基盤層、常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、関東ローム層、腐食土層となっている<sup>1)</sup>。台地面は中小河川やその支流、また降雨などの浸食により、複雑に開析されており、大小の谷地や窪地などが樹枝状に発達している。

当遺跡は筑波・稻敷台地の北東端部にあたり、桜川と花室川とに挟まれた台地の縁辺部に立地する。その標高は約22mを計測し、東側眼前には霞ヶ浦を広く見渡すことができる。台地縁辺部にあたることから、霞ヶ浦に面する東側周囲には急峻な傾斜をなす崖状の地形がみられ、霞ヶ浦沿岸の低地帯に至る。その比高は約20mである。

当地は、太平洋戦争中に海軍航空要員研究所（適正部）が建設され、それ以降は、茨城師範学校、土浦市立高等学校、土浦第三高等学校へと変遷している。海軍航空要員研究所の建設によって現在のような平坦地が形成されたようだが、以前は、一面に畠が続き、通称「天神山」と呼ばれていたように古墳の墳丘がいくつも残存していたようである<sup>2)</sup>。ただし当遺跡の周辺では旧来の地形を残しており、複雑に入り込む谷津には田畠、そこから台地へ向かう緩斜面には宅地が広がっている。

### 第2節 歴史的環境

桜川と花室川に挟まれた台地上には、数多くの遺跡が広がっている。とくに霞ヶ浦に面する台地縁辺部には古墳、城館跡が数多く点在している。

まず旧石器時代の遺跡としては、内出後遺跡〈25〉からナイフ形石器が出土している。花室川流域はナウマソゾウの化石が発見されることで広く知られている。

縄文時代の遺跡は多く、貝塚も多く点在している。鳥山貝塚〈70〉は関山式期、小松貝塚〈37〉は中・後期の貝塚である。また国指定史跡となっている後・晚期の貝塚である上高津貝塚も近在する。集落跡も多く、前期の遺跡として鳥山遺跡〈74〉からは関山式期の竪穴住居跡が検出され、内出後遺跡からは玦状耳飾りが出土している。中期では、六十原遺跡〈32〉・六十原A遺跡〈33〉が調査されている。後期になると相対的に遺跡数は減少するようである。

弥生時代の遺跡は少なく、鳥山遺跡では後期後半の竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代になると、遺跡数が増加する。鳥山遺跡では前期の玉作り工房跡7棟が確認されており、瑪瑙製勾玉や碧玉製管玉等が製作されていたことがわかっている。前期の集落跡には内出後遺跡・南丘遺跡〈73〉・永峰遺跡〈80〉などがある。中期から後期にかけて遺跡数はさらに増加する。永峰遺跡・鳥山遺跡・内出後遺跡・

じんで 神出遺跡〈22〉などで中期から後期にかけての集落跡が確認されている。また石製模造品が多く出土するのも当地域の特徴で、宮脇遺跡〈49〉・阿見東遺跡〈50〉において滑石製の勾玉・剣形品・管玉・臼玉が出土している。古墳はほぼ各小丘陵上に存在しており、とくに霞ヶ浦沿岸域に多い傾向を示す。桜ヶ丘古墳〈28〉では工事中に箱形石棺が確認されている。高津天神山古墳群〈39〉では人物埴輪が出土している。五蔵遺跡（五蔵古墳）からは、須恵器壺・蓋・甌・提瓶などが出土したと伝えられている。

奈良・平安時代の遺跡も多く、この一帯は信太郡と茨城郡との境にあたる。鳥山遺跡では、「大家」と書かれた墨書き土器や線刻のある紡錘車が出土し、また多数の掘立柱建物跡が検出され、拠点的集落の様相をみせて いる。その他、集落には灰釉陶器を出土した長峰遺跡〈80〉や南丘遺跡・神出遺跡などがある。

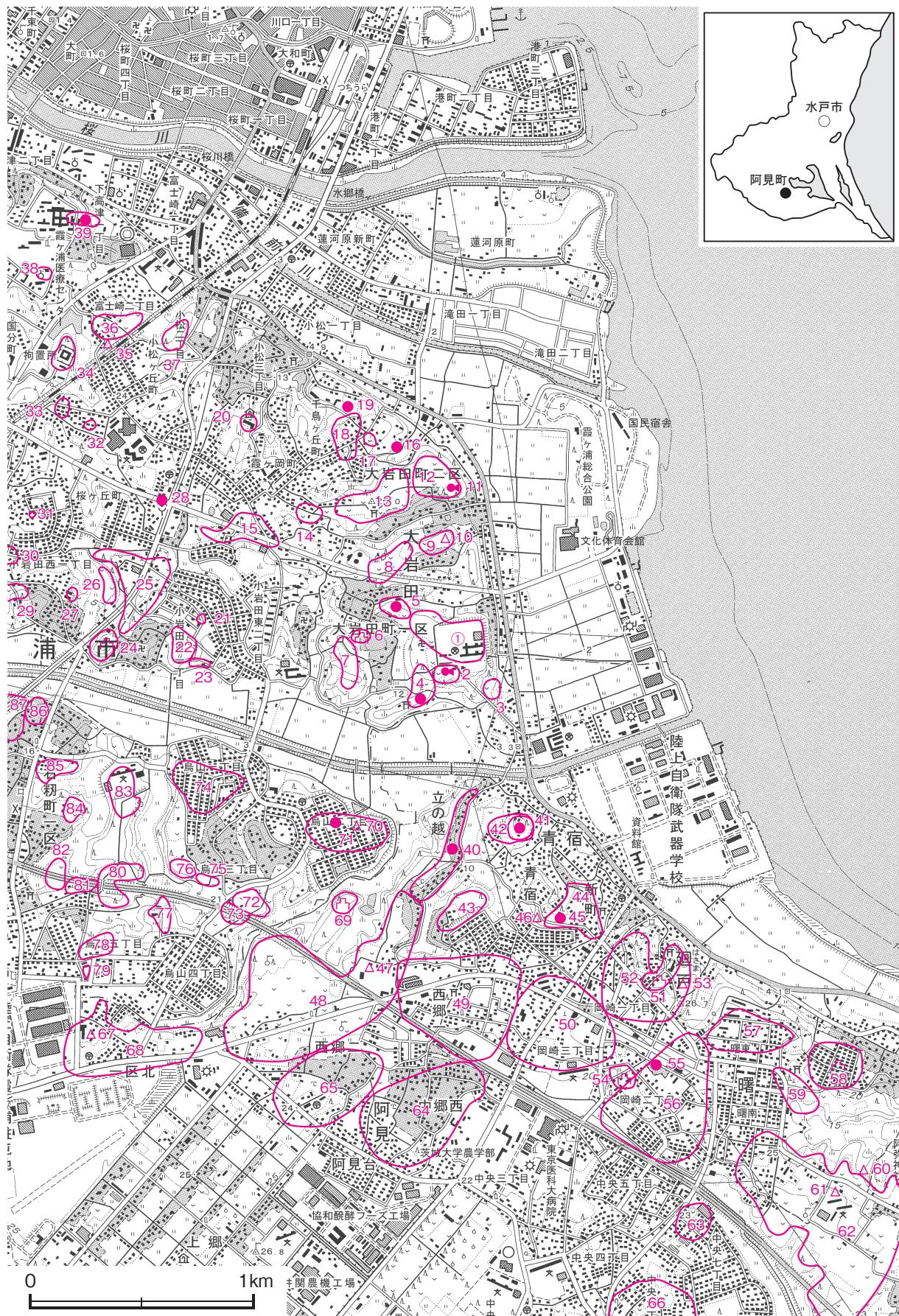
中世に帰属するものとしては城館跡が多く確認されている。五蔵遺跡に近在する岩田館跡〈6〉は、岩田彦六が築造したものとされている<sup>3)</sup>。神出遺跡からは掘立柱建物跡や地下式坑が検出された。内出後遺跡からは青磁平碗が出土している。<sup>おおいわた</sup>大岩田貝塚〈10〉は、内耳土器片などが散布していることから中世の貝塚とされて いる。内出後遺跡からは近世墓が検出されている。

五蔵遺跡は先述したように太平洋戦争中、昭和18年に海軍航空要員研究所（適正部）が建てられた場所である。本調査においても、それに伴う地下壕等の施設が確認され、調査対象とすることになった。阿見町は「予科練の街」と呼ばれるように大正11年の霞ヶ浦航空隊創設以降、海軍の航空要員養成の中核基地となつて いった。そのため現在でも各所で戦争遺跡・戦跡遺構が残っている<sup>4)</sup>。現在の茨城大学農学部は、霞ヶ浦海軍航空隊の本部が所在した所であり、本部庁舎の一部、プール跡、方位盤等が残存している。霞ヶ浦海軍航空隊から分立した土浦海軍航空隊の跡地は陸上自衛隊武器学校となっており、本部庁舎建物・号令台・格納庫・舟艇発着所（ポンド）等が現存している。その他、町内には霞ヶ浦海軍航空隊の貯水塔・貯水槽（現サンエイ糖化株式会社）や零式艦上戦闘機用掩体壕（現個人宅）等多くの建造物が残っている。また防空壕も軍用・民用ともに各所で残っている。平成21年度に国土交通省・農林水産省・林野庁が調査した特殊地下壕実態調査では、阿見町に2基、土浦市に3基が残存しているとされている<sup>5)</sup>。しかし、通称「たこつぼ」と呼ばれる個人用防空壕は現在でも各所で見られる。また阿見町青宿の鹿島神社参道両脇には防空壕があり、昭和20年6月10日の大空襲の際、防空壕入口に落ちた爆弾によって予科練習生をはじめ多くの死傷者を出しておらず、現在でも慰靈に訪れる人が絶えない。

※文中の〈 〉内の番号は、表1及び第1図の当該遺跡番号と同じである。

## 註

- 1) 大山年次監修『茨城県 地質のガイド』コロナ社 1977年8月
- 2) 茨城県立土浦第三高等学校『土浦三高創立50周年記念誌』1995年10月
- 3) 土浦市史編さん委員会編『土浦市史』 1975年
- 4) 現存しているものについては、阿見町『阿見と予科練～そして人々のものがたり～』2002年3月を参照した。
- 5) 国土交通省都市局都市安全課都市防災対策推進室 特殊地下壕対策事業 平成21年度特殊地下壕実態調査資料より



第1図 五藏遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「土浦」）

表1 五歳遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	五歳遺跡	○	○	○	○				23	中居遺跡				○	○		
2	丸山古墳群			○					24	南古屋敷館跡					○		
3	丸山下遺跡			○					25	内出後遺跡	○	○		○	○	○	○
4	法泉寺古墳群			○					26	橋下遺跡			○	○	○		
5	中内山古墳群			○					27	谷畑遺跡		○	○				
6	岩田館跡					○			28	桜ヶ丘古墳			○				
7	西の前遺跡			○	○	○	○		29	いさろ遺跡			○	○			
8	木曾遺跡			○	○				30	油麦田遺跡			○	○			
9	木曾北遺跡			○	○	○			31	桜ヶ丘遺跡			○				
10	大岩田貝塚					○			32	六十原遺跡		○					
11	ひさご塚古墳			○					33	六十原A遺跡	○	○					
12	内根A遺跡	○	○	○	○				34	国分遺跡		○					
13	内根B遺跡	○		○	○				35	小松貝塚		○					
14	内根C遺跡				○				36	池の台遺跡	○	○	○	○			
15	霞ヶ岡遺跡	○		○	○	○	○		37	小松遺跡			○	○			
16	霞ヶ岡古墳			○					38	大久保遺跡			○				
17	霞ヶ岡北遺跡	○		○	○				39	高津天神山古墳群			○				
18	東谷遺跡	○		○					40	立の越古墳群			○				
19	三芳古墳			○					41	青宿古墳群				○			
20	房谷遺跡			○					42	後久保遺跡			○				
21	東出遺跡			○	○	○			43	熊野脇遺跡		○	○			○	
22	神出遺跡	○		○	○	○			44	空地台遺跡		○	○				

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
45	ビタラ塚古墳				○				67	一区北貝塚		○					
46	青宿貝塚		○						68	一区北遺跡		○					
47	阿見貝塚		○		○				69	立の越館跡					○		
48	西郷遺跡		○		○	○			70	烏山貝塚		○					
49	宮脇遺跡			○	○	○	○		71	石倉山古墳群			○				
50	阿見東遺跡				○				72	堂後遺跡		○		○	○		
51	廻戸城跡						○		73	南丘遺跡		○		○	○	○	○
52	廻戸遺跡		○	○	○			○	74	烏山遺跡		○	○	○	○		
53	廻戸貝塚		○						75	北平北遺跡				○			
54	岡崎城跡						○		76	北平南遺跡		○			○		
55	岡崎古墳							○	77	小西遺跡		○			○		
56	岡崎遺跡				○				78	烏山A遺跡					○		
57	曙町営住宅遺跡		○		○				79	烏山B遺跡					○		
58	大室城跡				○		○		80	長峰遺跡		○			○		
59	南谷津遺跡		○						81	数光遺跡		○		○	○		
60	根田貝塚 (竹来貝塚)		○	○	○	○	○	○	82	宮塚遺跡					○	○	
61	入屋敷貝塚		○					○	83	永峰遺跡		○	○				
62	竹来遺跡		○	○	○	○	○	○	84	松原遺跡		○			○		
63	外降木遺跡						○		85	堂地塚遺跡		○		○	○		
64	中郷東遺跡					○			86	沖の台遺跡			○	○			
65	中郷遺跡				○				87	平坪遺跡		○		○	○		
66	降木遺跡		○														



第2図 五蔵遺跡調査区設定図（土浦市都市計画図 2,500 分の 1）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

五蔵遺跡は、桜川と花室川に挟まれた台地縁辺部に位置し、東側眼前には霞ヶ浦が広がる。標高 22 m を計測する台地頂部に立地し、その範囲は南北 180 m、東西 300 m で台地頂部一帯にわたる。

調査前の現況は、茨城県立土浦第三高等学校の体育館等の学校施設となっていた。当地は太平洋戦争中に海軍航空要員研究所（適正部）が建設されている。

調査面積は、4,659m<sup>2</sup>である。確認された遺構は、縄文時代の土坑 3 基、古墳時代の竪穴遺構 1 基、古墳 3 基、近代の地下壕 9 基、不明施設跡 1 基、溝 3 条である。

遺物は、遺物収納箱（60 × 40 × 20cm）で 33 箱出土した。主な出土遺物は、縄文時代では縄文土器（深鉢）、古墳時代では土師器（壺・高壺・器台・壺・甕）、埴輪（円筒）、土製品（土玉）、平安時代では須恵器（壺）、昭和時代では陶器・ガラス瓶・機械部品・炭化紙がある。

### 第2節 基本層序

本調査区の地下には地下壕が張り巡らされており、その崩壊・崩落によって土層は大きく動いていることがわかった。とくに地下壕天井部の崩落による陥没は、周辺の地山層まで大きく変形させており、基本層序が本来の高さにない可能性が高いことがわかった。そこで比較的そのような変動の少なかった調査区西側において基本層序の把握を行った（テスピット 1）。また、調査区中央に南側へ開口する埋没谷が確認され、その東側壁面を利用して基本土層の把握を行った（テスピット 2）。

第 1 層は表土層で、校舎の整地土である。砂利・アスファルト等が主体である。層厚は地点によって大きく異なるが、おおむね 10cm である。

第 2 層は、褐色を呈するハードローム層で、上面が遺構確認面である。透明微粒、灰色粒子を含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は 70cm である。地点によっては造成等による二次堆積が認められ、層厚は一定しない。

第 3 層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は 15cm である。テスピット 2 では確認できなかった。

第 4 層は、褐色を呈するローム層である。一部鉄分を含む。粘性・締まりともに強く、粘土層への漸移層とみられる。層厚は 12cm である。

第 5 層は、灰白色を呈する粘土層で、常総粘土層にあたる。白色粒を含み、粘性・締まりともに強い。層厚は 14cm ~ 47cm である。テスピット 1 では、酸化粘土ブロックを含む第 6 層と分層されるためその層厚は薄くなるが、第 5 層と第 6 層は本来的には同質のものと考えられる。

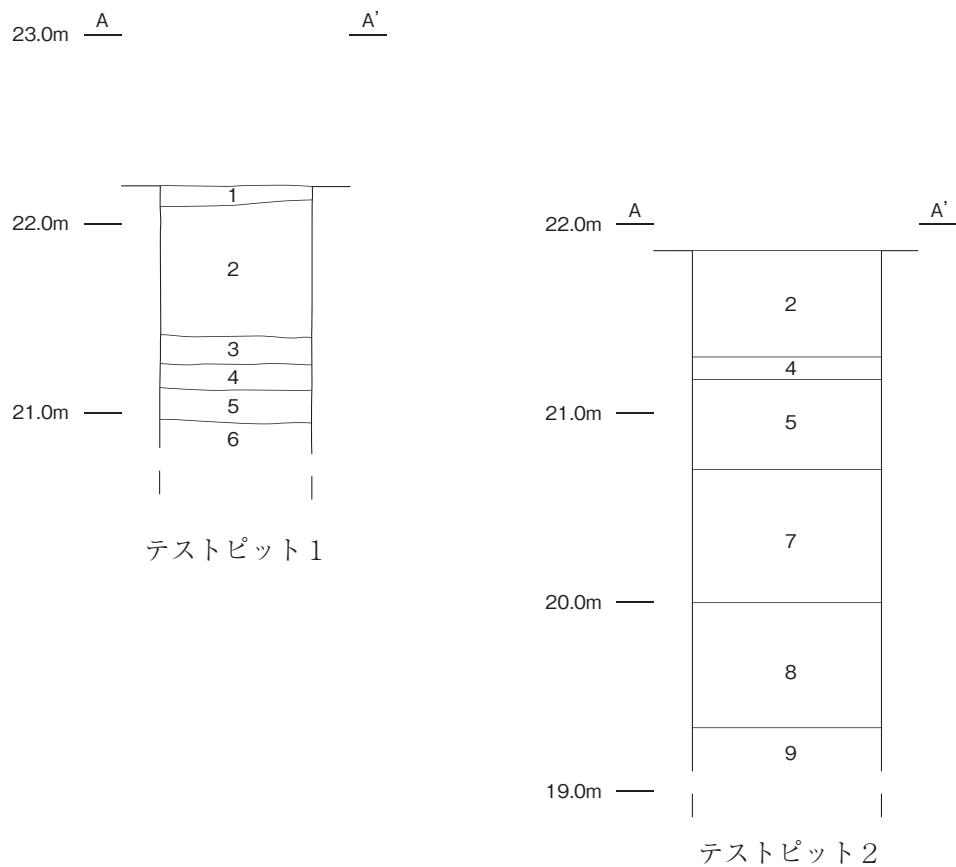
第 6 層は、灰白色を呈する粘土層で、常総粘土層に相当するが、酸化粘土ブロックを含む点で第 5 層とは異なる。層厚は 20cm まで確認したが、下層が未掘のため不明である。テスピット 1 のみで確認された。

第 7 層は、明褐色を呈する粘土層である。灰白色的粘土を主体とし、砂粒を含む。粘性は普通で、締まりは強く、砂層への漸移層とみられる。層厚は 70cm である。

第8層は、明褐色を呈する砂層である。砂粒を多く含み、粘性・締まりとともに普通である。層厚は66cmである。

第9層は、明黄橙色を呈する粘土層である。灰白色粘土を多量に含み、粘性・締まりとともに強い。層厚は25cmまで確認したが、下層が未掘のため不明である。

遺構確認面は、第2層上面である。ただし地下壕の走行方向は、その陥没範囲を特定することによって確認できたが、第2層上面ではロームの二次堆積もありその把握は困難であった。そのためローム層下の第5層上面まで部分的に掘削することによって地下壕の全容を把握することになった。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 繩文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑3基が確認できた。以下、遺構及び遺物について記述する。

陥し穴

#### 第3号土坑（第4図）

位置 A1e4 区、標高 22 m ほどの台地中央平坦面に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径 1.87 m、短径 0.3 m の長楕円形である。深さは 0.56 m で、長径方位は、N - 4° - E である。底面幅は狭小で、断面 V 字形である。

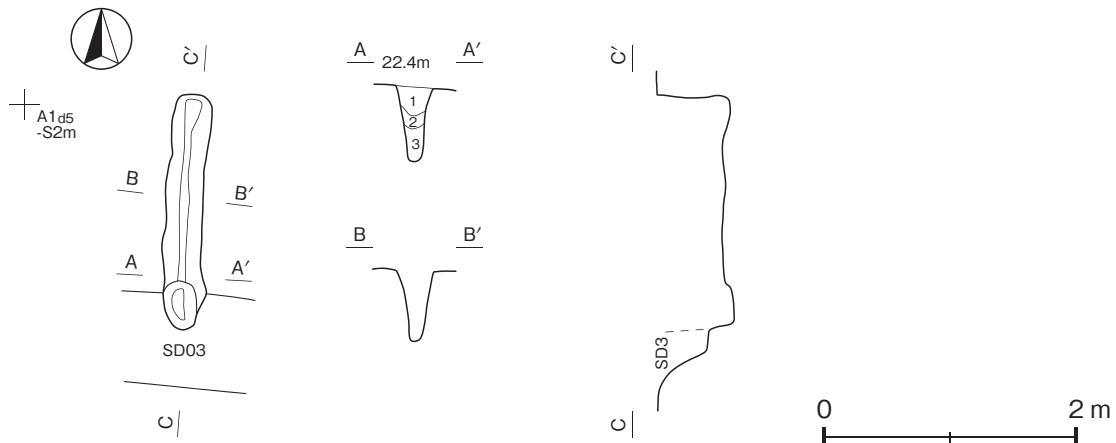
覆土 3層に分層できる。その堆積状況から自然堆積と判断できる。

土層解説

1 褐色 ロームブロック多量（締まり強い）  
2 暗褐色 ローム粒子多量

3 暗褐色 ロームブロック中量（締まり弱い）

所見 遺物は出土していないが、第5号土坑・第7号土坑とほぼ長軸を同じくして等間隔に並ぶことなどから繩文時代の陥し穴と判断される。陥し穴としては浅いが、これは昭和期の造成等によって上半部が削平されたものと思われる。



第4図 第3号土坑実測図

#### 第5号土坑（第5図）

位置 A1e5 ~ A1f5 区、標高 22 m ほどの台地中央平坦面に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。北端はピットに掘り込まれている。

規模と形状 長径 2.25 m、短径 0.32 m の長楕円形である。深さは 49cm で、長径方位は、N - 7° - W である。底面幅は狭小で、断面 V 字形である。

覆土 3層に分層できる。その堆積状況から自然堆積と判断できる。

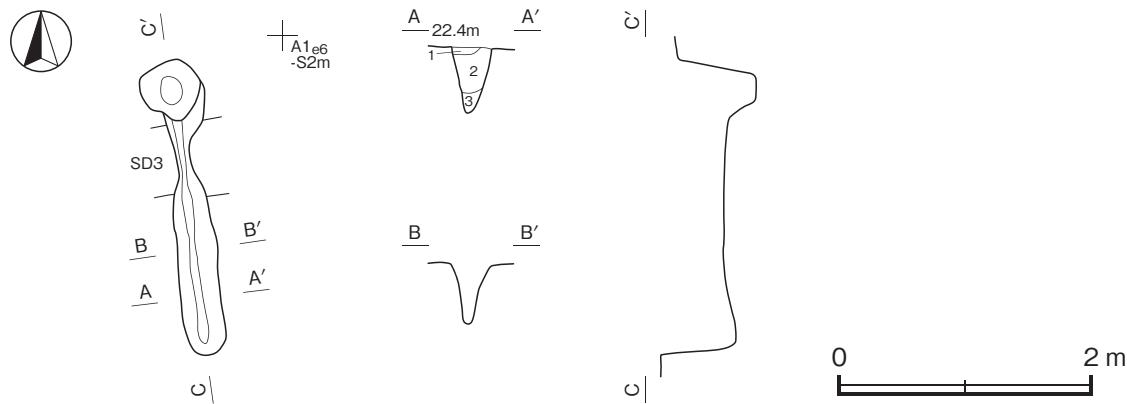
#### 土層解説

1 褐 色 ロームブロック多量（締まり強い）  
2 暗 褐 色 ローム粒子多量（締まり弱い）

3 暗 褐 色 ロームブロック中量（締まり弱い）

**遺物出土状況** 繩文土器片（深鉢か）3点が出土している。完存率は低く、いずれも覆土中から出土している。

**所見** 第3号土坑・第7号土坑と長軸をほぼ同じくして等間隔に並ぶことなどから、縩文時代の陥し穴と判断される。陥し穴としては浅いが、これは昭和期の造成等によって上半部が削平されたものと思われる。



第5図 第5号土坑実測図

#### 第7号土坑（第6図）

**位置** A1e7区、標高22mほどの台地中央平坦面に位置している。

**重複関係** 第3号溝に掘り込まれている。

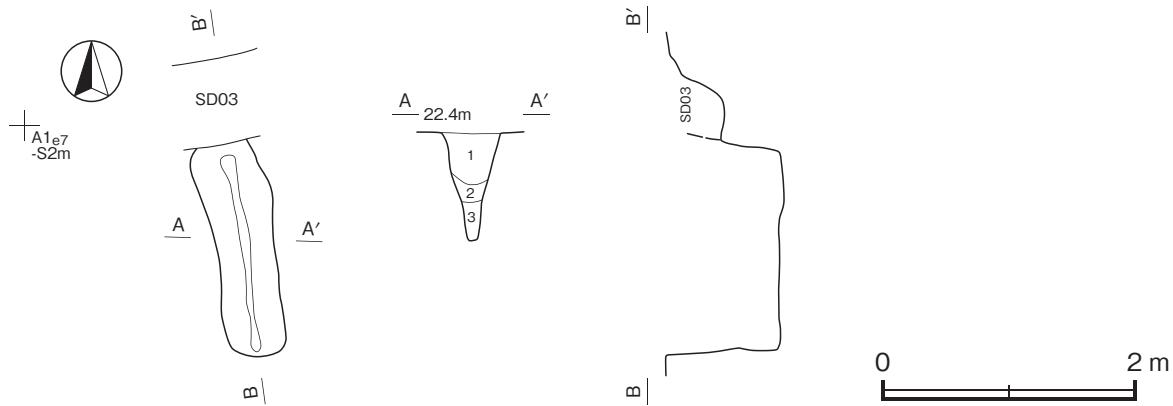
**規模と形状** 長径1.70m、短径0.55mの長楕円形である。深さは85cmで、長径方位は、N-9°-Wである。底面幅は狭小で、断面V字形である。

**覆土** 3層に分層できる。その堆積状況から自然堆積と判断できる。

#### 土層解説

1 褐 色 ローム粒子多量、暗褐色土ブロック少量（締まり弱い）  
2 暗 褐 色 炭化粒子微量、ローム粒子少量（締まり弱い）  
3 暗 褐 色 ローム粒子少量（締まり弱い）

**所見** 遺物は出土していないが、第3号土坑・第5号土坑と長軸をほぼ同じくして等間隔に並ぶことなどから縩文時代の陥し穴と判断される。陥し穴としては浅いが、これは以前の造成等によって上半部が削平されたものと思われる。



第6図 第7号土坑実測図

表2 繩文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	Ale4	N - 4° - E	長楕円形	1.87 × 0.3	56	平坦	外傾	自然	-	本跡→ SD3
5	Ale5	N - 7° - W	長楕円形	2.25 × 0.32	49	平坦	外傾	自然	縄文土器	本跡→ SD3
7	A17	N - 9° - W	長楕円形	1.7 × 0.55	85	平坦	外傾	自然	-	本跡→ SD3

## 2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、古墳3基、竪穴遺構1基が確認できた。以下、遺構及び遺物について記述する。

### (1) 古墳

#### 第1号墳 (第7～12図)

**位置** 調査区南東端のA4f2区一帯で確認され、標高21mほどの台地南東縁辺部に位置している。

**確認状況** これまでに周知されていない古墳である。墳丘、主体部ともに削平されており、周溝の一部が確認できただけである。第3号地下壕の陥没によって崩落している。

**規模と形状** 古墳の大半は調査区域外にあり、規模は不明である。周溝の形状から円墳と推測できる。

**墳丘** 墳丘部分はローム層まで削平されており、墳丘の盛土状況の詳細については把握できなかった。

**周溝** 上幅2.2m、下幅1.9m、深さ0.38mである。墳丘端部は一段掘り下げられ、周溝内法は40度の角度で立ち上がっている。外法は緩やかに立ち上がっている。覆土は周囲からの流入による堆積状況を示していることから自然堆積である。

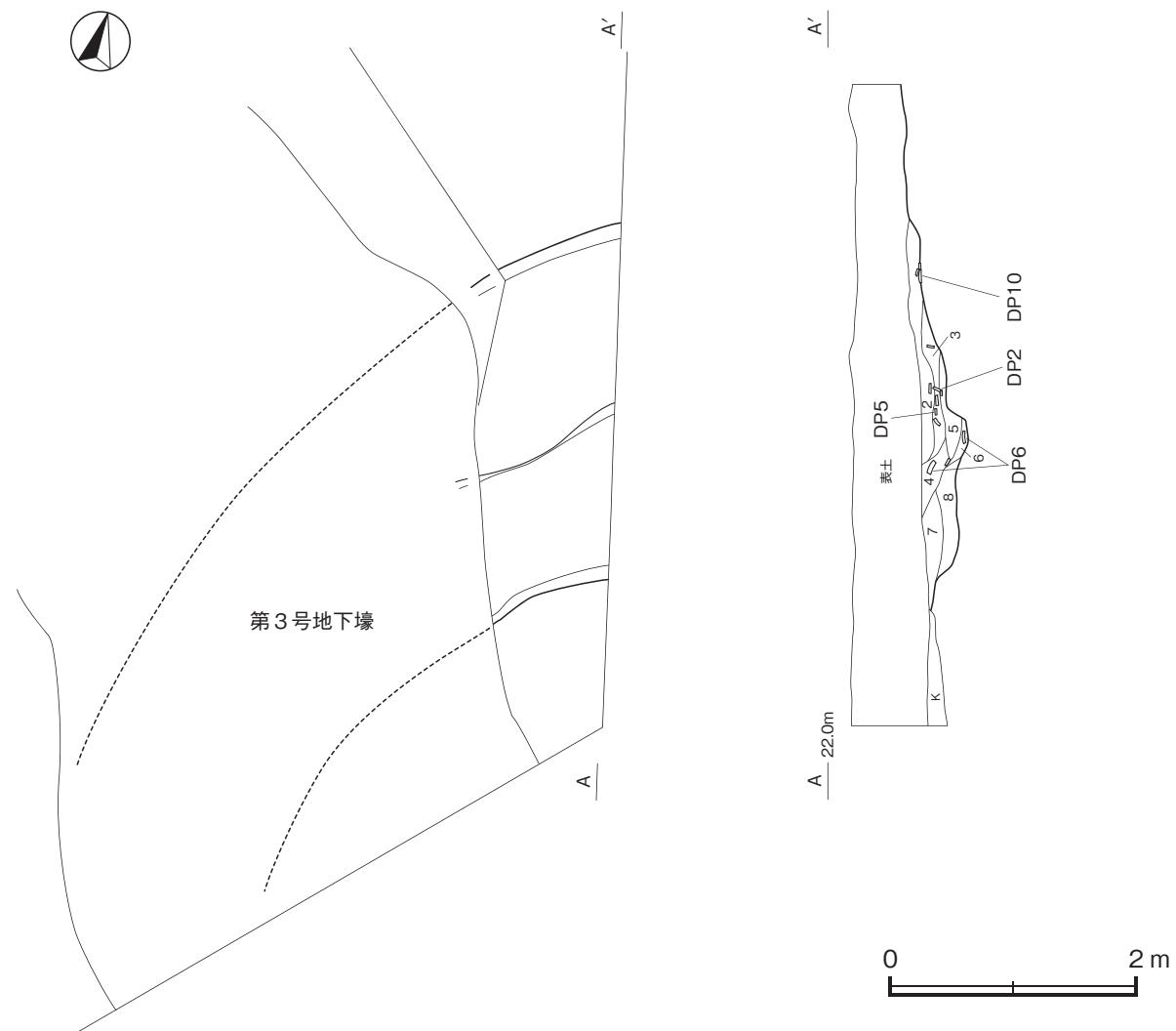
#### 周溝土層解説

1	褐	色	ロームブロック多量（締まり強い）	4	暗	褐	色	ローム粒子少量
2	暗	褐	色	5	褐	色	ロームブロック中量	
3	暗	褐	色	6	褐	色	ロームブロック多量（盛土、締まり強い）	
			ロームブロック少量、ローム粒子少量（締まり強い）	7	暗	褐	色	ロームブロック中量（盛土、締まり強い）

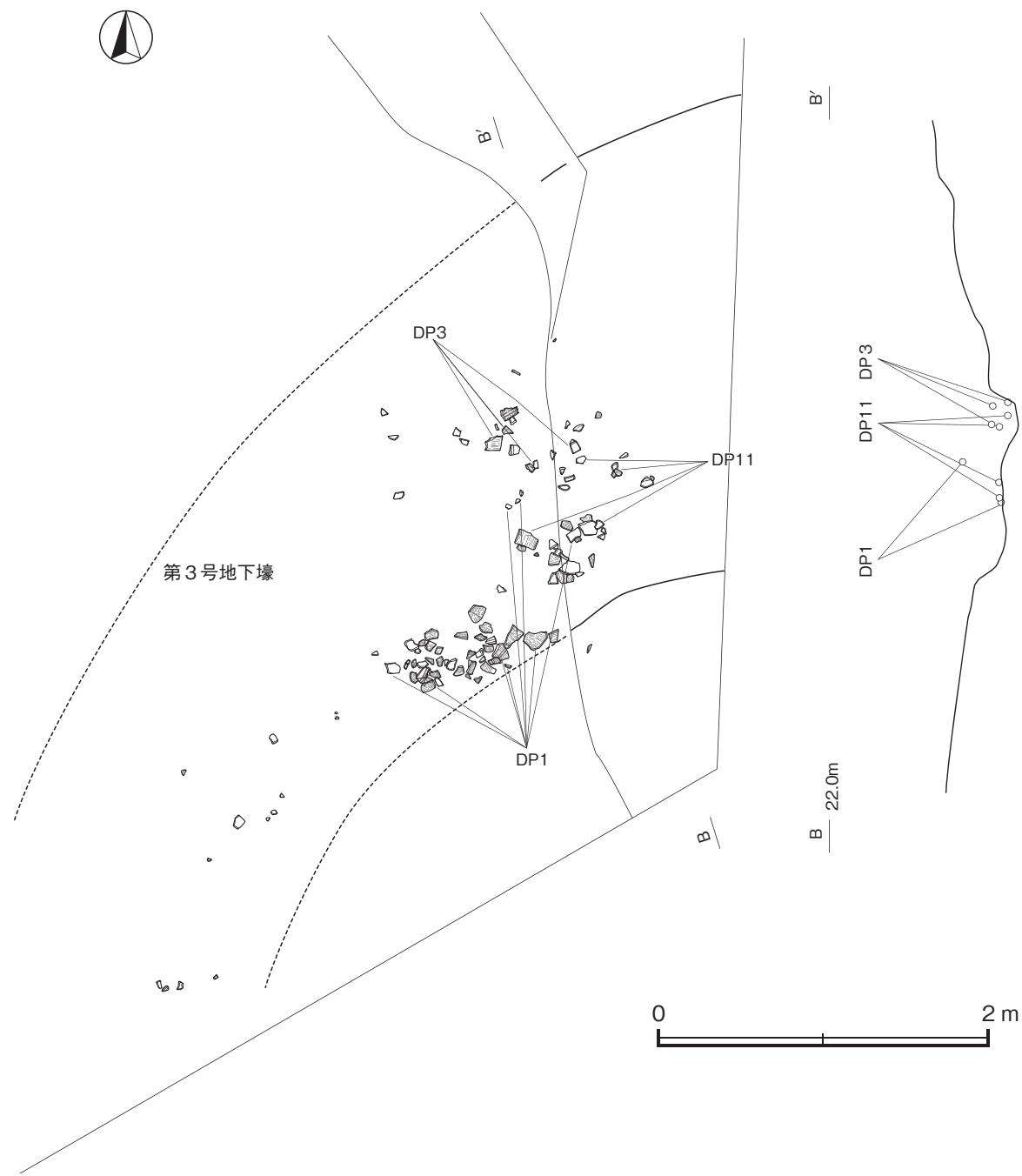
**遺物出土状況** 土師器8点（甕7、手捏土器1）、転落した状況で円筒埴輪80点が周溝の覆土中から出土して

いる。円筒埴輪はいずれも原位置を留めていない。なお DP1 の一部破片は第 3 号地下壕による陥没部分からも出土している。

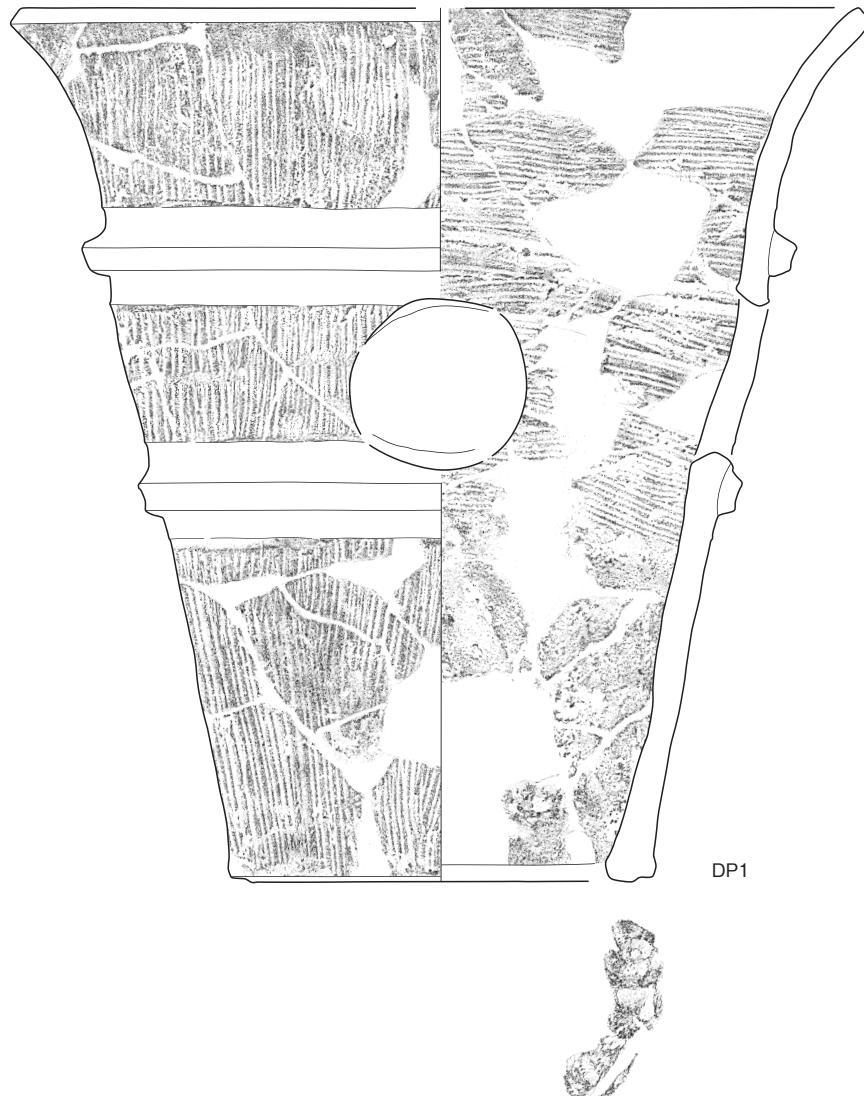
**所見** 時期は DP 1 の形態的特徴から 6 世紀初頭に位置づけられる。



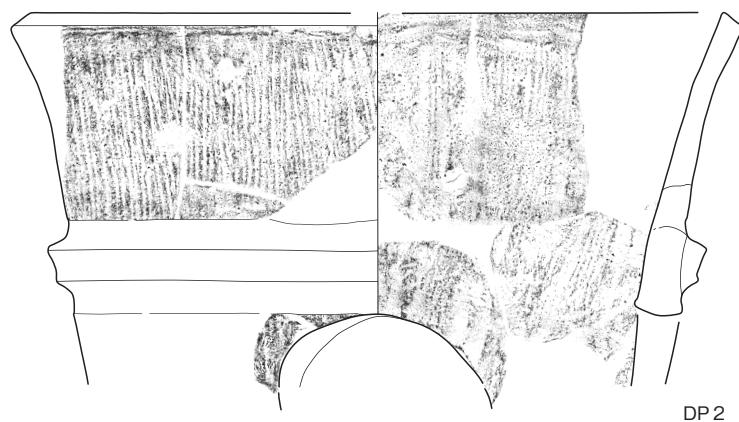
第7図 第1号墳実測図(1)



第8図 第1号墳実測図(2)



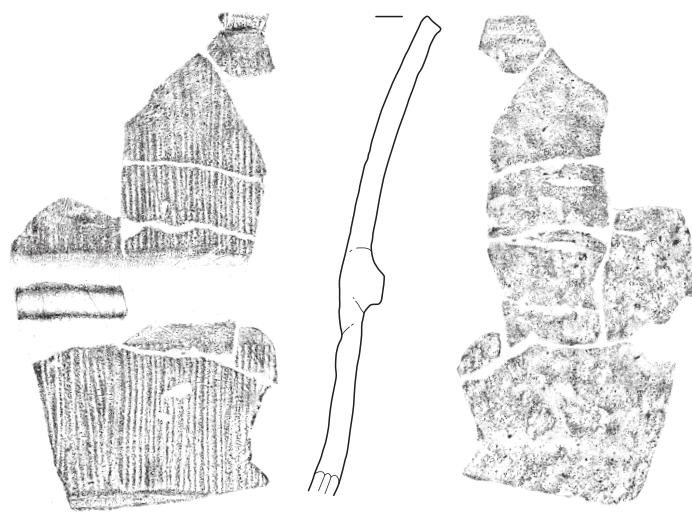
DP1



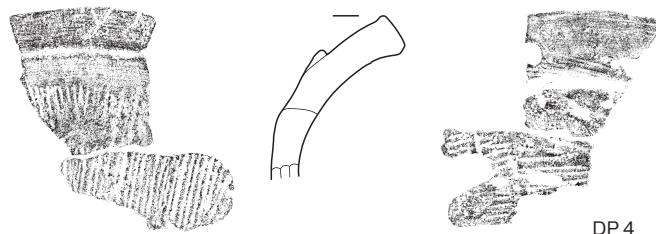
DP2



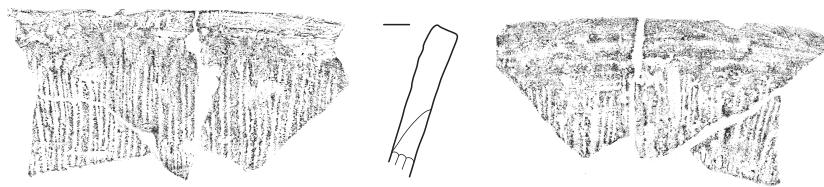
第9図 第1号墳出土遺物実測図(1)



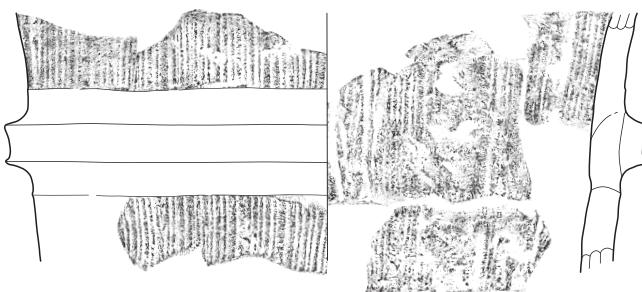
DP 3



DP 4



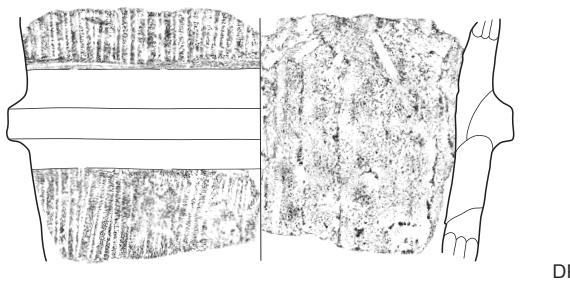
DP 5



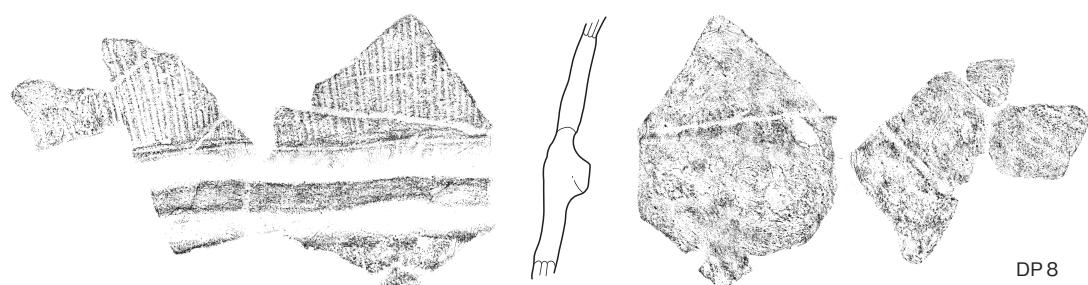
DP 6



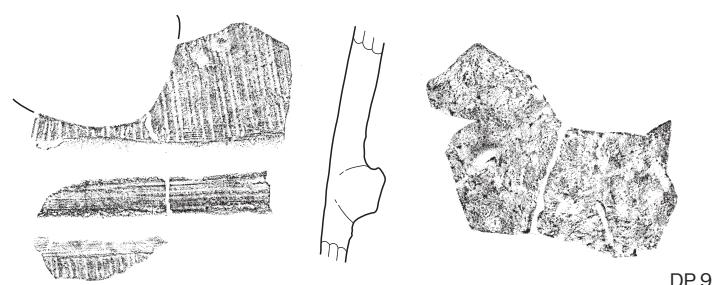
第10図 第1号墳出土遺物実測図(2)



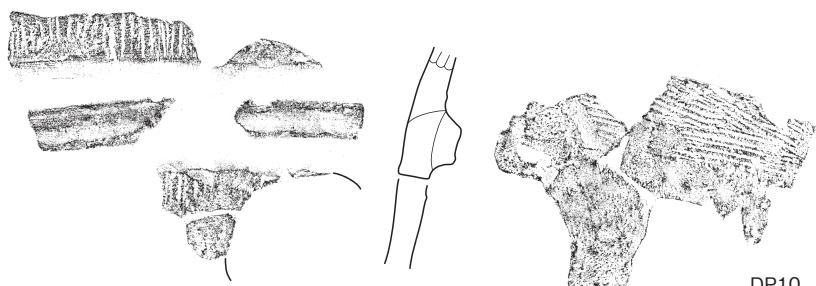
DP 7



DP 8



DP 9



DP 10

0 10cm

第 11 図 第 1 号墳出土遺物実測図(3)



第12図 第1号墳出土遺物実測図(4)

## 第1号墳出土遺物観察表（第9～12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
DP1	埴輪	円筒	34.0	34.6	[15.2]	石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）後、口縁端部ナデ 口縁～胴部内面横位ハケ目 第1段内面ナデ	周溝底面	80% PL11
DP2	埴輪	円筒	[29.0]	(14.8)	-	石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）内面縦位ハケ 目の後、口縁端部横ナデ	周溝覆土	20% PL11
DP3	埴輪	円筒	-	(19.0)	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）の後、口縁端部 横ナデ 内面ナデ 口縁端部内面横ナデ	周溝覆土	12% PL11
DP4	埴輪	円筒	-	(6.5)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）の後、口縁端部 横ナデ 内面横位ハケ目の後、口縁端部横ナデ	周溝底面	5% PL12
DP5	埴輪	円筒	-	(6.0)	-	石英・雲母	明赤褐	普通	外面縦位ハケ目（5条／1cm）の後、口縁端部 横ナデ 内面縦位ハケ目（5条／1cm）の後、口縁端部横ナデ	周溝覆土	5% PL12
DP6	埴輪	円筒	-	(9.8)	-	石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）の後、一部ナデ	周溝覆土	10% PL11
DP7	埴輪	円筒	-	(9.6)	-	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）内面縦位指ナ デ	周溝覆土	5%
DP8	埴輪	円筒	-	(10.5)	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）内面縦位指ナ デ	周溝覆土	10%
DP9	埴輪	円筒	-	(9.0)	-	石英・雲母	明褐	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）内面縦位ナデ	周溝底面	5% PL11
DP10	埴輪	円筒	-	(8.6)	-	石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	外面縦位ハケ目（3条／1cm）内面上半ハケ 目（5条／1cm）、内面ナデ	周溝底面	5% PL12
DP11	埴輪	円筒	-	(19.2)	[16.0]	石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	外面縦位ハケ目（5条／1cm）内面ナデ	周溝底面	30% PL11
DP12	埴輪	円筒	-	(17.6)	[15.4]	石英・雲母	橙	普通	外面縦位ハケ目（4条／1cm）内面縦位ハケ目（5 条／1cm）	周溝底面	20%
DP13	埴輪	円筒	-	(7.7)	-	石英・雲母	橙	普通	外面縦位ハケ目（5条／1cm）内面横位ハケ 目（5条／1cm）	周溝底面	5% PL12
1	土師器	手捏土器	5.5	3.2	4.6	石英	にぶい黄橙	普通	体部外側ナデ 体部内面指ナデ	周溝覆土	90% PL12

## 第2号墳（第13・14図）

**位置** 調査区中央東側 A3d2 区を中心に確認され、標高 22 m ほどの台地南東側に位置している。

**確認状況** これまでに周知されていない古墳である。墳丘、主体部ともに削平されており、周溝の一部が確認できただけである。第1号地下壕および第2号地下壕の陥没によって崩落している。

**形状と規模** 古墳の大半は、地下壕によって崩落しているため、規模は不明である。東側は第2号地下壕の陥没の影響により、大きく変形している。弧を描く南側周溝の状況から円墳と推測できる。

**墳丘** ローム層まで削平されており、墳丘の盛土状況については把握できなかった。

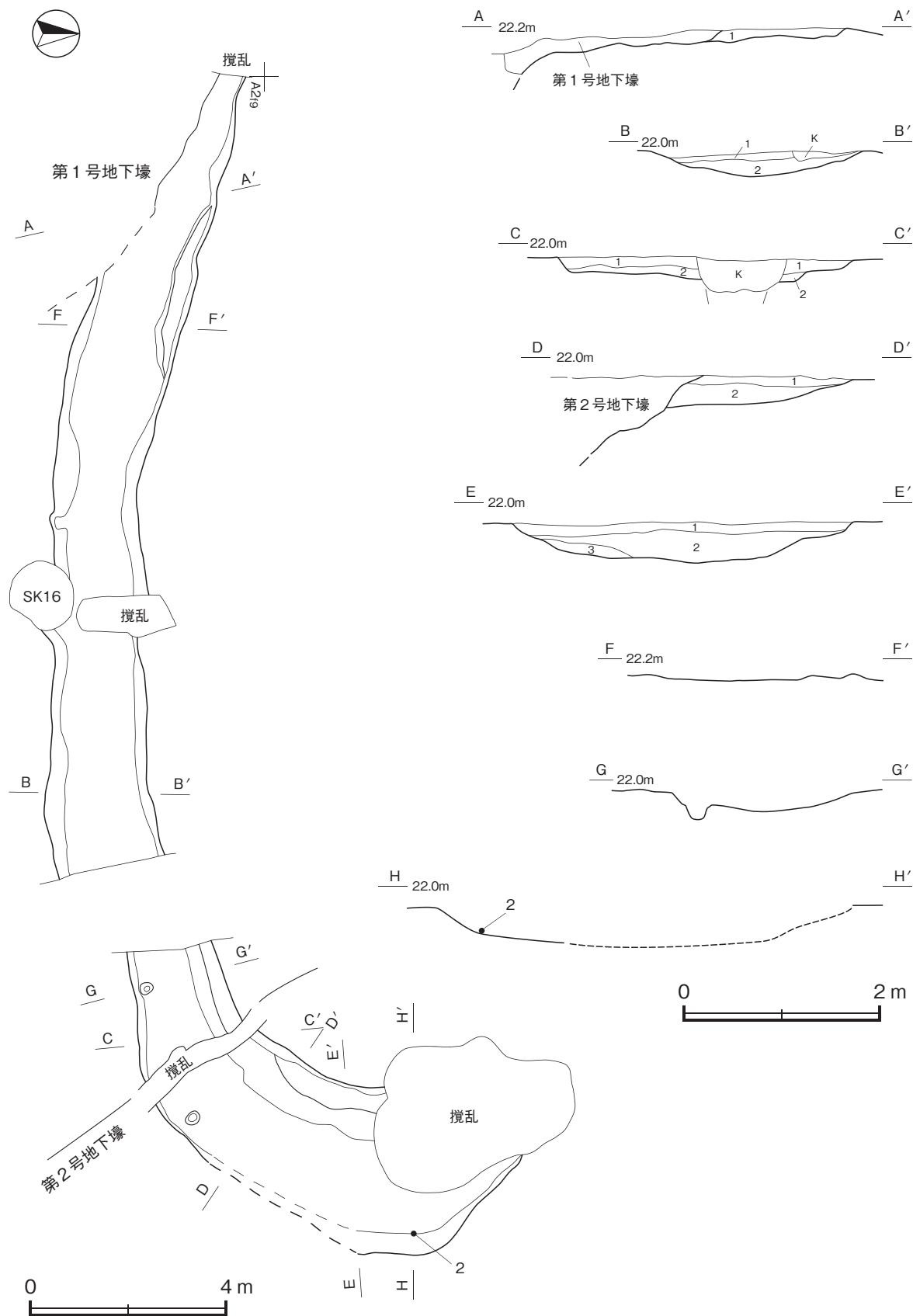
**周溝** 残存度の良い周溝南側は、上幅 1.7～2.0 m、下幅 0.9～1.8 m、深さ 0.2 m である。底面部分が残存しているだけであるが、緩やかに立ち上がっている。覆土は周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

### 周溝土層解説

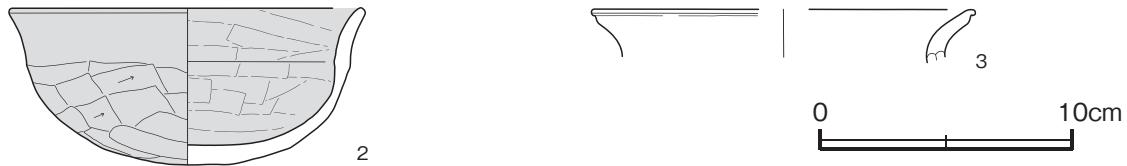
- |                               |                           |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 暗 褐 色 焼土粒子微量、ローム粒子中量（締まり強い） | 3 明 褐 色 ロームブロック中量、ローム粒子多量 |
| 2 暗 褐 色 焼土粒子微量、ローム粒子多量        |                           |

**遺物出土状況** 土師器片 52 点（壺 1、器台 1、高壺 1、壺 23、甕 26）が周溝の覆土中から出土している。また、流れ込んだと考えられる弥生土器片 3 点（壺）が出土している。2 は周溝の底面から正位の状態で出土した。周溝外法の立ち上がり部分から出土しているが、第2号地下壕の陥没による遺構の変形が顕著に認められる箇所であり、本来の位置を保っているかは不明である。3 は東側周溝の覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土した土師器壺 2 の特徴から、古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初）に位置づけられる。



第13図 第2号墳実測図



第14図 第2号墳出土遺物実測図

第2号墳出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	壺	14.2	6.2	-	長石・石英・黒色粒	明赤褐	普通	口縁部外面ナデ 体部・底部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 外・内面赤彩	周溝底面	100% PL12
3	土師器	甕	[15.2]	(1.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部下端に沈線 口縁部内面ナデ	覆土中	5%

### 第3号墳 (第15・16図)

**位置** 調査区中央 A2h3 区を中心確認され、標高 22 m ほどの台地南部に位置している。

**確認状況** これまでに周知されていない古墳である。墳丘、主体部ともに削平されており、周溝の一部が確認できただけである。

**重複関係** 第29号土坑・第30号土坑に掘り込まれている。

**墳丘** 内径が約 23 m、周溝外縁径が約 27 m で、周溝の全容は残存していなかったが円墳と想定できる。ローム層まで削平されており、墳丘の盛土状況については把握できなかった。

**周溝** 円形で、上幅 2.0 m、下幅 1.2 ~ 1.6 m、深さ 0.15 ~ 0.4 m である。断面形は逆台形状である。周溝内覆土は自然堆積である。

#### 周溝土層解説 (A - A', B - B' 共通)

1 暗褐色	色 ロームブロック多量、黒色土小ブロック少量（締まり強い）	5 暗褐色	色 ロームブロック多量（締まり強い）
2 褐色	ロームブロック多量、（締まり強い）	6 暗褐色	ロームブロック少量（締まり強い）
3 黒褐色	ロームブロック少量（締まり強い）	7 暗褐色	ローム粒子少量（締まり弱い）
4 褐色	ロームブロック多量（締まり強い）	8 暗褐色	ロームブロック中量、黒褐色土少量（締まり弱い）

#### 周溝土層解説 (C - C', D - D' 共通)

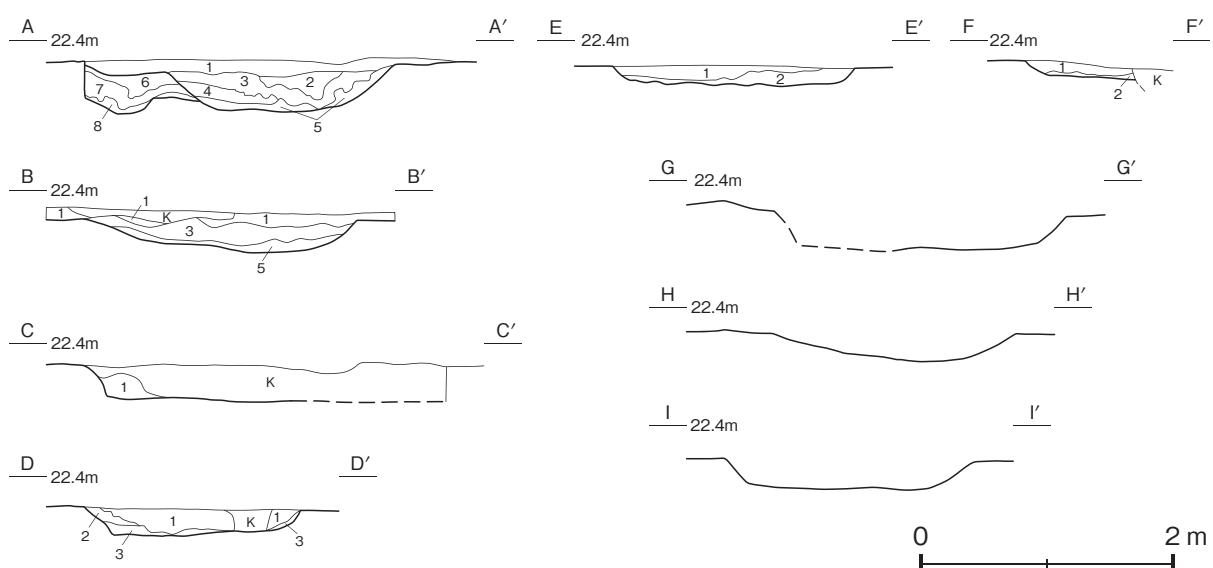
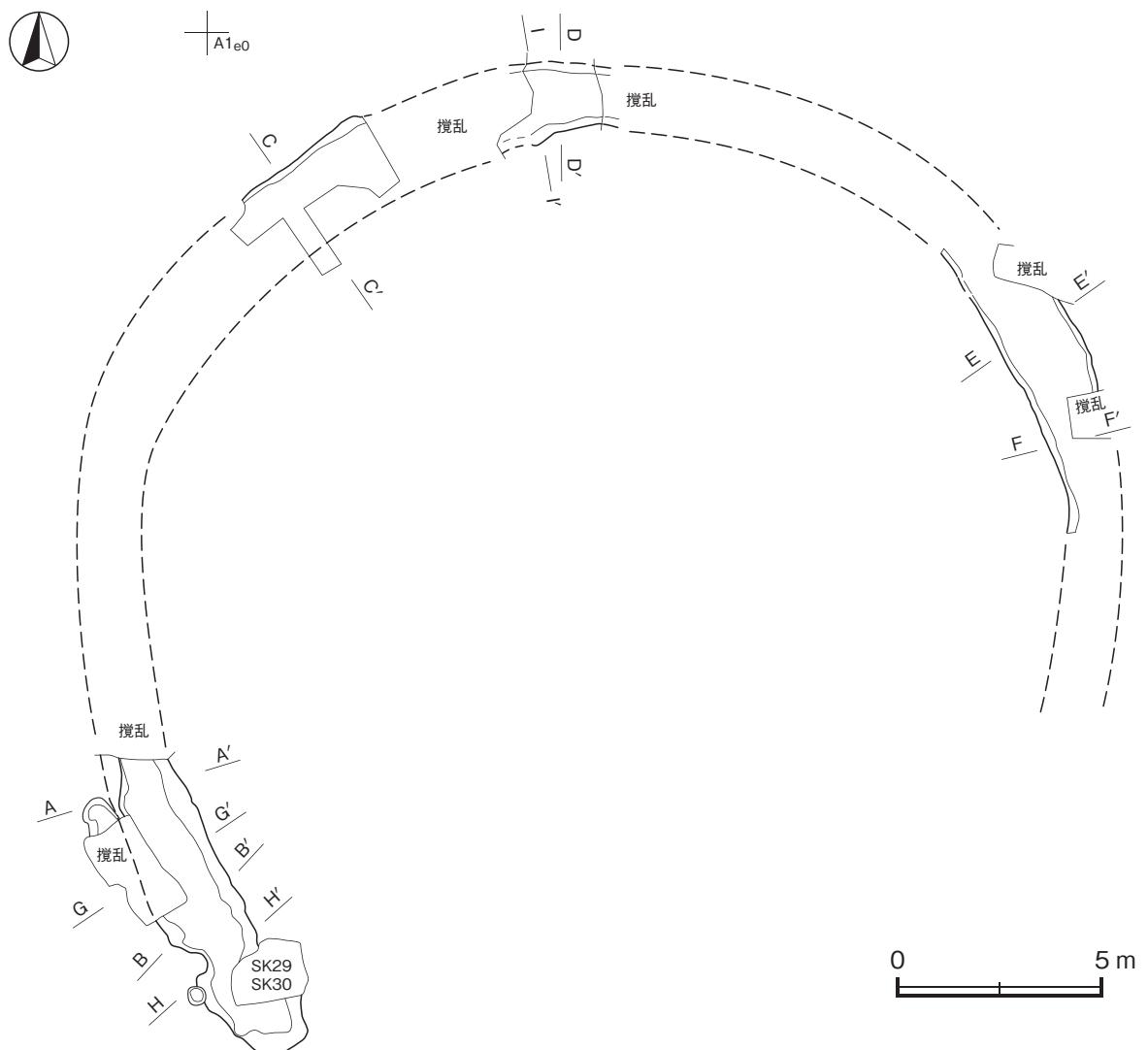
1 暗褐色	色 ロームブロック微量（締まり強い）	3 暗褐色	色 ロームブロック中量、ローム粒子中量（締まり強い）
2 暗褐色	色 ロームブロック多量（締まり強い）		

#### 周溝土層解説 (E - E', F - F' 共通)

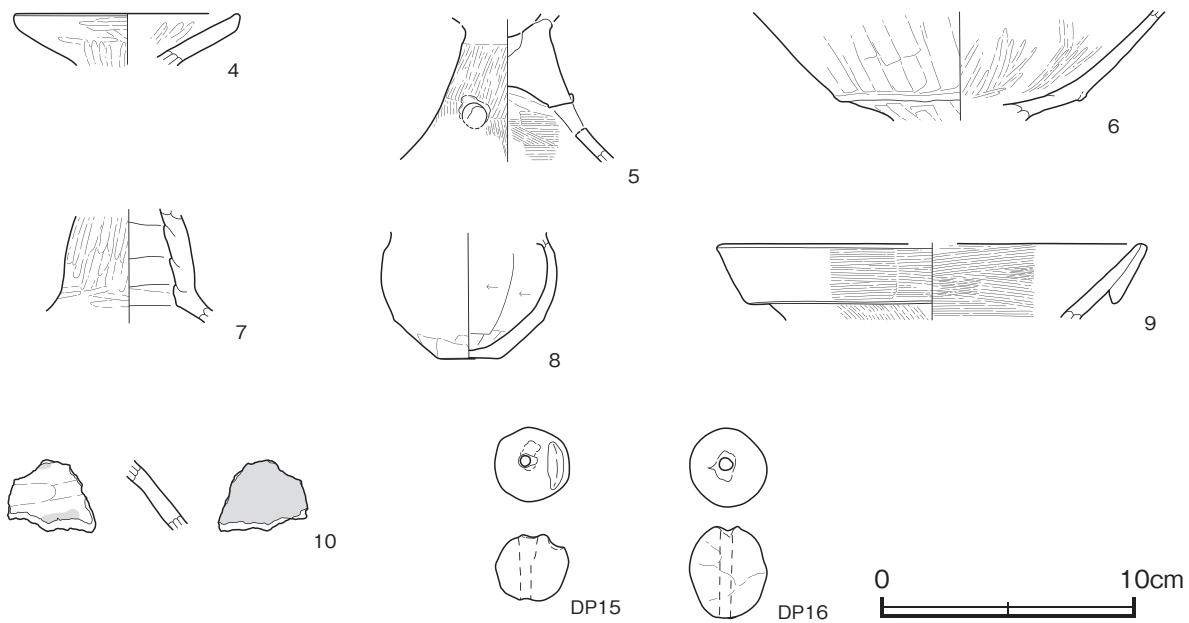
1 褐色	炭化粒子少量、ローム粒子多量（締まり強い）	2 褐色	ロームブロック多量（締まり強い）
------	-----------------------	------	------------------

**遺物出土状況** 土師器片 103 点（壺 1、器台 2、高壺 6、壺 26、甕 68）、土製品 2 点（土玉）が周溝の覆土から出土している。出土した遺物はいずれも残存状況が悪く、周溝の覆土上層から中層にかけて出土している。

**所見** 出土した土師器は、古墳時代前期から中期までのものが含まれ、時期はその中におさまるものと考えられる。



第15図 第3号墳実測図



第16図 第3号墳出土遺物実測図

第3号墳出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	土師器	器台	[9.0]	(2.0)	-	長石・石英	橙	普通	受部外面磨き 内面磨き	覆土中	20%
5	土師器	器台	-	(5.4)	-	石英	明黄褐	普通	脚部外面ハケ目後、上端ナデ 内面ハケ目後、上端指ナデ	覆土中	30% PL12
6	土師器	高杯	-	(4.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	杯部外面磨き 内面磨き	覆土中	10%
7	土師器	高杯	-	(4.5)	-	石英	橙	普通	脚部外面磨き 内面輪積み痕を残す 裾部内面ナデ	覆土中	10%
8	土師器	小形壺	-	(5.0)	[2.4]	石英	にぶい橙	普通	体部下端外面ヘラナデ 内面ヘラ削り	覆土中	40%
9	土師器	壺	[17.0]	(3.0)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目 内面ハケ目	覆土中	5%
10	土師器	壺	-	(2.8)	-	石英	赤褐	普通	体部外面赤彩 内面ナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP15	土玉	2.6	2.9	0.7	21.0	石英・雲母	指ナデだが不整形	覆土中	100% PL12
DP16	土玉	3.6	3.1	0.5	31.8	石英	一方向からの穿孔 指ナデ	覆土中	100% PL12

表3 古墳一覧表

番号	位置	墳形	墳丘		墳丘規模(m)		周溝規模(m)			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考 重複関係(古→新)
			主軸方向	全長(径)	高さ	最大上幅	最大下幅	深さ					
1	A4f2	[円墳]	-	-	-	2.2	1.9	0.38	-	埴輪、土師器	6世紀初頭	本跡→第3号地下壕	
2	A3d2	[円墳]	-	-	-	2	1.8	0.20	-	土師器	6世紀初頭	本跡→第1号・第2号地下壕	
3	A2h2	円墳	-	27	-	2	1.6	0.40	-	土師器	[中期]	本跡→SK29・SK30	

(2) 堅穴遺構

**第1号堅穴遺構** (第17・18図)

**位置** A3b5～A3c5区、標高22mほどの台地東側部分の平坦面に位置している。

**規模と形状** 北部は搅乱を受けており、東西軸1.75mで、南北軸は2.13mしか確認できなかった。方形を呈する。長軸方位は、N-10°-Wで、壁高は6～9cmしか残存していない。

**床** 床面は、ほぼ平坦で、地山のローム層を整形している。明確に踏み固められた状況は認められなかった。

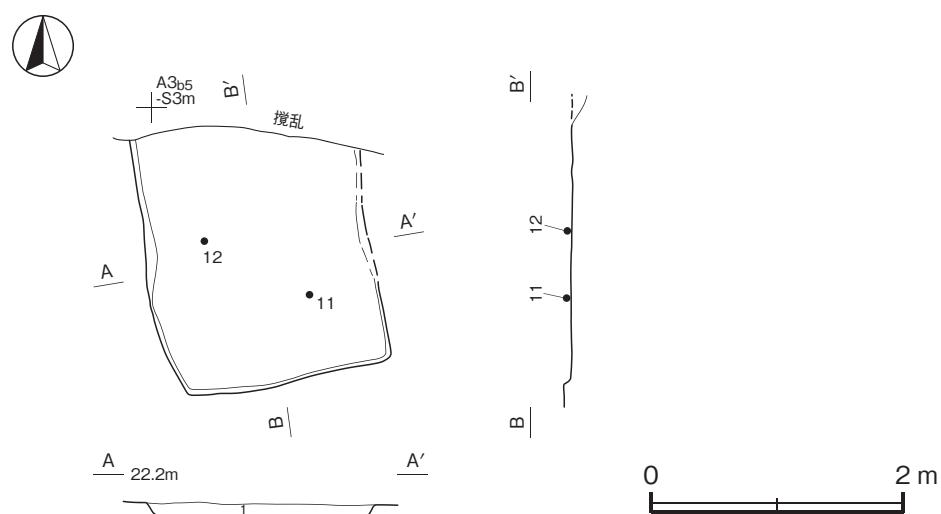
**覆土** 単一層である。自然堆積の可能性が高い。

**土層解説**

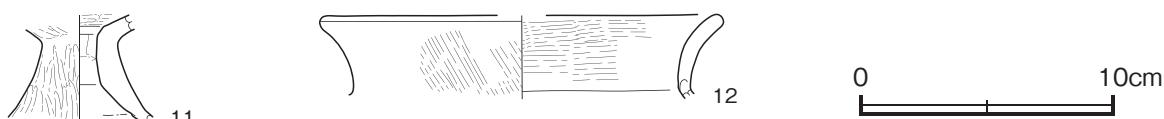
1 明 黄褐色 ロームブロック多量（締まり強い）

**遺物出土状況** 土師器片21点（器台1、高坏1、甕19）が床面直上から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から古墳時代前期に位置づけられる。炉やピットが確認できなかったことから性格は不明である。



第17図 第1号堅穴遺構実測図



第18図 第1号堅穴遺構出土遺物実測図

第1号堅穴遺構出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師器	器台	-	(4.4)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	受部外面磨き 脚部外面磨き	内面磨き 内面ナデ 脚部穿孔不明	覆土下層 30%
12	土師器	甕	[16.0]	(3.3)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目後、ナデ 内面ハケ目	覆土下層 5%	

(3) 土坑

**第 14 号土坑** (第 19 図)

**位置** 調査区東側 A3d4 ~ A3d5 区, 標高 22 m ほどの台地東部に位置している。

**重複関係** 第 2 号墳の周溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部は第 2 号墳の周溝によって掘り込まれており, 東西軸 1.8 m で, 南北軸は 2.2 m しか確認できなかった。不整な方形を呈する。長軸方位は, N - 20° - E である。深さは 0.3 m で, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

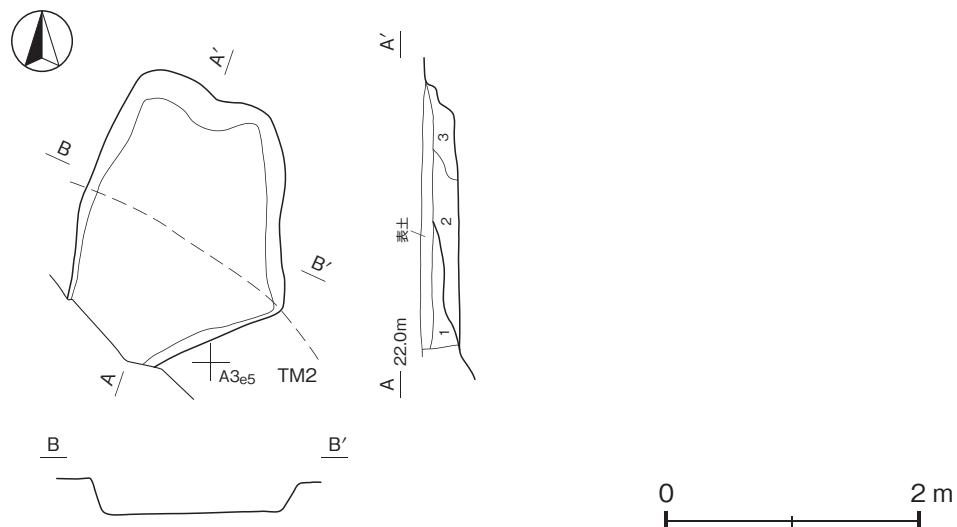
**覆土** 2 層に分層できる。第 2 層は第 2 号墳の周溝覆土である。本跡の覆土である 3・4 層は, ロームブロックを含んでおり, 埋め戻されている可能性が想定できる。

**土層解説**

1 暗 褐 色 焼土粒子微量, ローム粒子多量 (締まり強い)	3 明 黄 褐 色 ロームブロック中量, ローム粒子多量
2 暗 褐 色 炭化粒子微量, ロームブロック中量	

**遺物出土状況** 土師器片 4 点 (壺) が覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 重複関係から古墳時代前期～中期と考えられる。



**第 19 図** 第 14 号土坑実測図

**第 16 号土坑** (第 20 図)

**位置** 調査区中央 A3g1 区, 標高 22 m ほどの台地南東部に位置している。

**重複関係** 第 2 号墳の周溝を掘り込み, 第 1 号地下壕に掘り込まれている。

**規模と形状** 径 1.40 m の隅丸方形である。深さは 0.4 m で, 底面は緩やかな凹凸をなし, 断面は逆台形状である。

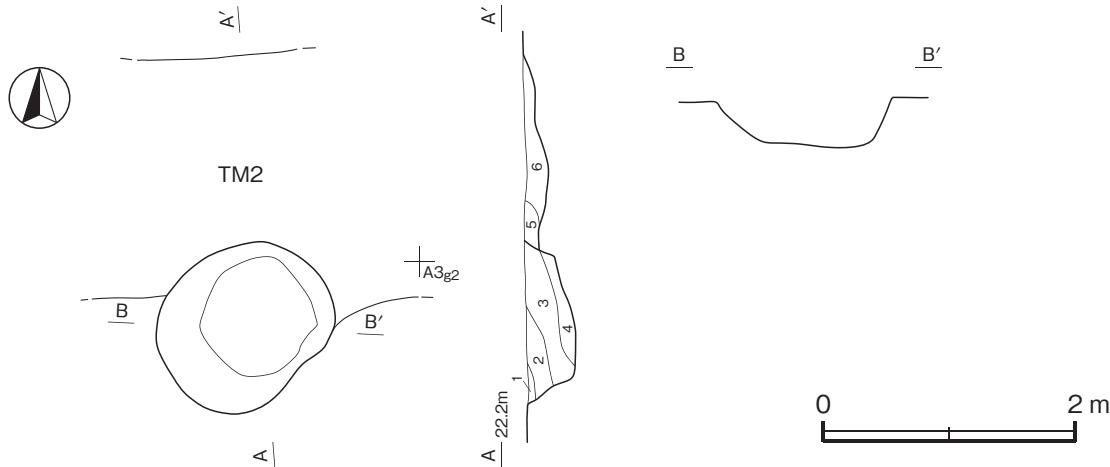
**覆土** 4 層に分層できる。北側からの流入が認められ, 自然堆積とみられる。それらは第 2 号墳の墳丘盛土に由来する可能性が考えられる。5・6 層は第 2 号墳の周溝覆土である。

#### 土層解説

- |                         |                                   |
|-------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量（締まり強い）  | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、ローム粒子中量（締まり強い） |
| 2 明黄褐色 ロームブロック多量（締まり強い） | 6 にぶい黄褐色 ローム粒子多量                  |
| 3 暗褐色 ロームブロック微量、ローム粒子中量 |                                   |
| 4 黄褐色 ロームブロック多量（締まり強い）  |                                   |

**遺物出土状況** 土師器片9点（高杯1, 壺3, 瓢5）が覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土した土器から古墳時代中期～後期に位置づけられる。



第20図 第16号土坑実測図

#### 第25号土坑（第21・22図）

**位置** 調査区南部のB2a4～B2a5区、標高21.9mの台地南側に位置している。

**重複関係** 第8号地下壕の陥没によって掘り込まれている。

**規模と形状** 径1.05mの円形である。深さは0.95mで、底面は狭小であり、断面は漏斗状である。

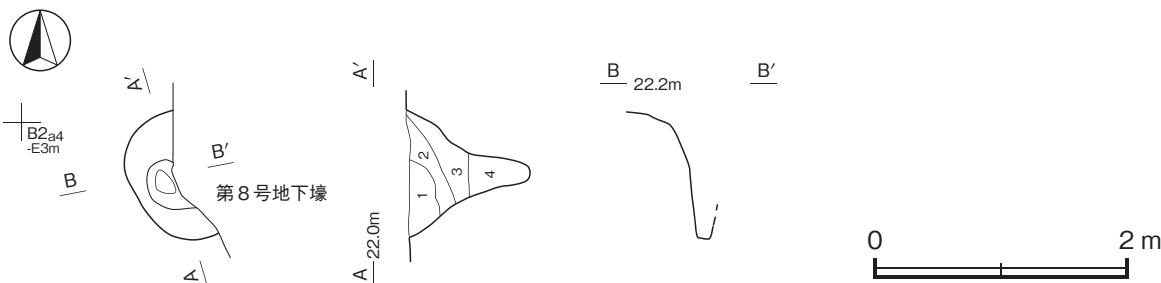
**覆土** 4層に分層できる。その堆積状況から自然堆積とみられる。

#### 土層解説

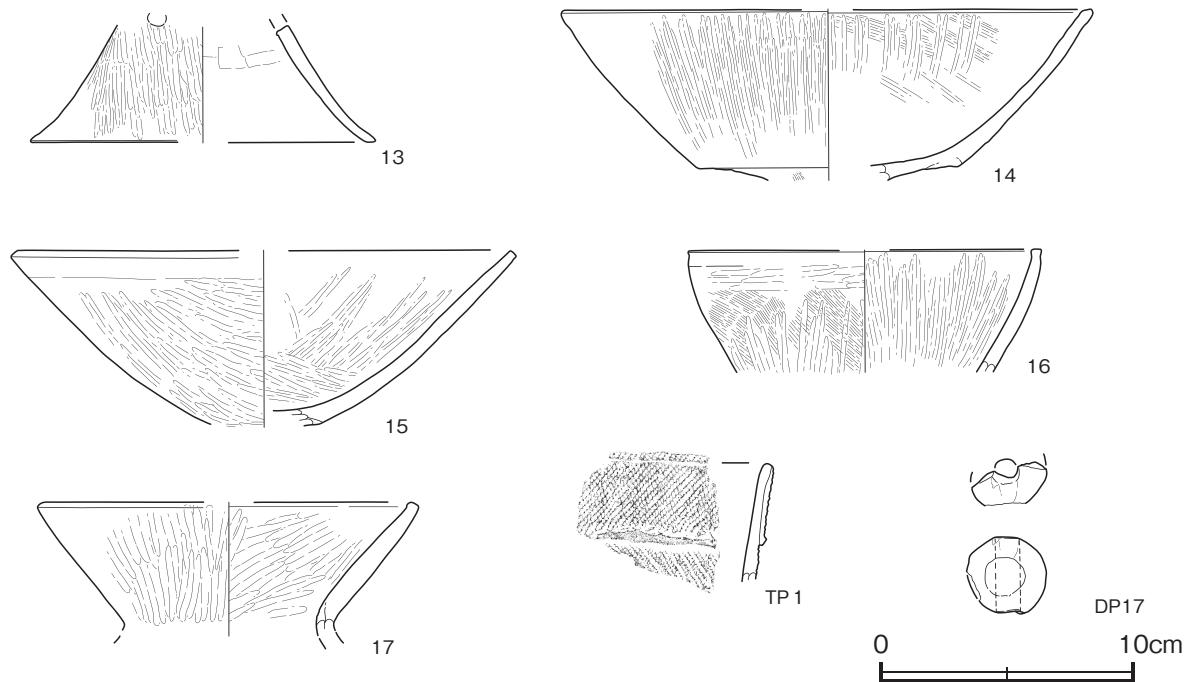
- |                       |                |
|-----------------------|----------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子少量（締まり強い） | 3 暗褐色 焼土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量         |                |

**遺物出土状況** 弥生土器1点（壺）、土師器片28点（器台1, 高杯7, 壺10, 瓢10）が覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から古墳時代前期前半と位置づけられる。その形態から、住居跡の貯蔵穴の可能性が考えられるが、周囲からは柱穴等は検出できなかった。



第21図 第25号土坑実測図



第22図 第25号土坑出土遺物実測図

第25号土坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
13	土師器	器台	-	(4.6)	[13.7]	石英	にぶい黄橙	普通	脚部外面磨き 脚部内面ヘラナデ 脚部孔数不明	覆土中	30%
14	土師器	高坏	[21.0]	(6.8)	-	石英・海綿骨針	橙	普通	坏部外面磨き 坏部内面ハケ目後, 磨き	覆土中	20%
15	土師器	高坏	[20.0]	(7.0)	-	石英・黑色粒	橙	普通	口縁端部外面ナデ 坏部外面磨き 坏部内面磨き	覆土中	20%
16	土師器	壺	[14.0]	(4.9)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外面ハケ目後, 磨き 口縁部内面磨き	覆土中	20%
17	土師器	壺	[15.2]	(4.9)	-	長石・石英	暗灰黃	普通	口縁部外面磨き 口縁部内面磨き	覆土中	10%

番号	種別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
TP 1	弥生	壺	石英・黑色粒	橙	口唇部繩文原体によるキザミ 口縁部外面單節繩文 LR 頸部外面 RL + 2R 付加条1種繩文 口縁部内面ヘラナデ	覆土中	5% PL12

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特 徵	出土位置	備 考
DP17	土玉	3.0	(3.2)	1.0	10.9	長石・石英	一方向からの穿孔 ナデ	覆土中	50%

表4 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
14	A3d4	N - 20° - E	不整方形	2.2 × 1.8	30	平坦	外径	人為	土師器	本跡→TM2
16	A3g1	-	円形	1.4	40	凹凸	外径	自然	土師器	TM2 → 本跡
25	B2a4	-	円形	1.05	95	平坦	有段	自然	弥生土器, 土師器	本跡→第8号地下壕

### 3 近代の遺構と遺物

当時代の遺構は、地下壕9基、不明施設1基、溝5条、土坑13基が確認できた。以下、遺構及び遺物について記述する。

#### (1) 地下壕

##### 第1号地下壕 (第23~34図)

**位置** 調査区中央 A2c7 ~ A2i10 区、標高 22 m ほどの台地南東部に位置している。

**重複関係** 作業道 (SD16) が第4号地下壕に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区域外まで延びており長さ 26.4 m までしか確認できなかった。幅 1.6 m の北側出入り口から真南に向かって 11 m 下り、南東方向 (N - 25° - W) に屈曲して延びる。さらに南東方向へ下ると、一度括れて幅 0.9 m の幅狭の通路となる。断面は箱形を呈しているが、南端部は壁面が構築されていない。地表から掘り込む開削式の地下壕であるが、天井部の構造については不明である。北側出入り口部分は 2 段の階段を設け、盛土によって成形し、板材による蹴込み板を設置している。西側壁際にはほぼ等間隔に柱穴が並び、壁材を固定していたものと想定される。

第16号溝は、自然埋没谷の中央底面付近を通り、かつ地下壕構築のための盛土で埋められていることから作業道と考えられる。長さは 27 m しか確認できず、上幅 1.7 m・下幅 0.5 m、主軸方位 N - 50° - W の方位で北西から南東に向かって下っている。底面は狭小な平坦をなしているが、一部で足跡が検出された。断面は逆台形状を呈し、壁面は外傾している。

**覆土** 覆土は大きく 3 つに分けられる。一つは、埋没谷の堆積土 (SPL - L' の 7・8 層、SPN - N' の 13・14・15 層) で、最下層に位置する。黒褐色土を主体とし、締まりが強いのが特徴である。そしてもう一つは、地下壕の構築土で、一度掘削した埋没谷を埋めながら地下壕本体を構築している。埋没谷のかかる SPI - I'・SPJ - J'・SPK - K'・SPL - L'・SPN - N'・SPM - M' で確認され、埋没谷の堆積土に由来する暗褐色土を主体としている。さらに一つは廃絶時の埋土であり、地下壕本体を灰白色粘土塊とロームで主に埋めている。

##### 土層解説 (C-C')

1 暗赤褐色	炭化物・瓦片・礫多量、焼土ブロック中量 (粘性弱い、締まり強い)	7 暗褐色	ロームブロック中量 (締まり強い)
2 暗褐色	細礫少量 (粘性弱い、締まり弱い)	8 褐色	ロームブロック少量 (締まり強い)
3 暗褐色	ロームブロック多量 (締まり強い)	9 褐色	ロームブロック中量、白色粘土粒子 (締まり強い)
4 暗褐色	暗褐色土ブロック中量 (締まり強い)	10 褐色	ロームブロック少量
5 明褐色	焼土ブロック中量 (締まり強い)	11 暗褐色	ローム粒子少量 (締まり強い)
6 褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子少量 (締まり強い)	12 褐色	白色粘土粒子少量 (締まり強い)
		13 褐色	ロームブロック中量 (締まり強い)

##### 土層解説 (I-I')

1 にぶい褐色	砂粒多量、白色粘土ブロック多量	12 暗褐色	ローム粒子・褐色粘土ブロック微量
2 褐色	白色粘土ブロック多量、ロームブロック・砂粒少量	13 暗褐色	ローム粒子微量
3 褐色	ロームブロック・白色粘土ブロック多量	14 黒褐色	ローム粒子中量 (締まり強い、硬化面)
4 褐色	白色粘土ブロック多量、ロームブロック少量 (粘性・締まり強い)	15 極暗褐色	ローム粒子少量
5 褐色	ロームブロック・白色粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)	16 黒褐色	ローム粒子中量 (締まり強い、硬化面)
6 暗褐色	ローム粒子中量	17 極暗褐色	暗褐色土ブロック中量
7 暗褐色	ローム粒子少量	18 暗褐色	暗褐色土ブロック少量
8 暗褐色	ローム粒子微量	19 暗褐色	砂粒中量、ローム粒子少量 (締まり強い、硬化面)
9 暗褐色	ローム粒子少量	20 極暗褐色	暗褐色土ブロック中量
10 暗褐色	ローム粒子微量 (11 層よりローム粒子やや多い)	21 極暗褐色	暗褐色土ブロック中量、白色粘土ブロック少量
11 暗褐色	ローム粒子微量 (10 層よりややローム粒子やや少ない)	22 極暗褐色	暗褐色土ブロック少量
		23 極暗褐色	ローム粒子少量
		24 褐色	暗褐色土ブロック中量、白色粘土ブロック少量 (締まり強い)
		25 暗褐色	ローム粒子少量

26	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
27	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
28	褐	色	暗褐色土ブロック中量	
29	暗	褐	色	ローム粒子少量、白色粘土ブロック微量
30	暗	褐	色	ローム粒子少量
31	暗	褐	色	ローム粒子中量

32	暗	褐	色	ローム粒子少量
33	暗	褐	色	暗褐色土ブロック微量
34	暗	褐	色	ローム粒子少量、暗褐色土ブロック微量
35	褐	色	暗褐色土ブロック中量	
36	褐	色	ローム粒子多量	
37	褐	色	暗褐色土ブロック中量	

#### 土層解説 (J - J')

1	橙	色	白色粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)	
2	にぶい黄褐色	砂粒多量、白色粘土ブロック多量 (締まり強い)		
3	橙	色	白色粘土ブロック・砂粒中量 (締まり強い)	
4	暗	褐	色	炭化粒子・ローム粒子・白色粘土ブロック少量 (締まり強い)
5	暗	褐	色	白色粘土ブロック多量、ローム粒子少量
6	暗	褐	色	白色粘土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量
7	橙	色	白色粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)	
8	橙	色	砂粒多量、白色粘土ブロック中量 (締まり強い)	
9	暗	褐	色	白色粘土粒子中量
10	にぶい橙色	白色粘土ブロック少量 (締まり強い)		
11	にぶい黄橙色	白色粘土ブロック多量 (締まり強い)		
12	にぶい黄橙色	白色粘土ブロック多量 (締まり強い)		
13	暗	褐	色	白色粘土粒子多量
14	褐	色	白色粘土ブロック多量、ロームブロック少量 (粘性・締まり強い)	
15	褐	色	白色粘土ブロック多量、ロームブロック少量 (粘性強い、締まり強い)	
16	暗	褐	色	ロームブロック多量
17	橙	色	ロームブロック多量	
18	暗	褐	色	ロームブロック・白色粘土ブロック少量 (締まり強い)
19	暗	褐	色	ロームブロック・白色粘土ブロック少量
20	明	黄褐色	白色粘土ブロック多量	
21	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
22	暗	褐	色	ローム粒子少量
23	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量、白色粘土ブロック少量
24	暗	褐	色	ローム粒子少量
25	暗	褐	色	ローム粒子少量
26	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量
27	暗	褐	色	ローム粒子少量
28	暗	褐	色	(締まり弱い、木柱痕)

29	暗	褐	色	ローム粒子・白色粘土粒子少量 (粘性・締まり弱い)
30	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量
31	暗	褐	色	ローム粒子少量
32	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
33	暗	褐	色	白色粘土ブロック少量
34	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
35	暗	褐	色	暗褐色土ブロック微量
36	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
37	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量 (締まり強い、硬化面)
38	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
39	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量
40	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量
41	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
42	暗	褐	色	白色粘土ブロック微量
43	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
44	暗	褐	色	ローム粒子少量
45	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量 (締まり強い、硬化面)
46	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量 (締まり強い、硬化面)
47	黒	褐	色	暗褐色土ブロック中量
48	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量 (締まり強い、硬化面)
49	にぶい褐色	暗褐色土ブロック多量 (締まり強い)		
50	極	暗	褐色	暗褐色土ブロック中量
51	暗	褐	色	ローム粒子少量 (締まり強い、硬化面)
52	黒	褐	色	暗褐色土ブロック少量
53	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量 (締まり強い、硬化面)
54	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
55	にぶい黄褐色	暗褐色土ブロック少量 (締まり強い)		
56	黄	褐	色	白色粘土ブロック少量
57	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
58	褐	色	褐色粘土ブロック多量 (粘性強い)	
59	黒	褐	色	暗褐色土ブロック少量
60	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量
61	暗	褐	色	暗褐色土ブロック多量

#### 土層解説 (K - K')

1	暗	褐	色	ロームブロック多量、白色粘土少量、炭化粒子微量 (締まり強い)
2	暗	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子・白色粘土微量 (締まり強い)
3	暗	褐	色	ロームブロック多量、白色粘土少量 (締まり強い)
4	にぶい黄褐色	ロームブロック多量、白色粘土中量 (締まり強い)		
5	暗	褐	色	ロームブロック多量、黑色土少量 (締まり強い)
6	にぶい黄褐色	砂粒多量、白色粘土少量		
7	にぶい黄褐色	白色粘土多量、ロームブロック中量 (粘性・締まり強い)		
8	にぶい黄褐色	黒色土少量 (締まり強い)		
9	暗	褐	色	ロームブロック少量
10	にぶい黄褐色	ロームブロック・白色粘土ブロック多量、黒色土少量 (締まり強い)		
11	にぶい黄褐色	ロームブロック多量、黒色土少量、白色粘土粒子微量		
12	暗	褐	色	ロームブロック・白色粘土中量
13	にぶい黄橙色	ロームブロック多量、白色粘土粒子・黒色土粒子少量 (粘性強い)		
14	にぶい黄褐色	ロームブロック多量、黒色土粒子少量、白色粘土粒子微量		

15	暗	褐	色	ロームブロック・白色粘土粒子少量
16	暗	褐	色	ロームブロック多量 (締まり弱い)
17	にぶい褐色	ロームブロック多量 (締まり弱い)		
18	にぶい褐色	白色粘土ブロック・ロームブロック多量		
19	にぶい黄橙色	ロームブロック・白色粘土ブロック多量		
20	にぶい黄橙色	ロームブロック・白色粘土ブロック多量、黒色土粒子少量		
21	暗	褐	色	ロームブロック少量
22	にぶい黄褐色	ロームブロック多量、黒色土少量		
23	褐	色	ローム粒子・白色粘土粒子微量	
24	暗	褐	色	暗褐色土ブロック少量
25	褐	色	ローム粒子微量	
26	褐	色	暗褐色土ブロック中量、白色粘土少量 (締まり弱い)	
27	褐	色	暗褐色土ブロック少量	
28	褐	色	暗褐色土ブロック少量	
29	褐	色	暗褐色土ブロック多量	
30	暗	褐	色	暗褐色土ブロック微量
31	褐	色	ローム粒子少量	
32	褐	色	ローム粒子中量	

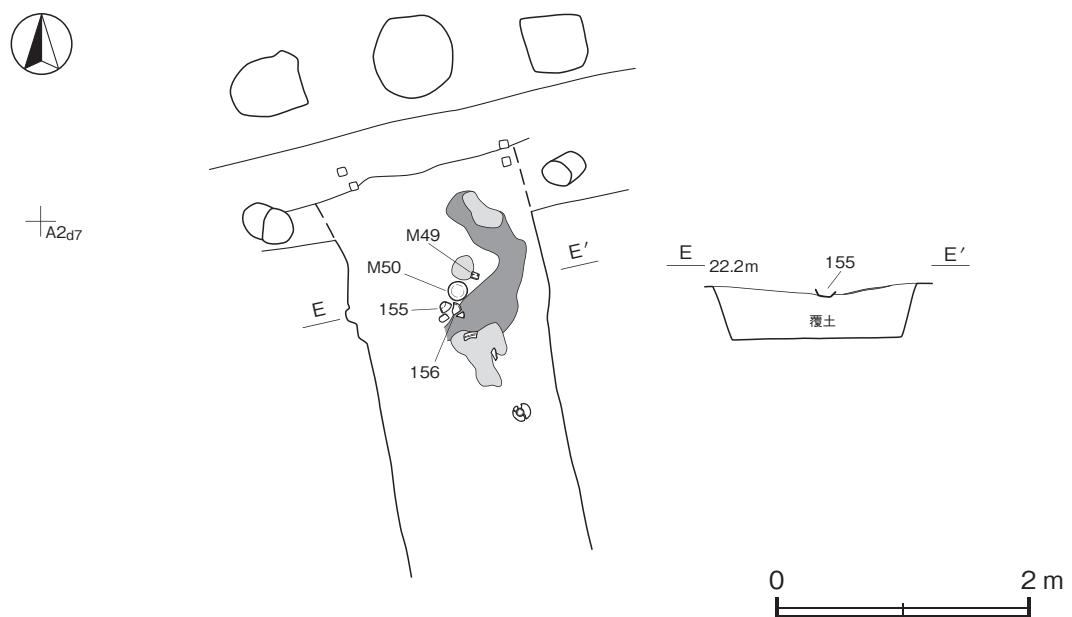
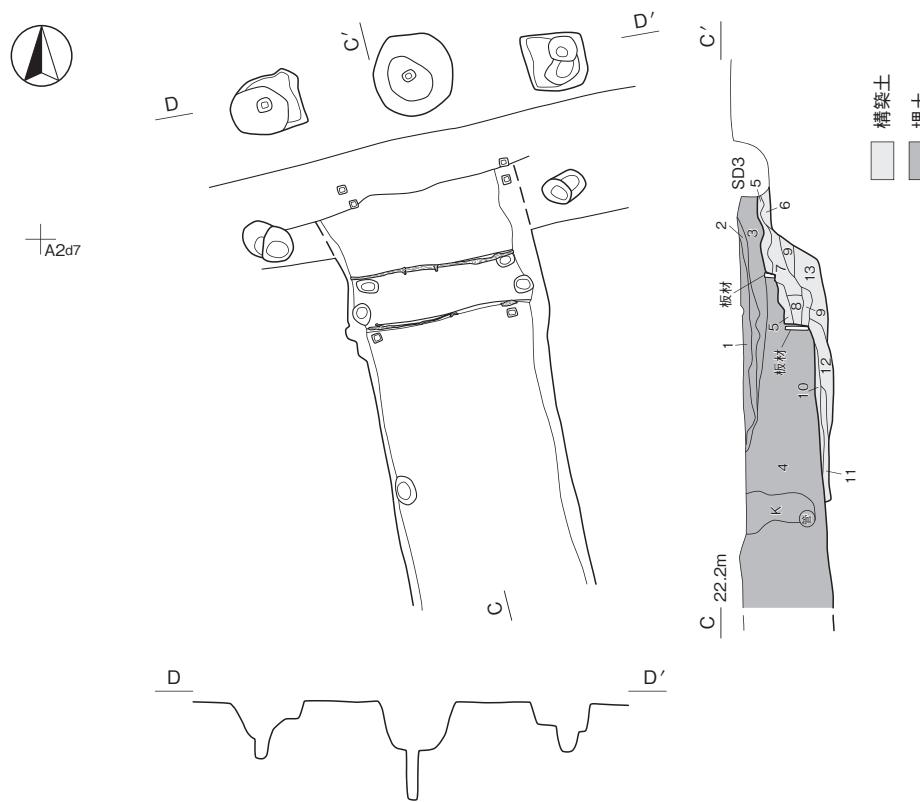
#### 土層解説 (L - L')

1	暗	褐	色	暗褐色土ブロック中量、白色粘土ブロック少量 (埋土一括)
2	暗	褐	色	炭化粒子・ローム粒子少量、灰色粘土ブロック微量 (粘性・締まり強い、硬化面)
3	暗	褐	色	ローム粒子少量、硬化面 (粘性・締まり強い、硬化面)

4	暗	褐	色	白色粘土中量 (粘性強い)
5	褐	色	ローム粒子少量 (掘方埋土)	
6	暗	褐	色	ローム粒子少量 (締まり強い、硬化面)
7	黒	褐	色	ローム粒子少量 (締まり強い、埋没谷堆積土)
8	褐	色	ローム粒子少量 (締まり強い、埋没谷堆積土)	



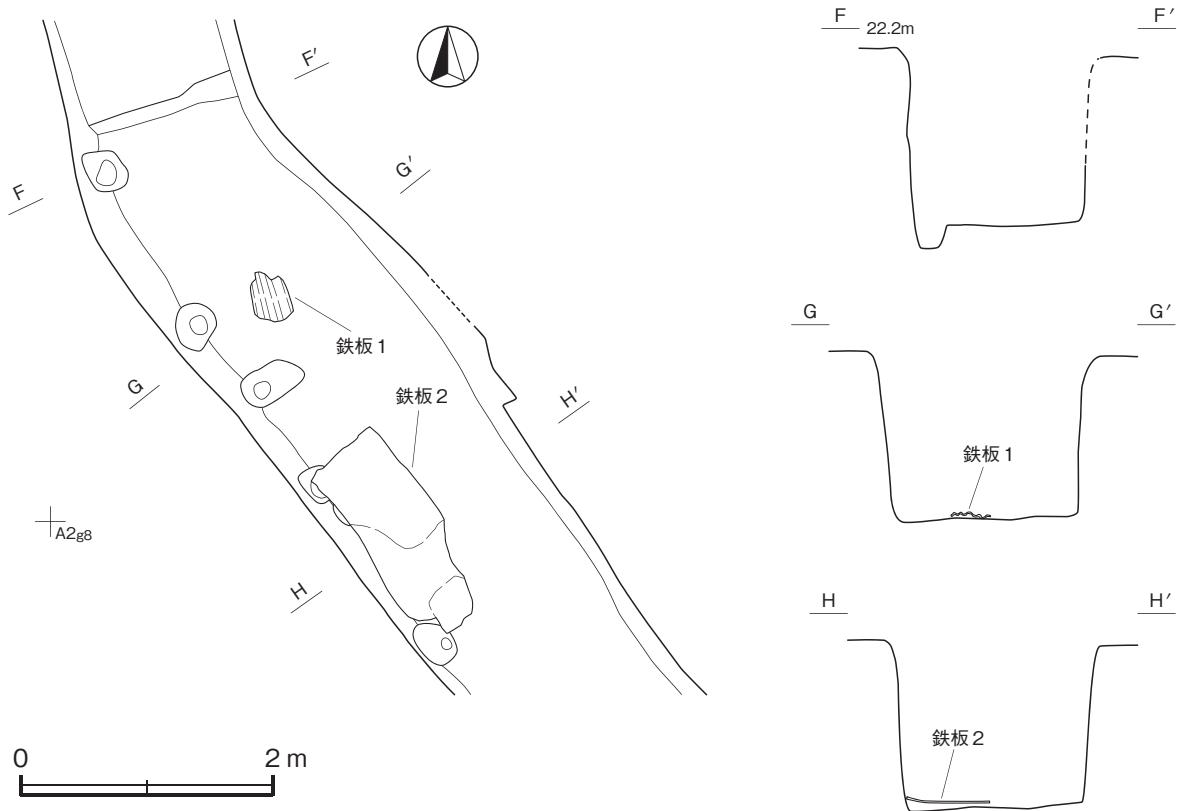
第23図 第1号地下壕実測図(1)



第24図 第1号地下壕出入り口部分実測図

**土層解説 (M-M')**

- |                   |                         |
|-------------------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 暗褐色土ブロック少量 | 5 暗褐色 暗褐色土ブロック少量        |
| 2 極暗褐色 暗褐色土ブロック中量 | 6 暗褐色 灰色粒子多量（締まり強い、硬化面） |
| 3 極暗褐色 ローム粒子微量    | 7 暗褐色 灰色粒子中量（締まり強い、硬化面） |
| 4 暗褐色 暗褐色土ブロック中量  |                         |



第25図 第1号地下壕内遺物出土状況実測図

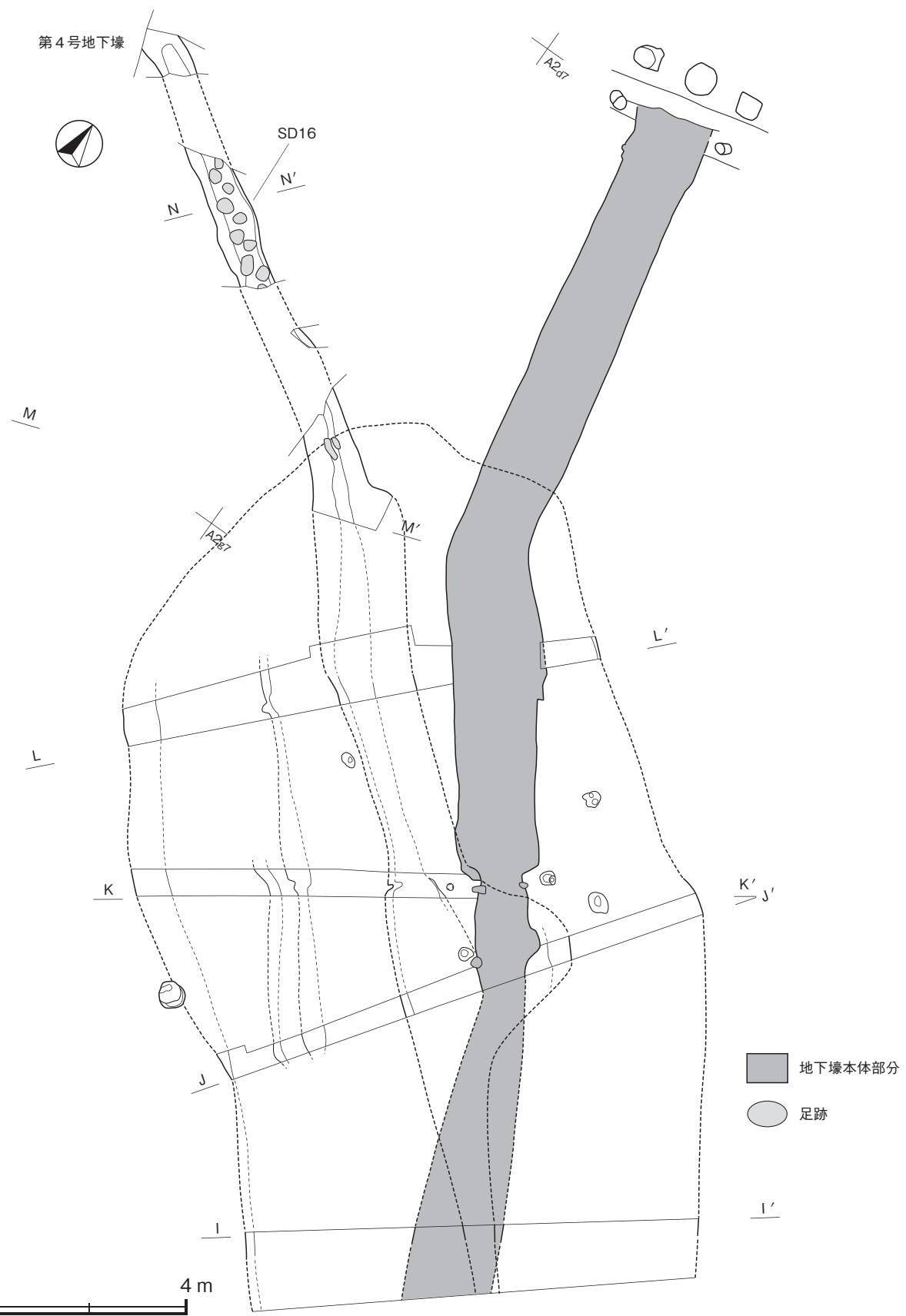
**土層解説 (N-N')**

1 褐 色 暗褐色土ブロック多量・ロームブロック少量（締まり強い）	8 暗 褐 色 暗褐色土ブロック少量
2 黒 褐 色 暗褐色土ブロック中量（締まり強い）	9 黒 褐 色 暗褐色土ブロック少量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量（締まり強い）	10 暗 褐 色 ローム粒子少量
4 暗 褐 色 暗褐色土ブロック多量（締まり強い）	11 暗 褐 色 白色粒子中量（締まり強い, 硬化面）
5 暗 褐 色 暗褐色土ブロック少量	12 黒 褐 色 ローム粒子中量
6 暗 褐 色 暗褐色土ブロック少量	13 暗 褐 色 ローム粒子少量（埋没谷覆土）
7 暗 褐 色 暗褐色土ブロック多量	14 黒 褐 色 ローム粒子少量（締まり強い, 埋没谷覆土）
	15 褐 色 ローム粒子少量（締まり強い, 埋没谷覆土）

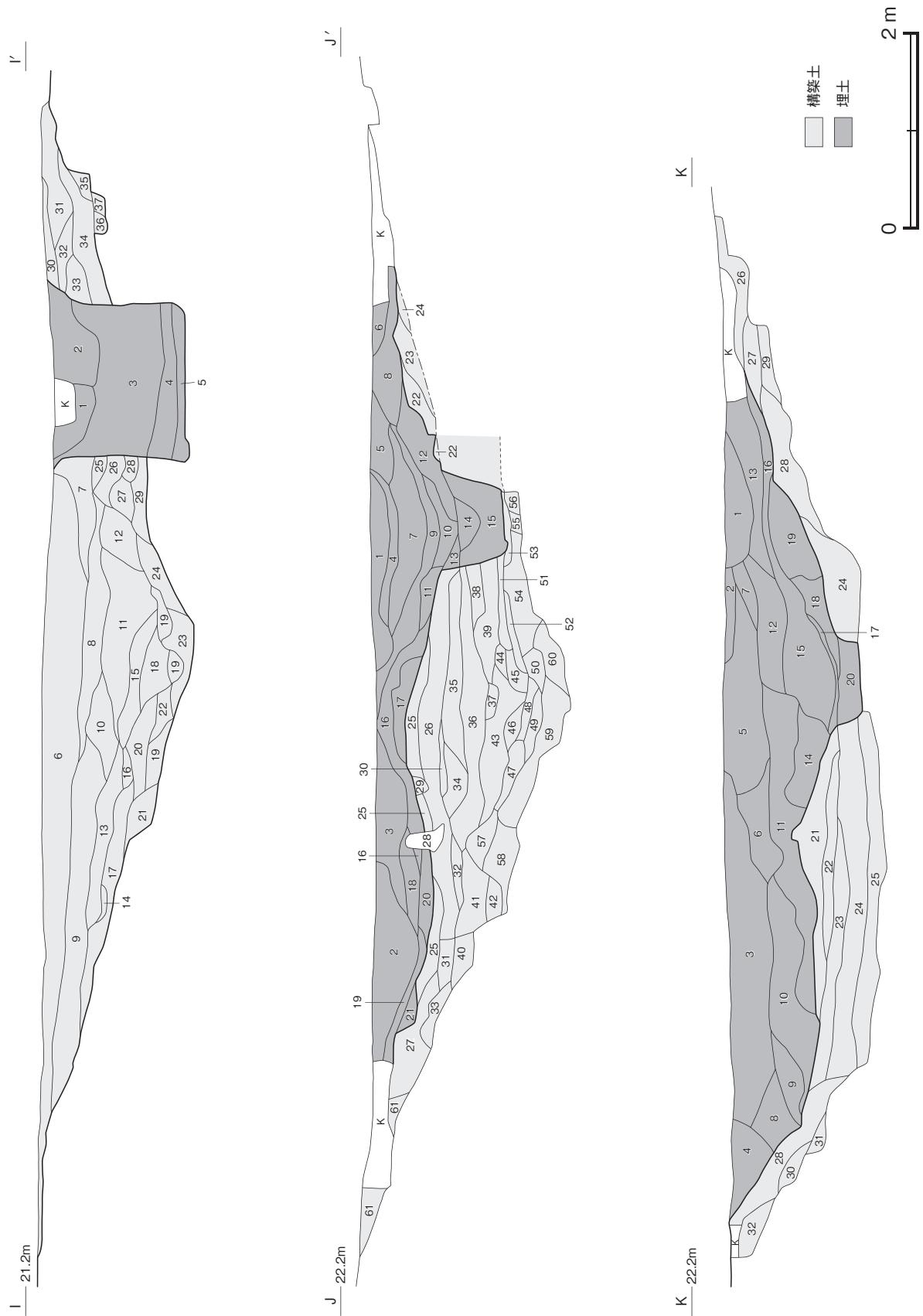
**遺物出土状況** 陶器片 2 点（擂鉢），磁器片 19 点（碗 10，蓋 1，漏斗 1，碍子 7），瓦片 15 点，ガラス製品 5 点（瓶），金属製品 955 点（鏡 1，鉄釘 15，小刀 1，鉄板 3，機械部品 935）が出土している。また、混入と考えられる縄文土器片 2 点（深鉢），土師器片 45 点（壺 6，高壺 5，器台 6，甕 20，壺 8），須恵器片 5 点（壺 3，甕 2），埴輪片 2 点が出土している。出土した遺物は、使用時のものと廃棄時のものとに層位で分けられた。使用時のものは、通路床面上から鉄板が 2 片出土している。鉄板 1 は 40 × 30cm が残存し、なまこ板状を呈する（第 25 図）。鉄板 2 は、165 × 65cm が残存する平坦なもので、通路西壁際から出土している。鉄板下には覆土が堆積していることから、壁材の可能性が考えられる。

廃棄後のものは、2か所から集中して出土している。1か所は、北側出入り口部分の覆土最上層から磁器（18～20），ホーロー鏡（M50），機械部品（M49）が出土している（第 24 図）。焼土および炭化物が伴うことから焼却したものと考えられる。もう 1 か所は、通路西側、掘方埋土直下の凹みから機械部品（M 1～M48）が集中して出土している（第 29 図）。製品の形態を維持しているものではなく、部品になるまで分解されている。機械部品は小形のものが多く、電機器械部品が主体をなしている。

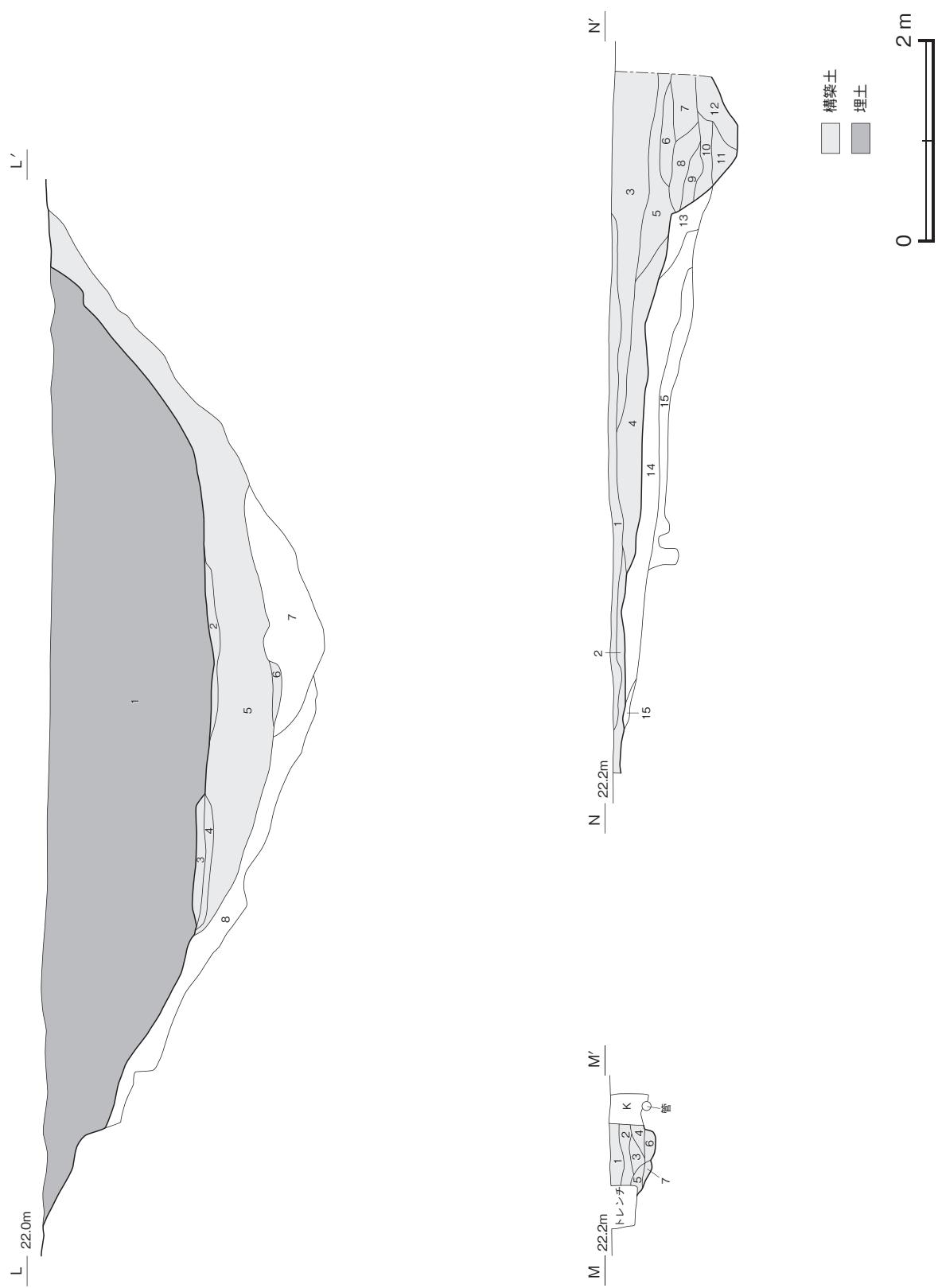
**所見** 昭和時代（太平洋戦争時）のものである。南端部は床面のみで壁面が構築されておらず、未完成の可能性が考えられる。



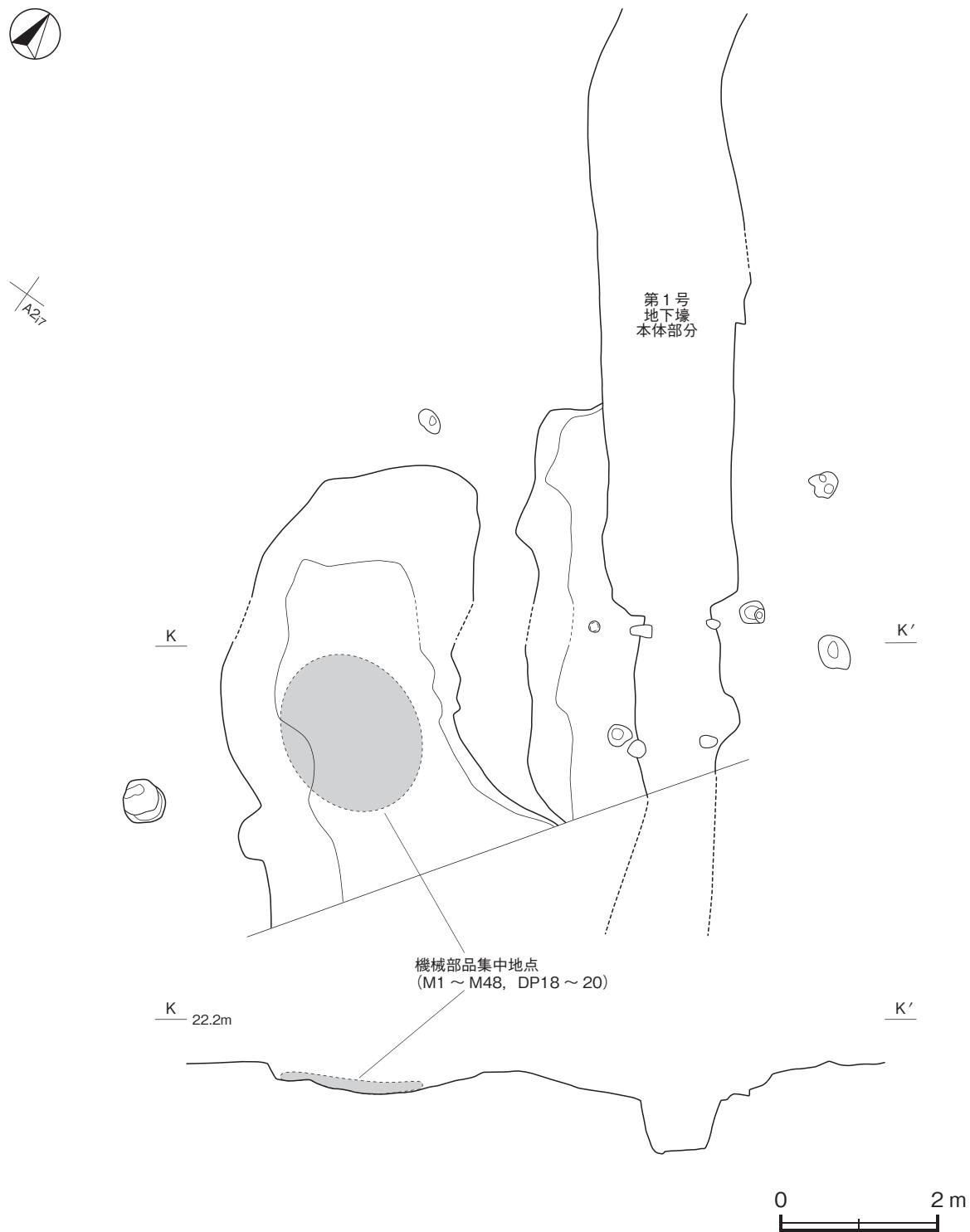
第26図 第1号地下壕掘方実測図



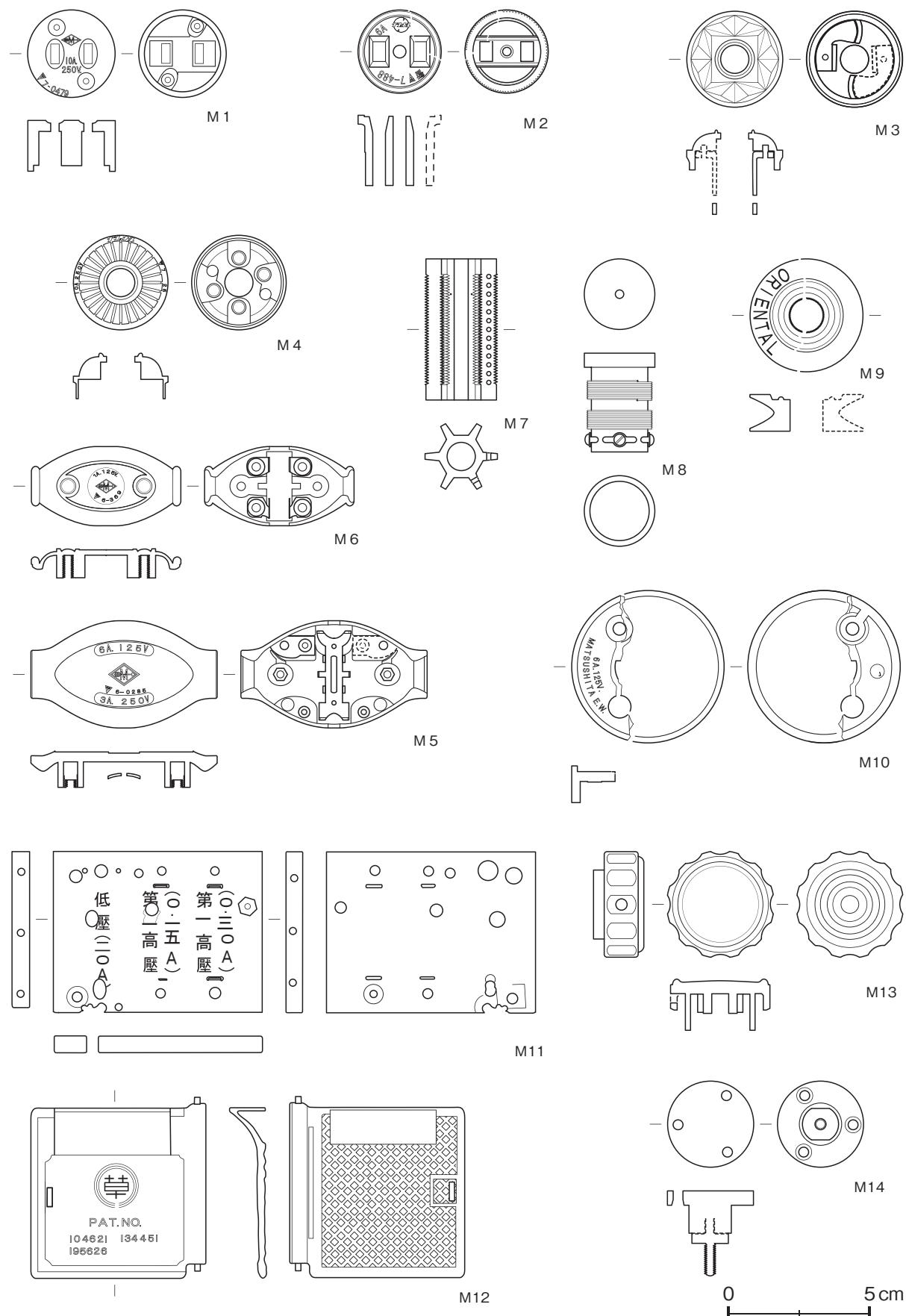
第27図 第1号地下壕土層断面実測図(1)



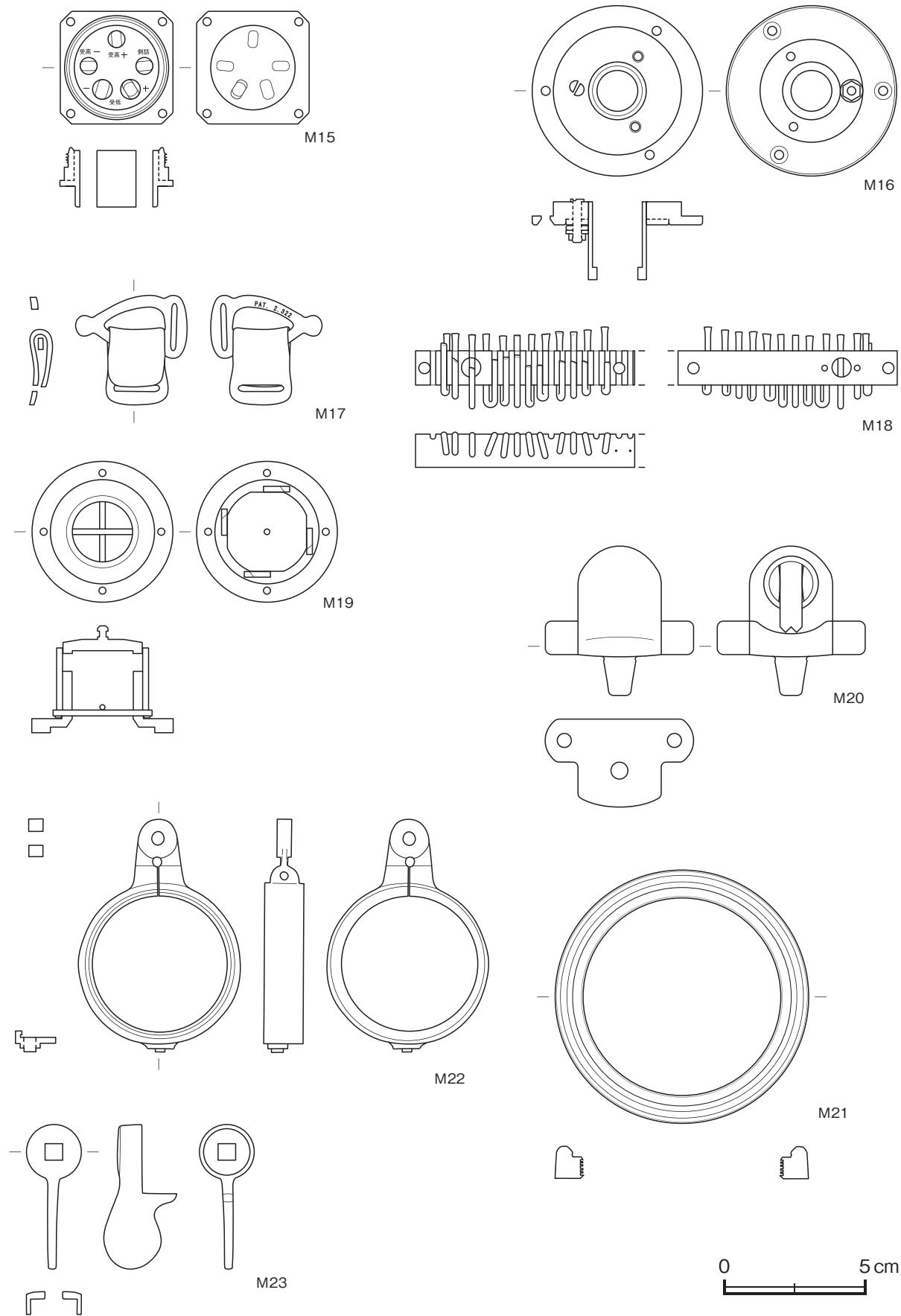
第28図 第1号地下壕土層断面実測図(2)



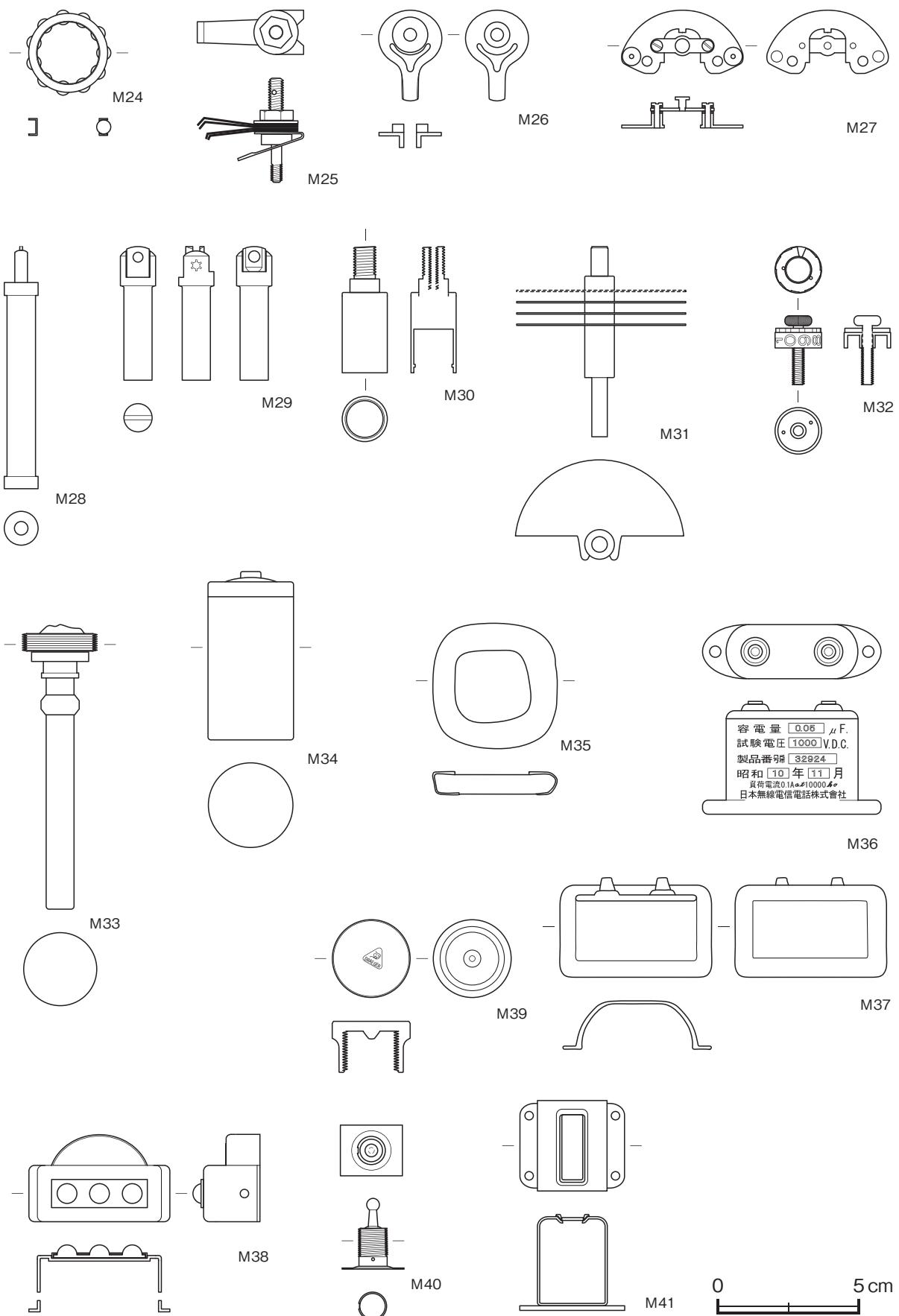
第29図 第1号地下壕廃棄時状況実測図



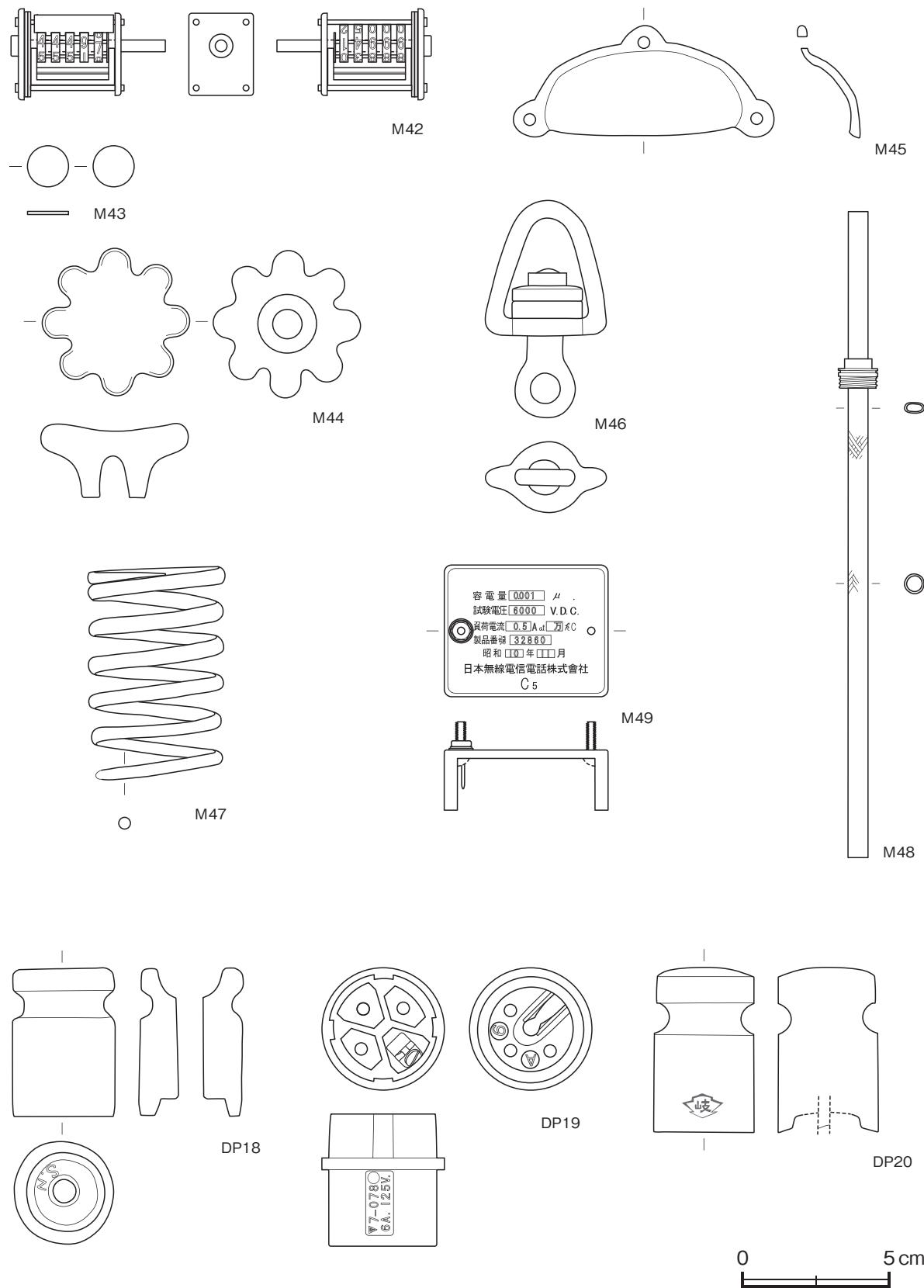
第30図 第1号地下壕出土遺物実測図(1)



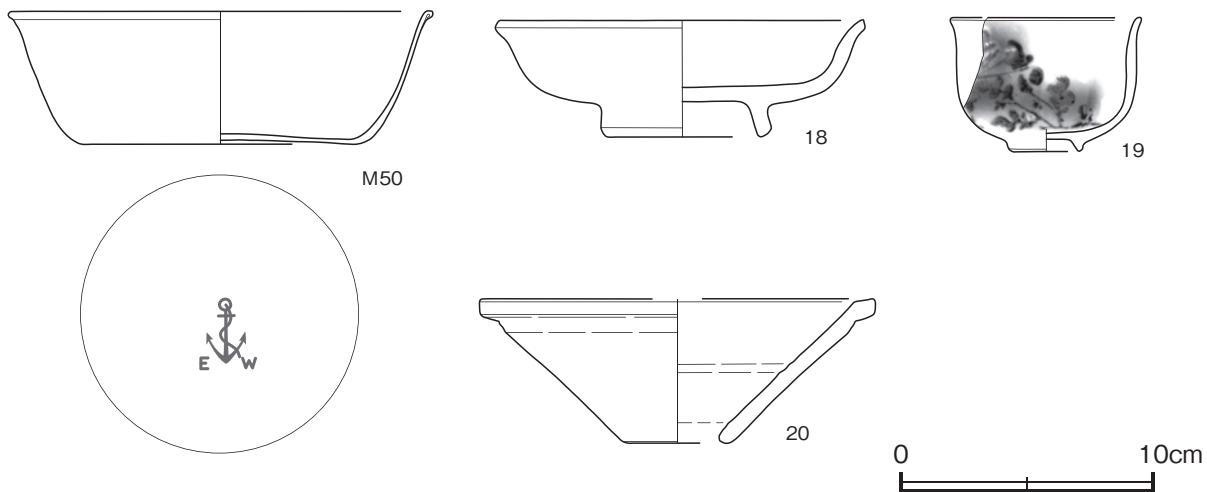
第31図 第1号地下壕出土遺物実測図(2)



第32図 第1号地下壕出土遺物実測図(3)



第33図 第1号地下壕出土遺物実測図(4)



第34図 第1号地下壕出土遺物実測図(5)

第1号地下壕出土遺物観察表（第30～34図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	プラグ受け	3.1	3.1	1.8	10.7	プラスチック	M矢(松下電器株式会社)「10A. 250V.」「(甲種電気用品)7-0479」陽刻	埋土中	PL13
M 2	プラグ受け	3.0	3.0	2.4	6.1	プラスチック	「ナショナル」の商標「6A」「暫(甲種電気製品)7-488」陽刻	埋土中	PL13
M 3	差込プラグ	3.4	3.4	1.6	8.8	プラスチック・銅合金	多面体による装飾	埋土中	PL13
M 4	差込プラグ	3.4	3.4	1.6	5.3	プラスチック	放射状のキザミ文様	埋土中	PL13
M 5	回路部品	3.8	6.6	1.2	17.0	プラスチック・銅合金	M矢(松下電器株式会社)「6A. 125V.」「(甲種電気用品)6-0295」「3A.250V.」陽刻	埋土中	PL13
M 6	回路部品	2.8	5.3	1.5	9.7	プラスチック・銅合金	M矢(松下電器株式会社)「1A. 125V.」「(甲種電気用品)6-369」陽刻	埋土中	PL13
M 7	コイル	5.0	2.5	2.5	12.0	プラスチック	銅線残存せず	埋土中	PL13
M 8	コイル	2.5	2.5	3.6	10.8	プラスチック	銅線残存	埋土中	PL13
M 9	不明	2.0	[2.0]	1.3	4.9	プラスチック	「ORIENTAL」陰刻	埋土中	PL13
M 10	回路部品か	2.2	[2.2]	1.4	5.5	プラスチック	「MATSUSHITA E.W.」「6A.125V」陽刻	埋土中	PL13
M 11	パネル	5.7	7.4	0.6	31.5	プラスチック	「(○・一二〇A)」「第一高壓」「(○・一五A)」「第二高壓」「低壓」「二〇A」陰刻	埋土中	変圧(成)器か PL13
M 12	蓋状部品	6.5	6.2	1.3	15.8	プラスチック・鉄	つまみを有する「(不明商標)」「PAT.NO.」「104621」「134451」「195626」陽刻	埋土中	PL13
M 13	つまみ	3.7	3.7	1.8	16.6	プラスチック・銅合金	側面に1孔	埋土中	PL13
M 14	不明	3.0	3.0	3.1	11.1	プラスチック	ネジ部分銅合金製	埋土中	PL13
M 15	回路部品	4.0	4.0	2.1	52.4	プラスチック・銅合金	「受高-」「受高+」「側話」「-」「受低」「+」陰刻	埋土中	PL13
M 16	不明	6.0	6.0	2.9	49.7	プラスチック・銅合金	中心円筒部分銅合金製	埋土中	PL13
M 17	不明	4.0	4.0	0.7	3.3	プラスチック	2つの部品からなる「PAT 2.322」陰刻	埋土中	PL13
M 18	回路部品	2.7	[7.8]	1.4	25.2	プラスチック	端子か 電線部分銅合金製 左右欠損	埋土中	PL13
M 19	不明	5.0	5.0	3.9	118.1	銅合金(鉛青銅か)	側面方形部分は2個一対で接続され、前後に可動する	埋土中	PL14
M 20	不明	5.5	5.4	4.6	52.5	プラスチック	正面舌状部品は銅合金製	埋土中	PL14
M 21	不明	9.0	9.0	1.1	52.0	銅合金	ネジ山を有しており、中央に別部品を接続するものと想定される	埋土中	PL14
M 22	不明	8.3	5.6	1.4	58.1	銅合金	受部を有しており、中央に別部品をネジで締結するものと想定される	埋土中	PL14
M 23	不明	5.1	1.9	5.6	22.1	銅合金	コック状 頂部円形部分は受部を有しており、他部品を挿入したか	埋土中	PL14
M 24	不明	3.1	3.1	0.7	10.9	鉄	リング状部品と球形部品11個からなる	埋土中	PL14
M 25	不明	3.8	3.8	1.5	17.5	銅合金	4枚の舌状部分をナットで締結している	埋土中	PL14
M 26	不明	3.2	2.3	1.0	7.9	銅合金	下端舌状部分内反り	埋土中	PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 27	不明	2.3	4.4	1.5	8.4	銅合金	2枚の板状部品をネジで締結している	埋土中	PL14
M 28	不明	8.6	1.3	1.3	46.1	銅合金	中空	埋土中	PL14
M 29	アンテナ 部品か	4.8	1.3	1.3	21.9	アルミニウム 合金	頂部に締結部を有する	埋土中	PL14
M 30	不明	4.5	1.6	1.6	19.6	アルミニウム 合金	締結部品	埋土中	PL14
M 31	バリコン	6.9	6.0	3.5	583.2	銅合金	一部欠損	埋土中	PL14
M 32	ダイヤル 部品	2.4	1.7	1.7	9.2	銅合金	0から9までの数字を刻む 隕刻	埋土中	PL14
M 33	把手状部品	9.7	2.8	2.8	52.8	鉄	柄頭部銅合金製	埋土中	PL14
M 34	電池	5.9	3.1	3.1	56.1	-	外装部分は欠損	埋土中	PL14
M 35	電池	4.3	4.3	0.8	17.7	プラスチック	外装プラスチック	埋土中	PL15
M 36	電池	5.1	6.5	1.9	78.3	プラスチック	日本無線電信電話株式会社 昭和10年11月 隕刻	埋土中	PL15
M 37	回路部品か	3.5	[5.5]	1.8	13.2	鉄	頂部に「KMK」陽刻	埋土中	PL15
M 38	不明	3.7	4.8	2.4	16.6	鉄	赤色の円形プラスチック部品を装着する	埋土中	PL15
M 39	つまみ 状部品	2.7	2.7	1.8	33.4	アルミニウム 合金	DRAEGER 社章 「DRAEGER」 隕刻	埋土中	PL15
M 40	スイッチ	2.7	2.2	1.6	6.5	銅合金	音量調節用スイッチか	埋土中	PL15
M 41	外装部品	3.2	3.7	3.4	40.0	銅合金	中央に窓を有する	埋土中	PL15
M 42	ダイヤル	3.1	5.4	2.5	64.4	鉄	5連の数字版を有する	埋土中	PL15
M 43	メダル	0.14 ~ 0.13	0.14 ~ 0.13	0.16 ~ 0.07	0.88 ~ 2.5	銅合金	視触覚弁別器 複数サイズあり	埋土中	PL15
M 44	つまみ 状部品	5	5	2.6	133.9	鉄	鍛造	埋土中	PL15
M 45	外装部品	3.8	8.8	3.8	41.2	鉄	取っ手か	埋土中	PL15
M 46	接続金具	7.4	4.1	2.4	94.3	鉄	三角形環と円形環でなり、横方向の回転軸を持つ	埋土中	PL15
M 47	バネ	7	4.7	4.7	72.9	鉄	6重が残存する	埋土中	
M 48	把手	53	1.0 ~ 2.0	0.6 ~ 2.0	65.5	銅合金	中空の棒状金具の上位に鍔状部品がつく 外装に組紐がみられる	覆土上層	PL15
M 49	外装部品	4.5	5.7	3.0	29.6	プラスチック	日本無線電信電話株式会社 昭和10年11月 陽刻	覆土上層	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP18	碍子	5.1	3.6	3.6	87.1	精緻	底面に「S.N」陽刻 長石軸	埋土中	PL15
DP19	碍子	4.5	4.2	4.2	49.0	精緻	側面に「(甲種電気用品)7-078(不明)6A.125V.」陽刻 長石軸	埋土中	PL15
DP20	碍子	5.7	3.5	3.5	106.0	精緻	外面「岐」ゴム版 鉄針残存 長石軸	埋土中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
M50	金属器	鏡	16.8	5.3	11.1	-	外面 - 青 内面 - 白	口縁端部折り返し 外面青色、内面白色の塗料 底面に青色で桜と鏡をプリント ホーロー製	覆土上層	100% PL16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	磁器	蓋	14.7	4.6	6.1	精緻	白	端反形 長石軸	覆土上層	100% PL16
19	磁器	碗	7.6	5.3	2.7	精緻	白	端反り 外面松枝文	覆土上層	50% PL16
20	磁器	漏斗	[15.7]	5.7	2.7	精緻	灰黄	長石軸	覆土上層	40%

## 第2号地下壕 (第35・36図)

**位置** 調査区東側 A3c3～A3h6 区、標高 22 m ほどの台地南東部に位置している。

**規模と形状** 調査区域を南北に縦断し、その両端は調査区域外にあるため長さ 21.5 m しか確認できなかった。底面までは掘削できず、崩落土の状況から N - 9° - W の方位に延びることが推定された。崩落土の平面検出は、地山ローム層と崩落したローム層との区別を明確にするために基本土層第5層上面の位置まで掘り下げて行った。崩落土には地下壕の走行方向にほぼ沿って崩落したローム層が確認され、その中に平面円形を呈する黒色土の崩落が見られた。その平面円形の黒色土は、ほぼ等間隔に並んでおり、通気口等によって早い段階からの崩落が始まったことに起因する可能性も考えられたが、明確には確認できなかった。なお調査区域外の南側崖面において開口部が見られる。その底面は標高約 15 m で調査区地表面との比高は約 7.5 m ある。

第17号溝は、その位置関係から第2号地下壕へ接続するものと考えられる。ただし第2号地下壕との接続部分は崩落により明確には把握できず、確認された長さは水平距離で 9.7 m である。規模は、上幅 2.7 cm、下幅 0.4 m で、主軸方位は N - 65° - W である。

**覆土** 周囲からの自然の流れ込みはなく、天井部地山層の崩落が観察され、横穴式の地下壕であることがわかった。接続する第17号溝は、レンズ状の堆積をなしていることから、自然堆積と考えられる。第5層上面は、硬化しており通路として使用された可能性が考えられる。

### 土層解説 (A-A')

1 暗 褐 色 ロームブロック多量 (締まり強い)	4 にぶい褐色 ロームブロック多量 (粘性強い)
2 褐 色 ロームブロック多量	5 黄 褐 色 ロームブロック多量 (基本層序3層の崩落)
3 暗 褐 色 ロームブロック中量 (締まり弱い)	6 褐 色 ロームブロック多量 (基本層序4層の崩落)

### 土層解説 (B-B')

1 褐 色 ロームブロック多量	9 褐 色 ロームブロック多量 (締まり弱い)
2 褐 色 (基本層序2層の崩落)	10 褐 色 ロームブロック多量
3 黄 褐 色 (基本層序3層の崩落)	11 褐 色 ロームブロック多量 (締まり弱い、7層に類似)
4 褐 色 ロームブロック多量 (締まり強い)	12 褐 色 ロームブロック多量 (粘性強い、締まり弱い)
5 褐 色 (基本層序4層の崩落)	13 褐 色 ロームブロック多量 (粘性・締まり強い、基本層序6層を含む)
6 灰 白 色 (基本層序5層の崩落)	14 にぶい褐色 ロームブロック多量 (粘性・締まり強い、基本層序5・7層を含む)
7 明 褐 色 (基本層序7層の崩落)	
8 明 褐 色 (基本層序8層の崩落)	

### 土層解説 (C-C')

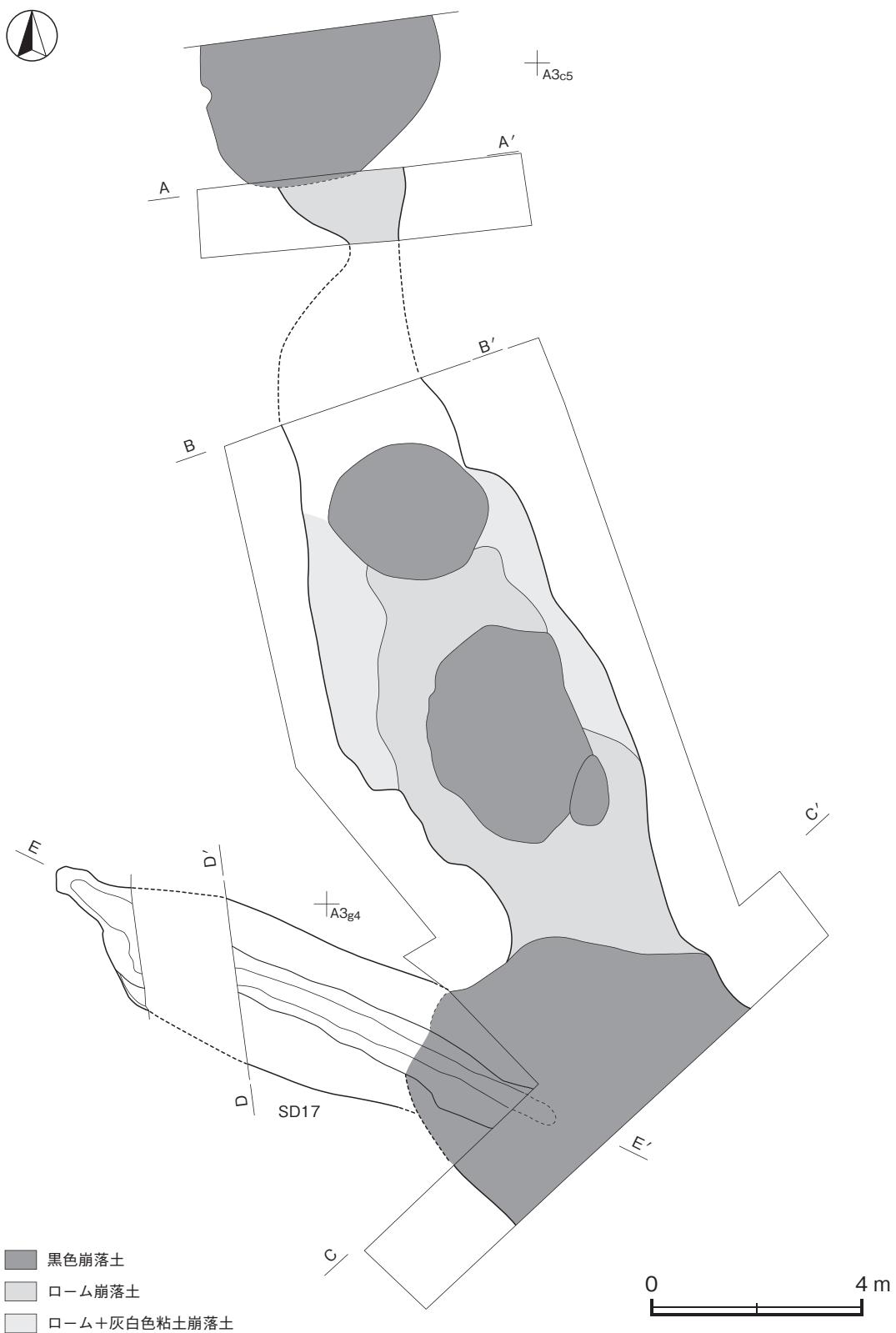
1 暗 褐 色 ロームブロック中量 (締まり強い)	6 暗 褐 色 ローム粒子中量 (締まり弱い)
2 暗 褐 色 ローム粒子・炭化物少量 (締まり弱い)	7 暗 褐 色 ローム粒子中量 (締まり強い)
3 褐 色 ローム粒子中量 (締まり弱い)	8 暗 褐 色 粘土ブロック多量 (粘性強い、締まり強い)
4 暗 褐 色 ローム粒子・炭化物微量 (締まり強い)	9 褐 色 ロームブロック多量
5 黒 褐 色 ローム粒子微量 (締まり弱い)	10 褐 色 ロームブロック多量、砂粒中量

### 土層解説 (D-D')

1 褐 色 ローム粒子中量、炭化物少量 (粘性弱い)	4 暗 褐 色 ロームブロック中量 (締まり弱い)
2 暗 褐 色 ロームブロック少量 (粘性弱い)	5 暗 褐 色 粘土ブロック中量 (締まり強い)
3 暗 褐 色 ローム粒子少量 (粘性弱い)	

**遺物出土状況** 繩文土器片 5 点 (深鉢)、土師器片 42 点 (鉢 1, 高坏 9, 器台 3, 壺 18, 壺 11), 塵輪片 15 点、磁器片 8 点 (碗 7, 碓子 1), 瓦片 2 点、ガラス製品 3 点 (瓶)、金属製品 3 点 (釘 2, 古銭 1) が出土している。いずれも崩落土中から出土しており、周囲からの混入または地下壕崩落後の廃棄である。

**所見** 昭和時代 (太平洋戦争時) のものである。横穴式の地下壕で、天井部は地山層である。現状で確認できる出入り口部分は南側崖面にあり (現在は閉塞)、現地表面下約 7.5 m の位置を南北に走っていたものと推測される。



第35図 第2号地下壕実測図(1)



第36図 第2号地下壕実測図(2)

### 第3号地下壕 (第37・38図)

**位置** 調査区東端部 A3b7～A3f2区、標高21mほどの台地南東端に位置している。

**規模と形状** 調査区域を南北に縦断し、その両端は調査区域外にあるため長さ23.3mしか確認できなかった。底面までは掘削できず、崩落土の状況からN-17°-Wの方位で南北に走っていると推定された。崩落土の平面観察は、地山ローム層と崩落したローム層との区別を明確にするために基本土層第5層上面の位置まで掘り下げて行った。崩落土には地下壕の走行方向にほぼ沿って崩落したロームと白色粘土の混合土が確認され、その中に平面円形を呈するロームの崩落土が見られた。その平面円形のローム崩落土は、ある程度等間隔に並んでいる。そのことから通気口等によって早い段階からの崩落が始まったことによる可能性も考えられたが、明確には確認できなかった。なお調査区域外の南側崖面において開口部が見られる。

**覆土** 横穴式の地下壕であり、天井部地山層の崩落が観察された。また崩落によって大きく周辺の地山層が動いていることが確認できた。A-A'で確認した土層の堆積は、大きく東西に分かれている。まず東半部は、地下壕直上部にあたると想定され、地山由来の土層は大きく混合している。西半は、東半の崩落に伴って基本層序を維持しながら下方へ動いている。

#### 土層解説 (A-A')

1 黒褐色 ロームブロック中量、ローム粒子少量 (締まり弱い)	7 にぶい橙色 砂粒多量 (粘性弱い、締まり強い)
2 暗褐色 ロームブロック多量 (締まり弱い)	8 灰白色 粘土ブロック (大) 多量 (粘性・締まり強い)
3 褐色 ロームブロック多量 (締まり強い)	9 灰白色 粘土ブロック (中～小) 多量 (粘性・締まり強い)
4 暗褐色 ロームブロック中量 (締まり弱い)	10 灰白色 粘土ブロック極多量 (粘性・締まり強い)
5 明褐色 白色 粘土ブロック多量 (締まり弱い)	11 にぶい橙色 粘土ブロック多量 (粘性強い)
6 褐色 ロームブロック多量 (締まり強い)	12 にぶい褐色 砂粒中量 (粘性強い)

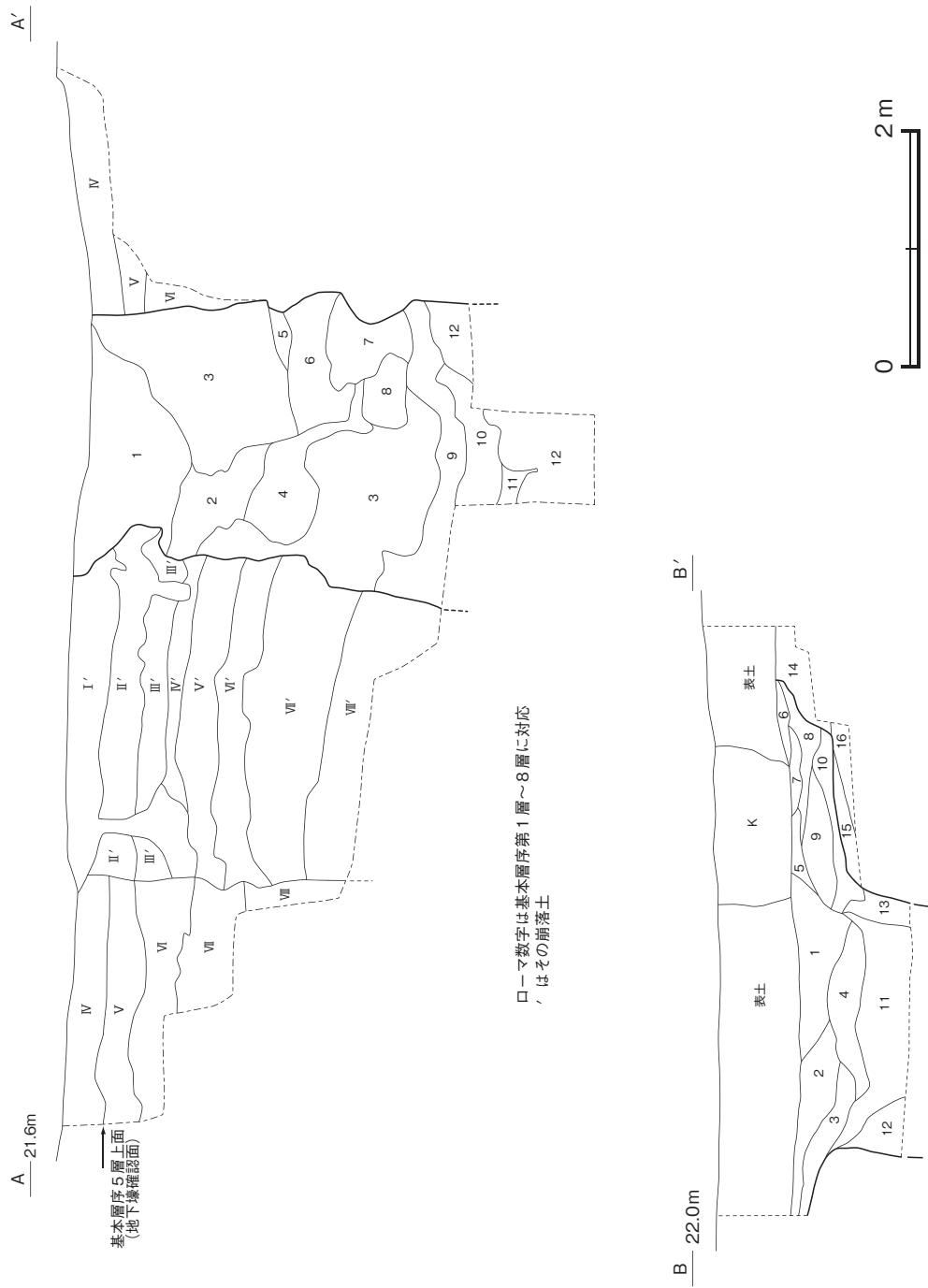
#### 土層解説 (B-B')

1 暗褐色 ロームブロック中量 (締まり強い)	9 暗褐色 ロームブロック多量 (12層に類似)
2 極暗褐色 ロームブロック少量 (締まり強い)	10 暗褐色 ロームブロック中量
3 暗褐色 ロームブロック中量・黒色土ブロック少量	11 暗褐色 ロームブロック・黒色土ブロック中量
4 暗褐色 ロームブロック少量 (締まり強い)	12 暗褐色 ロームブロック多量 (9層に類似)
5 暗褐色 ロームブロック多量	13 暗褐色 (締まり弱い)
6 暗褐色 黒色土ブロック中量・ロームブロック少量	14 褐色 ロームブロック多量
7 暗褐色 ロームブロック中量	15 橙色 ロームブロック多量
8 暗褐色 ローム粒子中量	18 にぶい黄橙色 灰色粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)

**所見** 昭和時代(太平洋戦争時)のものである。横穴式の地下壕である。現状で確認できる出入り口部分は南側崖面にあり(現在は閉塞)、その高さは第2号地下壕出入口とほぼ同レベルである。



第37図 第3号地下壕実測図(1)



第38図 第3号地下壕実測図(2)

#### 第4号地下壕 (第39～42図)

**位置** 調査区中央 A2d4～B2a7 区、標高 22 m ほどの台地南部に位置している。

**重複関係** 第1号地下壕の作業道 (第16号溝) を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北側に出入り口が確認され、N - 17° - W の方位で南に向かって下っている。底面は出入り口部分から南へ 8 m の位置までしか検出できなかったが、下幅約 1 m の通路がまっすぐ延びている。出入り口からは階段が続き、10段まで確認できた。階段はまず地山をスロープ状に成形し、ロームを主体とした盛土を 2～3回に重ねた後、砂で整形している。蹴上げ板は残存していなかったが、それを固定した杭の跡と想定される小ピットが階段両脇に認められた。

**覆土** 覆土は出入り口付近ではロームブロックが含まれており、埋め戻されている。しかし、出入り口から約 17 m の位置、A2h6 グリッド付近から南側は、ロームの崩落土が観察され、横穴式になる可能性が考えられる。天井部の崩落による周辺地山層の大きな変形は認められず、比較的浅い地下壕であった可能性が考えられる。

##### 土層解説 (A-A', B-B' 共通)

1	褐	色	ロームブロック中量 (締まり強い)	7	暗	褐	色	ロームブロック中量 (締まり強い、間仕切り溝)	
2	暗	褐	色	ローム粒子少量 (締まり強い)	8	極暗	褐色	ローム粒子中量 (締まり弱い、間仕切り溝掘方)	
3	暗	褐	色	ロームブロック中量 (締まり強い)	9	暗	褐	色	ロームブロック多量 (締まり強い)
4	暗	褐	色	ロームブロック多量、黒色土粒子中量 (締まり強 い、6層に類似)	10	褐	色	ロームブロック・白色粒子少量 (締まり強い)	
5	黒	褐	色	ロームブロック多量 (締まり強い)	11	暗	褐	色	ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量 (締 まり強い)
6	暗	褐	色	ロームブロック多量、黒色土粒子中量 (締まり強 い、4層に類似)					

##### 土層解説 (C-C')

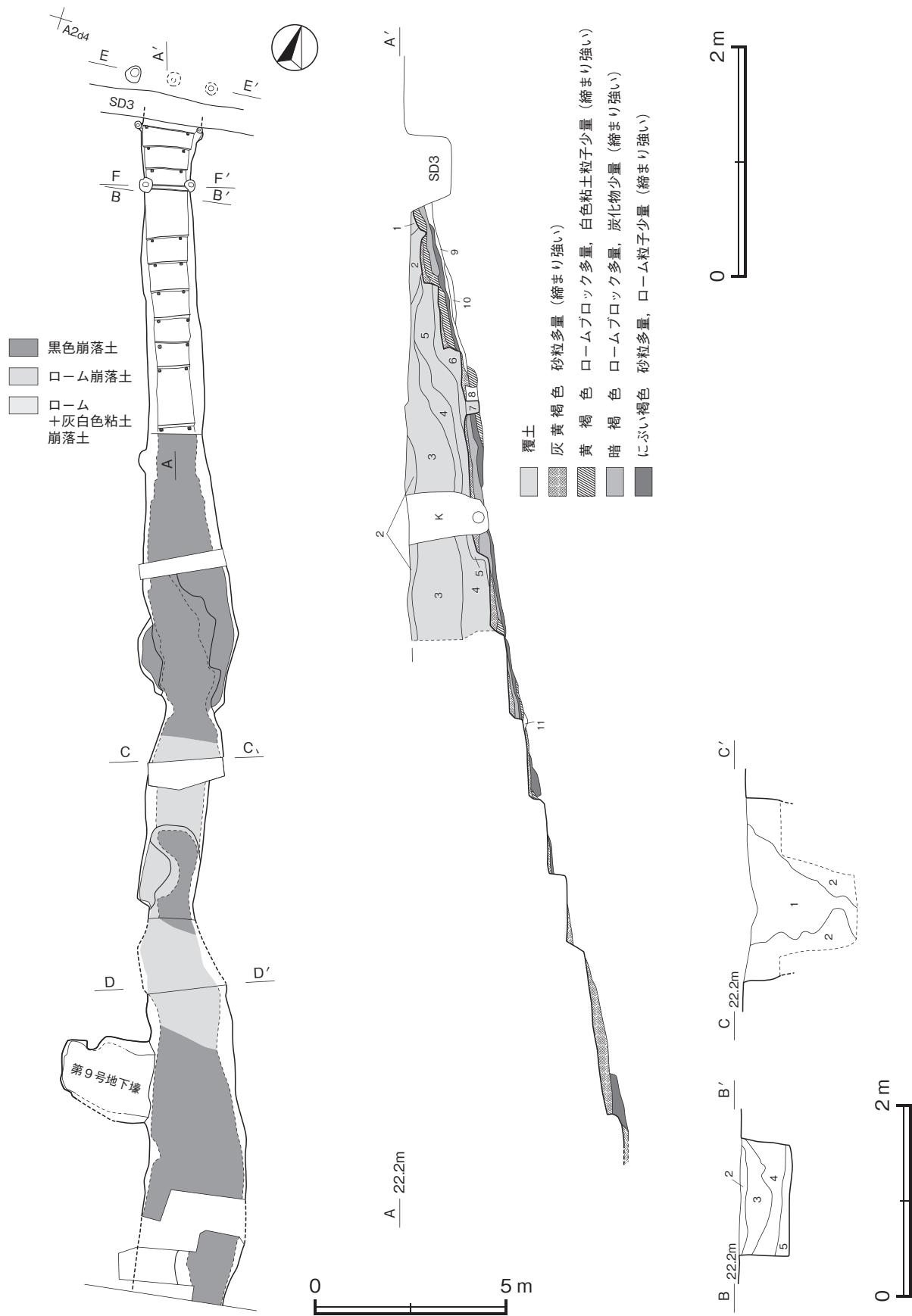
1	灰	褐	色	砂粒多量、灰白粘土ブロック中量 (締まり強い)	2	褐	色	ロームブロック多量
---	---	---	---	-------------------------	---	---	---	-----------

##### 土層解説 (D-D')

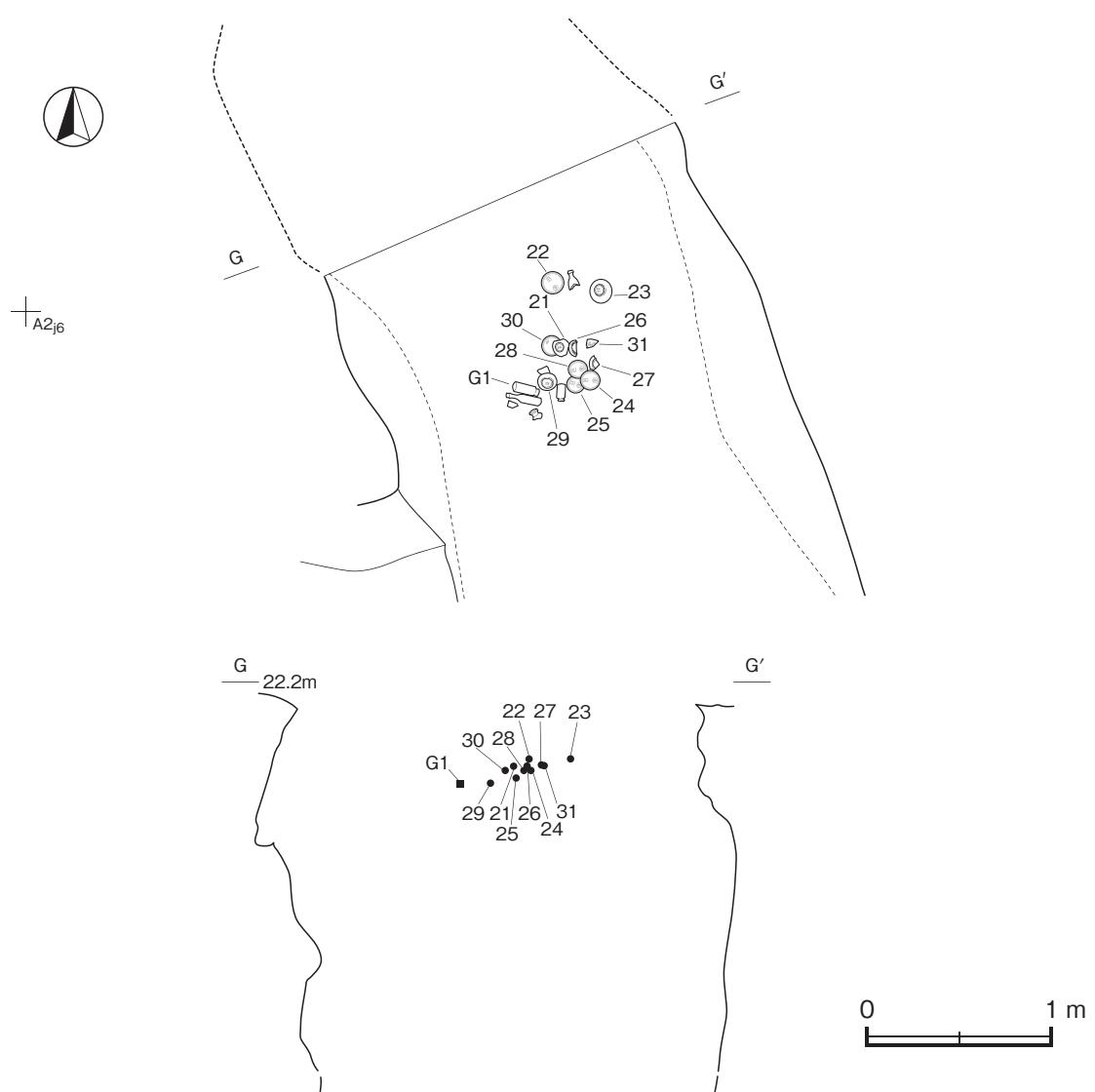
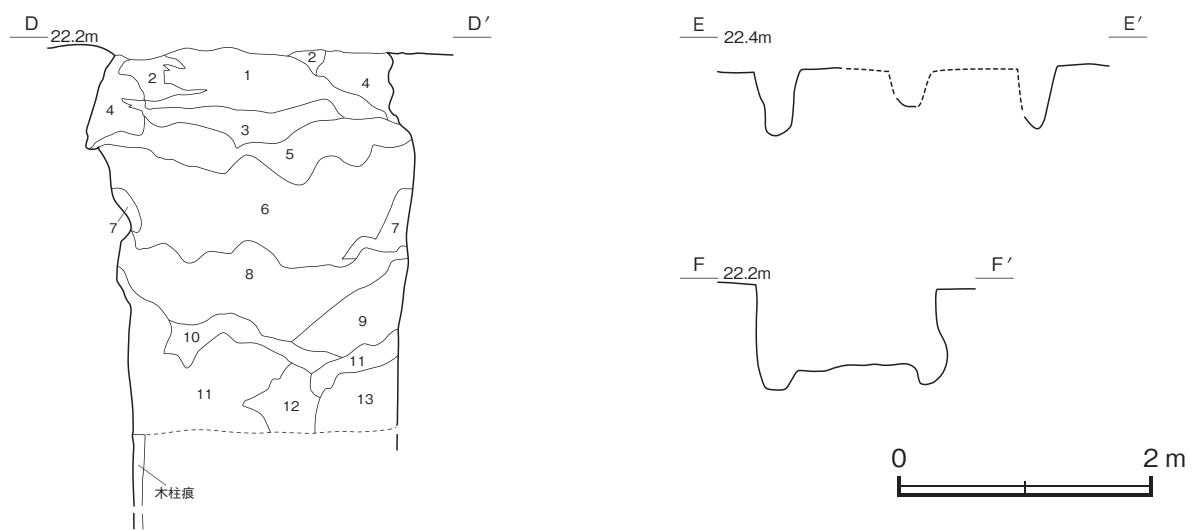
1	灰	褐	色	砂粒多量、粘土ブロック中量 (粘性弱い、締まり 強い)	7	褐	灰	色	粘土ブロック多量 (粘性強い)
2	暗	褐	色	ロームブロック中量 (締まり強い)	8	褐	色	ロームブロック多量 (締まり強い)	
3	黒	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量 (締まり強い)	9	明	褐	灰色	粘土ブロック多量 (粘性強い)
4	褐	色	ロームブロック多量 (締まり強い)	10	褐	色	ロームブロック中量		
5	暗	褐	色	ロームブロック多量 (締まり弱い)	11	明	褐	灰色	粘土ブロック多量 (粘性強い)
6	褐	色	ロームブロック多量	12	灰	褐	色	砂粒中量 (締まり強い)	
				13	灰	褐	色	砂粒多量 (粘性強い、締まり強い)	

**遺物出土状況** 陶器 2 点 (擂鉢), 磁器 19 点 (小皿 10, 碗 6, 蓋 1, 瓶 1, おろし金 1), 瓦片 10 点, ガラス製品 6 点 (瓶) が出土している。また、縄文土器片 3 点 (深鉢), 弥生土器片 9 点 (壺), 土師器片 58 点 (高坏 12, 器台 6, 龍 22, 壺 18), 須恵器片 1 点 (壺), 塙輪片 2 点, 土製品 4 点 (土玉) が出土しているが、いずれも混入である。遺物は A2j6 グリッド付近でまとめて出土している。磁器小皿 (21～30) の見込みには「霞ヶ浦海軍航空廠」、底面には「岐 1065」の銘があり、美濃窯業株式会社製である。覆土上層から出土しており、地下壕陥没による凹みに廃棄されたものと想定される。

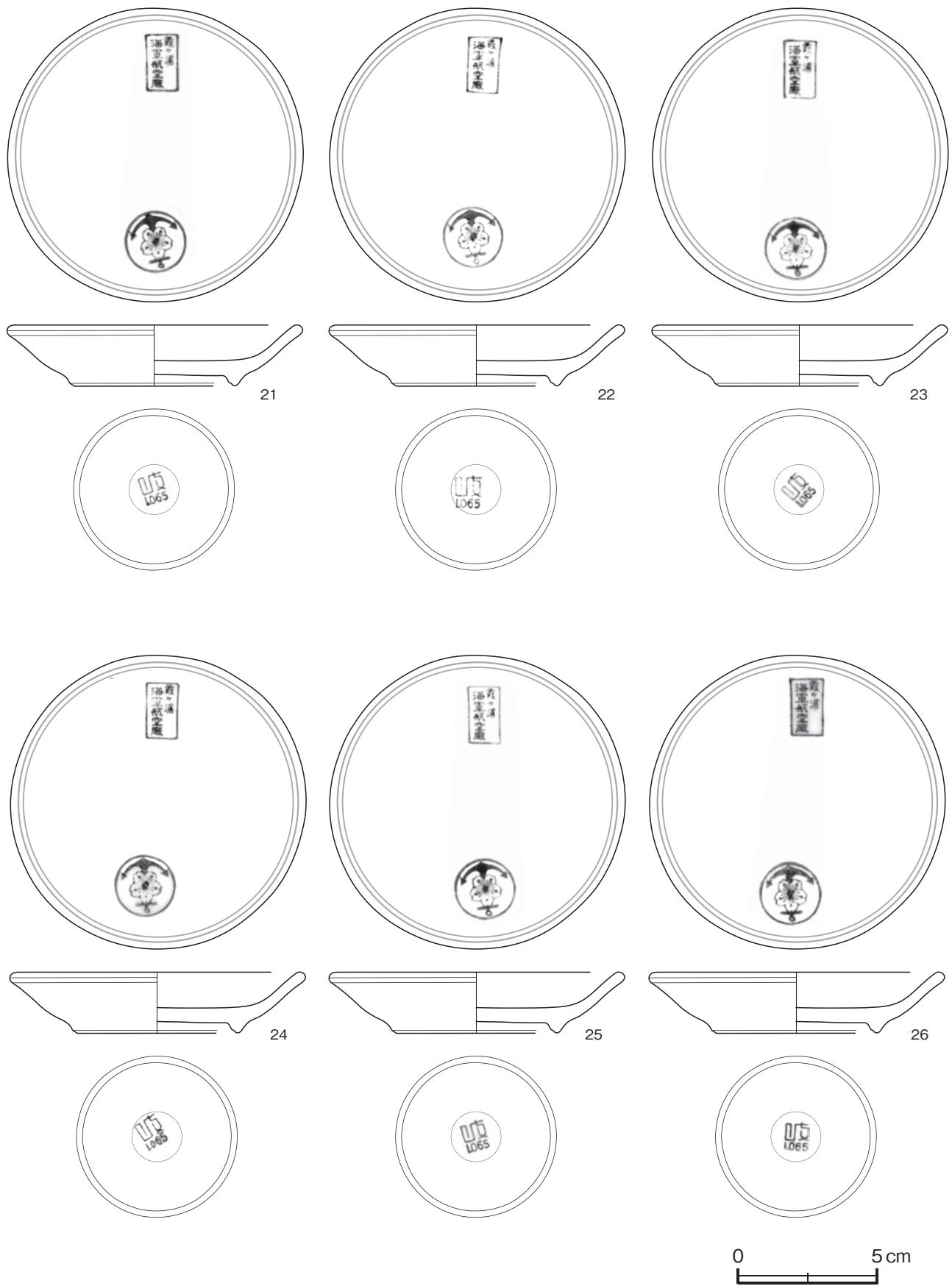
**所見** 昭和時代 (太平洋戦争時) のものである。出入り口付近は地上から掘り込む開削式、南半は横穴式の地下壕である可能性が考えられる。



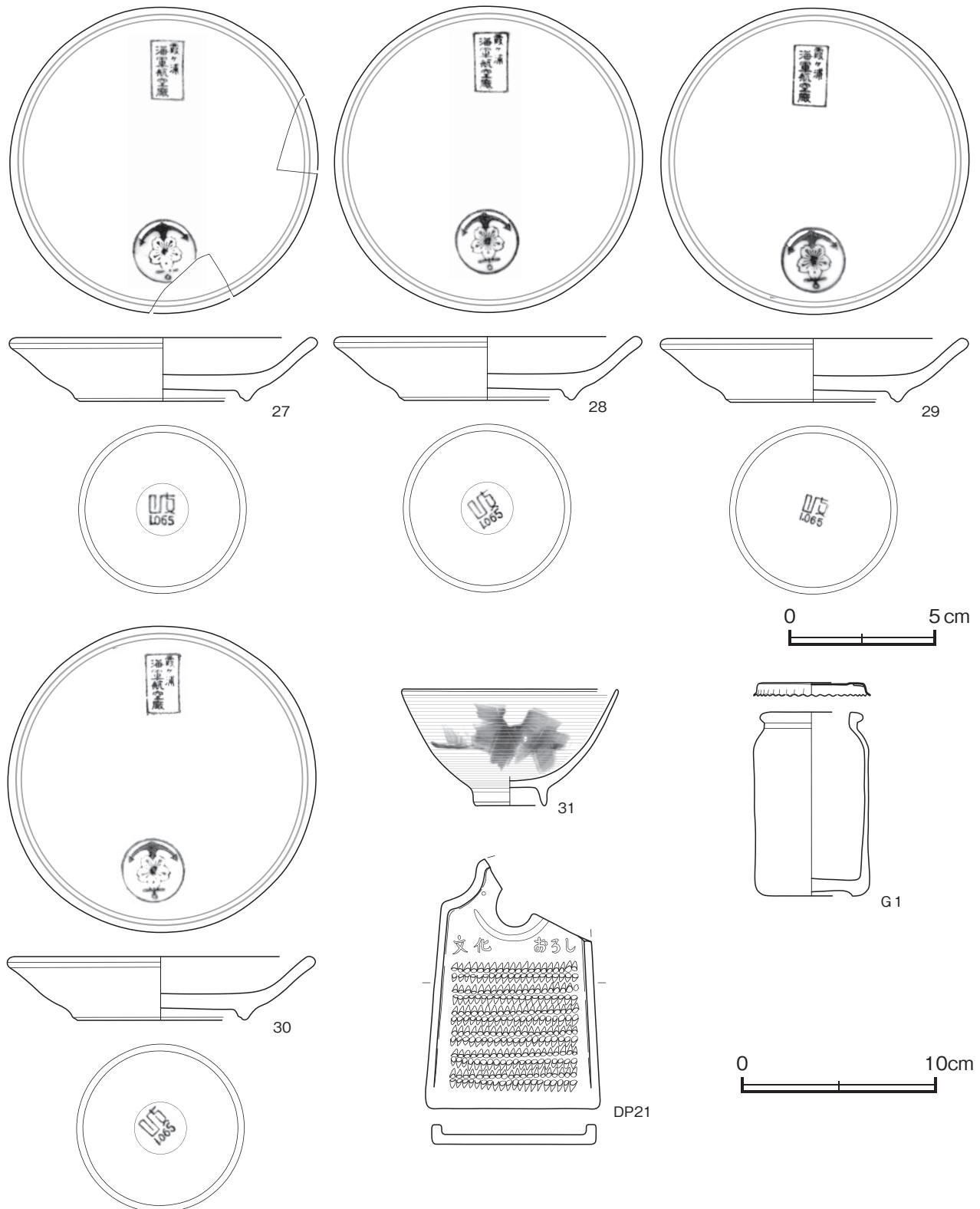
第39図 第4号地下壕実測図(1)



第40図 第4号地下壕実測図(2)



第41図 第4号地下壕出土遺物実測図(1)



第42図 第4号地下壕出土遺物実測図(2)

#### 第4号地下壕出土遺物観察表（第41・42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
21	磁器	小皿	10.6	2.2	5.8	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100% PL16
22	磁器	小皿	10.5	2.3	6.2	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
23	磁器	小皿	10.5	2.0	5.9	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
24	磁器	小皿	10.7	2.2	6.1	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
25	磁器	小皿	10.6	2.1	5.7	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
26	磁器	小皿	10.6	2.0	5.9	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
27	磁器	小皿	10.5	2.1	5.8	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	80%
28	磁器	小皿	10.6	2.1	5.7	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
29	磁器	小皿	10.5	2.0	5.8	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100% PL16
30	磁器	小皿	10.6	2.2	5.7	精緻	白	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」桜に錨 ゴム 版 底面「岐 1065」透明釉	崩落土上面	100%
31	磁器	碗	11.2	6.0	3.6	精緻	白	外面不明文様	崩落土上面	100% PL17
G1	ガラス製品	瓶	5.4	9.5	4.3	-	濃緑	鉄製の蓋	崩落土上面	100% PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP21	おろし金	12.9	9.0	3.5	82.1	精緻	表面「文化おろし」陽刻 長石釉	覆土中	80% PL17

#### 第5号地下壕（第43・44・45図）

**位置** 調査区北東端 A3b0 区、標高 21 m ほどの台地東端に位置している。

**規模と形状** 調査区域の北東端で検出されたため、大部分は調査区域外にあり、東西 4.0 m、南北 1.0 m しか確認できなかった。方形の南西隅角部分が検出され、南壁は N - 74° - W の方位で延びている。底面までは掘削できなかった。壁面は真っ直ぐ立ち上がっている。

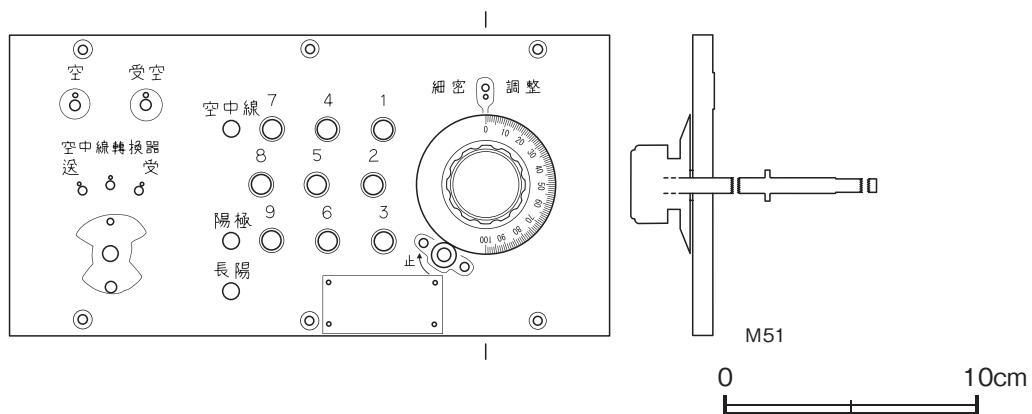
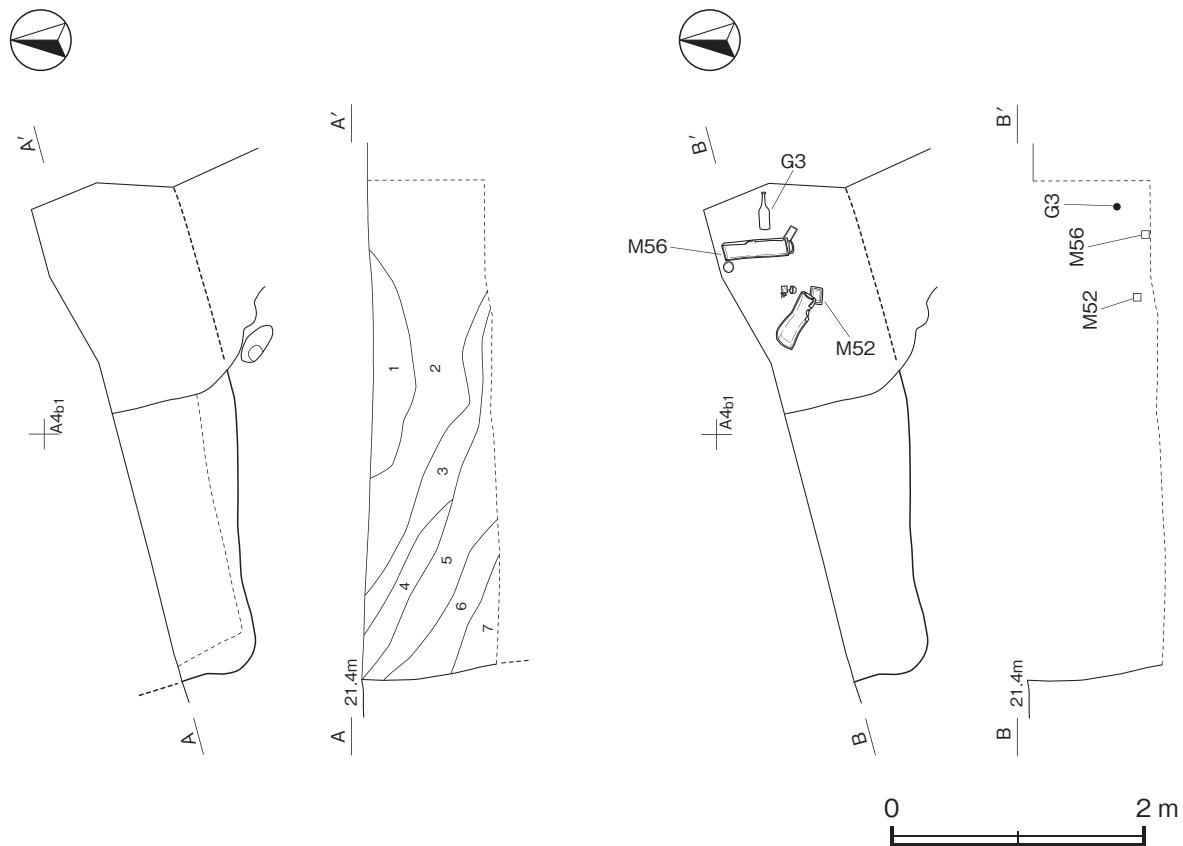
**覆土** 7 層に分層できる。崩落土と想定されるロームの崩落は確認されなかったが、ロームブロックが多く含まれており、埋め戻されている。

##### 土層解説 (A-A')

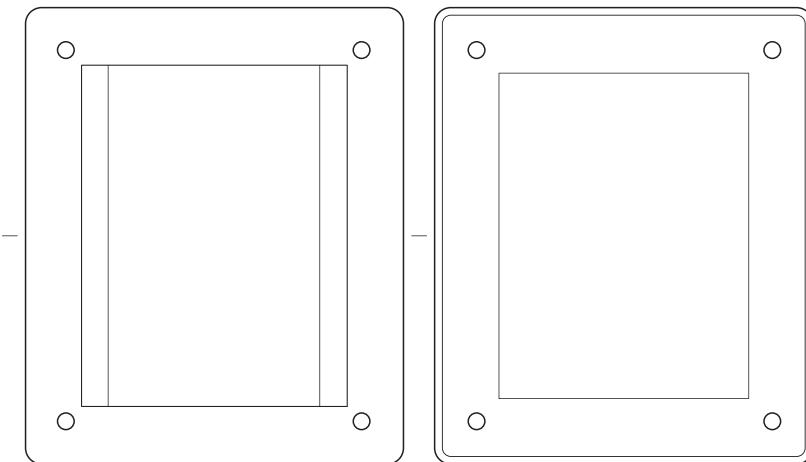
- |       |                       |       |                             |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量（締まり強い）      | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、白色粘土ブロック少量（締まり強い） |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量（粘性強い、締まり強い） | 6 暗褐色 | ロームブロック多量（締まり強い）            |
| 3 黒褐色 | ロームブロック多量（締まり強い）      | 7 暗褐色 | 砂質土ブロック多量（粘性弱い、締まり強い）       |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量（締まり強い）      |       |                             |

**遺物出土状況** 磁器片 4 点（碗 2、小瓶 2）、瓦片 1 点、金属製品 16 点（容器 2、鉄板 2、コンパス 1、機械部品 11）、ガラス製品 10 点（瓶）が覆土中からまとめて出土している。その出土状況から、一括して廃棄されたものと想定した。また、弥生土器片 1（壺）、土師器片 1 点（高坏）、埴輪片 5 点が出土しているが、いずれも混入である。

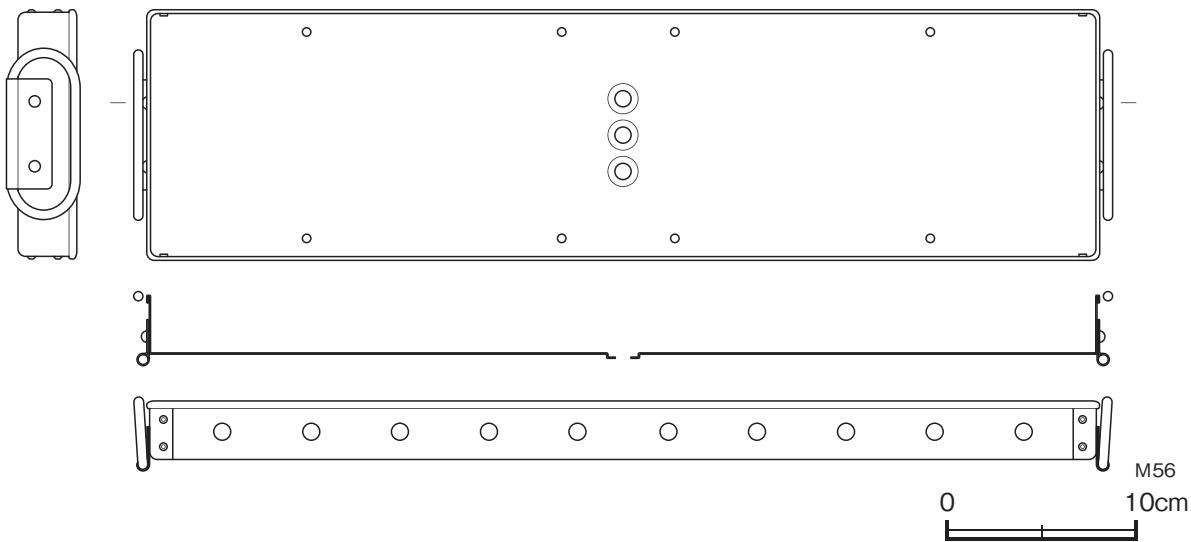
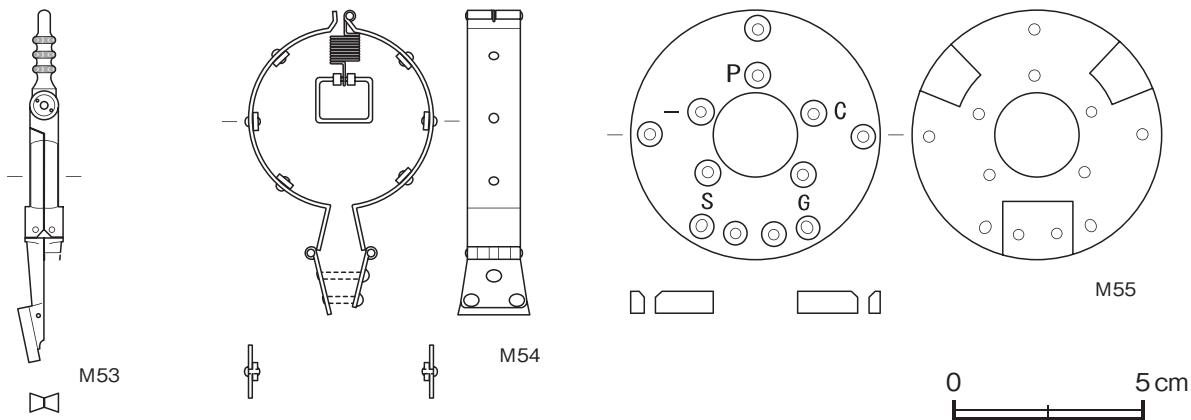
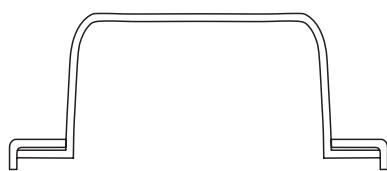
**所見** 昭和時代（太平洋戦争時）のものである。開削式であるが、地下壕の形態・走行方向等については不明である。壁面には被熱の痕跡が認められ、焼却が行われたものと考えられる。



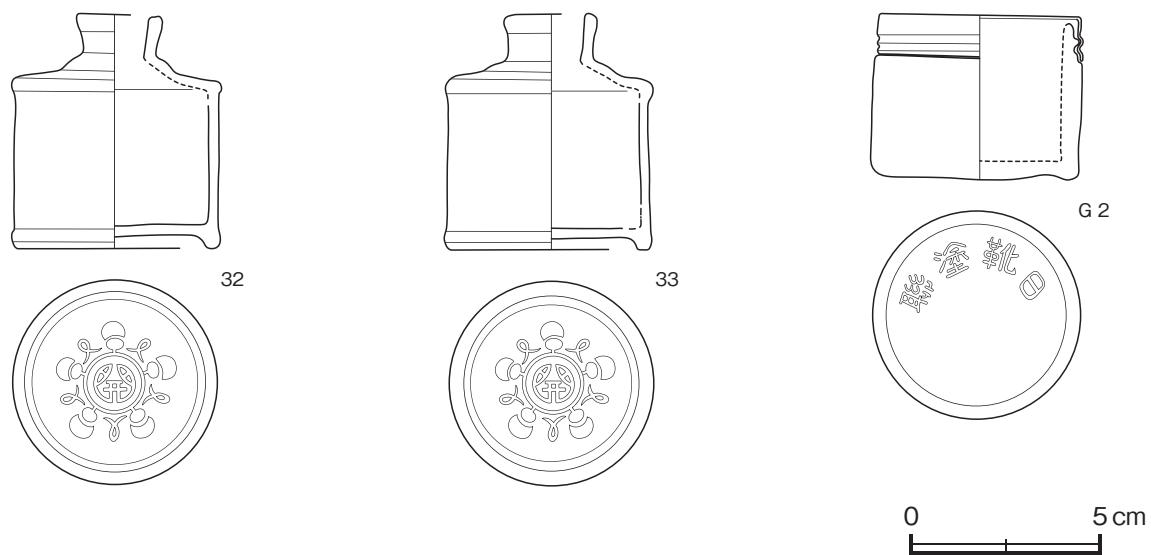
第43図 第5号地下壕・出土遺物実測図(1)



M52



第44図 第5号地下壕出土遺物実測図(2)



第45図 第5号地下壕出土遺物実測図(3)

第5号地下壕出土遺物観察表（第43・44・45図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 51	無線機パネル	11.9	23.9	9.7	305.0	プラスチック	製造元パネル欠損 陰刻	覆土中	PL17
M 52	外装部品	12.0	10.0	10.0	182.6	鉄	製造元パネル欠損 断面かまぼこ形	覆土中	
M 53	コンパス	9.5	1.1	1.2	19.0	銅合金	キハラ製	覆土中	PL17
M 54	不明	8.7	4.8	2.0	35.1	銅合金	円環の頂点にバネ その先端に方形金具が付く	覆土中	PL17
M 55	無線機部品	6.6	6.6	0.8	22.7	プラスチック	「P」「-」「C」「S」「G」陰刻	覆土中	PL17
M 56	不明容器	51.8	13.2	3.9	485.0	ブリキ	両短側面に把手 側面・底面に円孔	覆土中	PL18

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	磁器	小瓶	2.0	6.2	5.2	精緻	淡緑	底面陽刻	覆土中	100%
33	磁器	小瓶	2.5	6.2	5.3	精緻	淡緑	底面陽刻	覆土中	100% PL17
G2	ガラス製品	瓶	[4.8]	4.15	5.45	-	濃緑	「日粧塗聯」陽刻	覆土中	90%
G3	ガラス製品	ビール瓶	2.7	29.3	6.5	-	茶	大日本麦酒株式会社製 未開封	覆土中	100% PL17

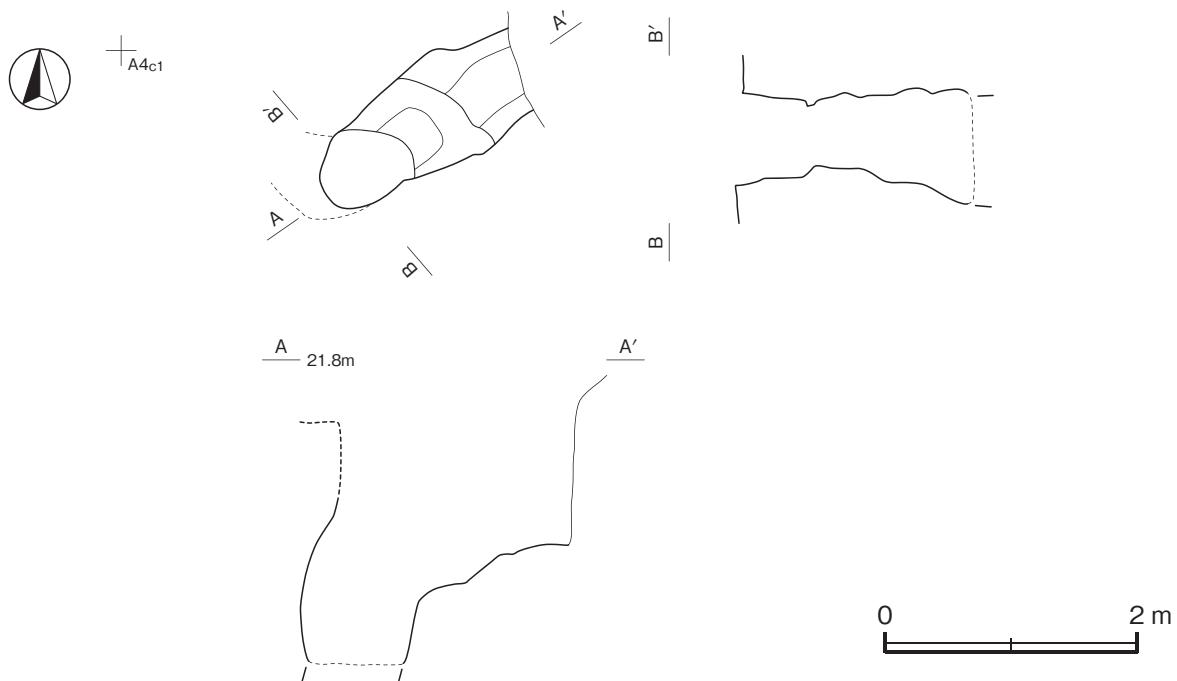
第6号地下壕（第46図）

位置 調査区北東端 A4c1 区、標高 21 m ほどの台地東端に位置している。

規模と形状 東側崖面に面する幅 85cm の開口部から竪穴が斜位に下っている。長軸方向は N - 56° - W である。底面までは掘削できなかったが、屈曲して北方向へ延びることが確認できた。

覆土 平面規模から半截による土層観察は不可能であったが、ロームブロックを多く含む覆土が認められたため、埋め戻されていると考えられる。

所見 形状等から昭和時代（太平洋戦争時）のものと想定される。その位置から第3号地下壕との関係性が推測される。



第46図 第6号地下壕実測図

## 第7号地下壕 (第47図)

**位置** 調査区中央南端 B2b1～B2a5 区、標高 22 m ほどの台地南端部に位置している。

**規模と形状** 調査区域の南端部で検出され、調査区域外へ続くものと想定される。崩落土の範囲を検出できただけで、その底面までは掘削できなかった。崩落土は東西 11.7 m、南北 5.2 m の範囲で確認された。北壁がオーバーハング状になることから、東西に走る地下壕と推測される。

**覆土** 地山ローム層の崩落が検出された。安全上の都合から、基本土層第5層上面までの掘削とした。第2・3号地下壕で検出された黒色崩落土は検出されなかった。

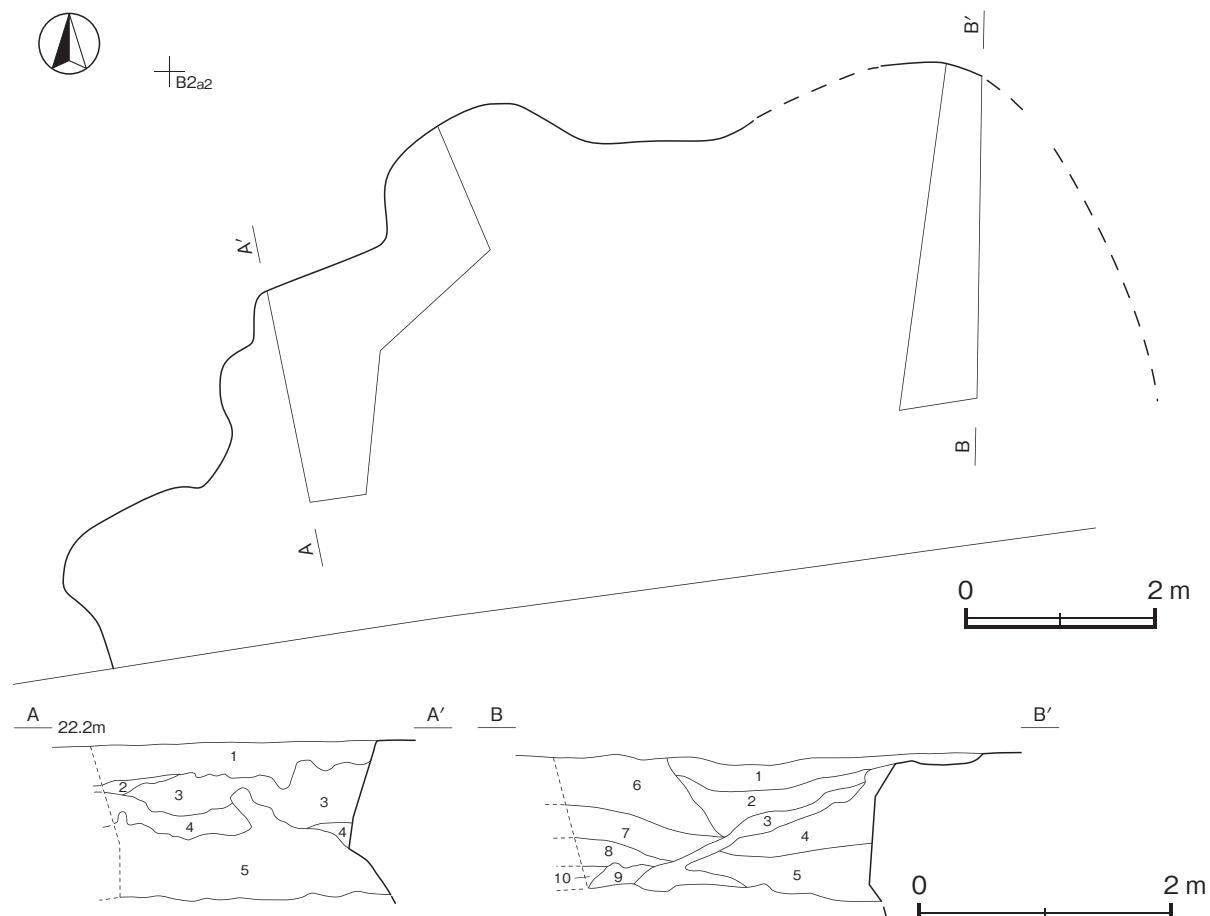
### 土層解説 (A-A')

1 褐	色 ロームブロック多量 (締まり強い)	4 褐	色 ロームブロック多量
2 褐	色 粘土ブロック少量	5 褐	色 粘土ブロック多量 (粘性強い、締まり弱い)
3 褐	色 ロームブロック多量 (締まり強い、1層より黄み 強い)		

### 土層解説 (B-B')

1 褐	色 ロームブロック多量、黒色土粒子少量	4 褐	色 ロームブロック多量
2 暗 褐	色 炭化物少量	5 暗 褐	色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量 (粘性強 い)
3 暗 褐	色 ロームブロック・粘土粒子少量		

**所見** 昭和時代（太平洋戦争時）のものである。崩落土の状況から横穴式の地下壕と推定されるが、その規模および走行方向は明確にはできなかった。ただし崩落土の状況から東西方向に伸びる地下壕と推測される。東側で確認された第8号地下壕との関係は不明である。なお本跡の上面に硬化面が認められたが、海軍航空要員研究所施設の自転車置き場の位置に相当することから、それに起因するものと考えられる。



第47図 第7号地下壕実測図

## 第8号地下壕 (第48図)

**位置** 調査区中央南端B2a5区、標高22mほどの台地南端部に位置している。その一部は第9号地下壕より下層に位置している。

**規模と形状** 本跡の南部は調査区域外に及ぶと想定され、南北5.1m、東西4.4mの範囲しか崩落土は確認できなかった。確認面より2.5m下の高さまで掘削したが、底面は検出されなかった。南北に長軸をもつ黒色崩落土の東側にはロームおよびロームと灰白色粘土が混合する崩落土が平面で検出された。それら崩落土の広がりから南から北上し東へ屈曲する地下壕が推測されるが、明確には検出できなかった。

**覆土** 5層に分層できる。3層は地山ローム層の崩落で、北壁が層状に崩落していった状況が見られる。

### 土層解説 (A-A')

1 暗褐色 ロームブロック少量 (締まり強い)	4 明褐色 灰白色粘土多量 (粘性・締まり強い)
2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 (締まり弱い)	5 にぶい橙色 灰白色粘土多量 (粘性・締まり強い)
3 褐色 褐色ロームブロック多量 (締まり強い)	

**遺物出土状況** 繩文土器片3点(深鉢)、弥生土器片6点(壺)、土師器片120点(鉢2、高壺18、器台3、甕53、壺44)、須恵器片2点(壺、甕)、磁器片3点(碗2、碍子1)、瓦片1点、土製品1点(土玉)が出土しているが、いずれも崩落土中から出土しており混入したものである。

**所見** 昭和時代(太平洋戦争時)のものである。横穴式である。



第48図 第8号地下壕実測図

## 第9号地下壕 (第49図)

**位置** 調査区中央南部 A2j6 区, 標高 22 m ほどの台地南部に位置している。

**重複関係** 第4号地下壕の崩落により掘り込まれている。

**規模と形状** 南北 2.1 m, 東西 2.4 m, 方形で深さ 1.37 m の土坑状を呈している。底面は平坦で、壁面は外傾している。長軸方向は、N - 80° - E である。東側は第4号地下壕の崩落により不明である。底面は基本土層第5層である。

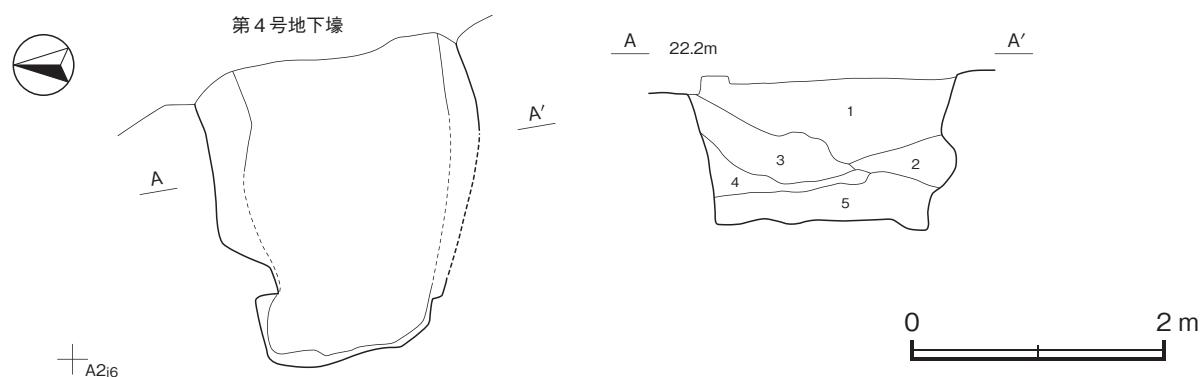
**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックを含んでいるが、その堆積状況から掘削土の自然流入が考えられる。

地山層の崩落が認められることから、開削式であったと想定される。

### 土層解説 (A - A')

1 黒褐色 ローム粒子少量	4 黒褐色 ロームブロック中量
2 黒褐色 ロームブロック少量	5 暗褐色 ロームブロック・白色粘土ブロック中量 (粘性・締まり強い)
3 暗褐色 ロームブロック・白色粘土ブロック中量 (粘性・締まり強い、黒色土粒を層状に含む)	

**所見** 覆土の状況等から昭和時代（太平洋戦争時）のものと判断される。開削式である。その位置から第4号地下壕に関連する施設である可能性が考えられるが、接続部分は崩落しており、詳細は不明である。



第49図 第9号地下壕実測図

表5 近代地下壕一覧表

番号	位置	方向	形状	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)					
1	A2c7 ~ A2i10	N - 0° N - 25° - W	く字状	(26.4)	0.9 ~ 1.4	0.6 ~ 1.3	箱形	直立	人為	縄文土器・土師器・陶磁器・金属製品・ガラス製品	本跡→第4号地下壕
2	A3c3 ~ A3h6	N - 9° - W	直線状	(21.5)	(2.8 ~ 6.0)	-	-	-	崩落	土師器・須恵器・磁器・ガラス製品・金属製品	
3	A3b7 ~ A4f2	N - 17° - W	直線状	(23.3)	(1.5 ~ 4.0)	-	-	-	崩落	-	
4	A2d4 ~ B2a7	N - 17° - W	直線状	(32.1)	1.6 ~ (2.6)	1.3	箱形	直立	人為・崩落	土師器・陶磁器・金属製品・ガラス製品	第1号地下壕→本跡
5	A3b0	N - 74° - E	-	(4.0)	-	-	-	直立	人為	陶磁器・金属製品・ガラス製品	
6	A4c1	N - 56° - E	直線状	(1.8)	0.91	0.41	逆台形	内傾	自然	-	
7	B2a5 ~ B2b1	N - 72° - E	-	(11.7)	-	-	-	-	崩落	-	
8	B2a5	N - 25° - W	L字か	(5.1)	(1.8 ~ 3.9)	-	-	-	崩落	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・磁器	
9	A2j6	N - 80° - E	直線状	(2.4)	2.1	1.6	逆台形	外傾	自然	-	

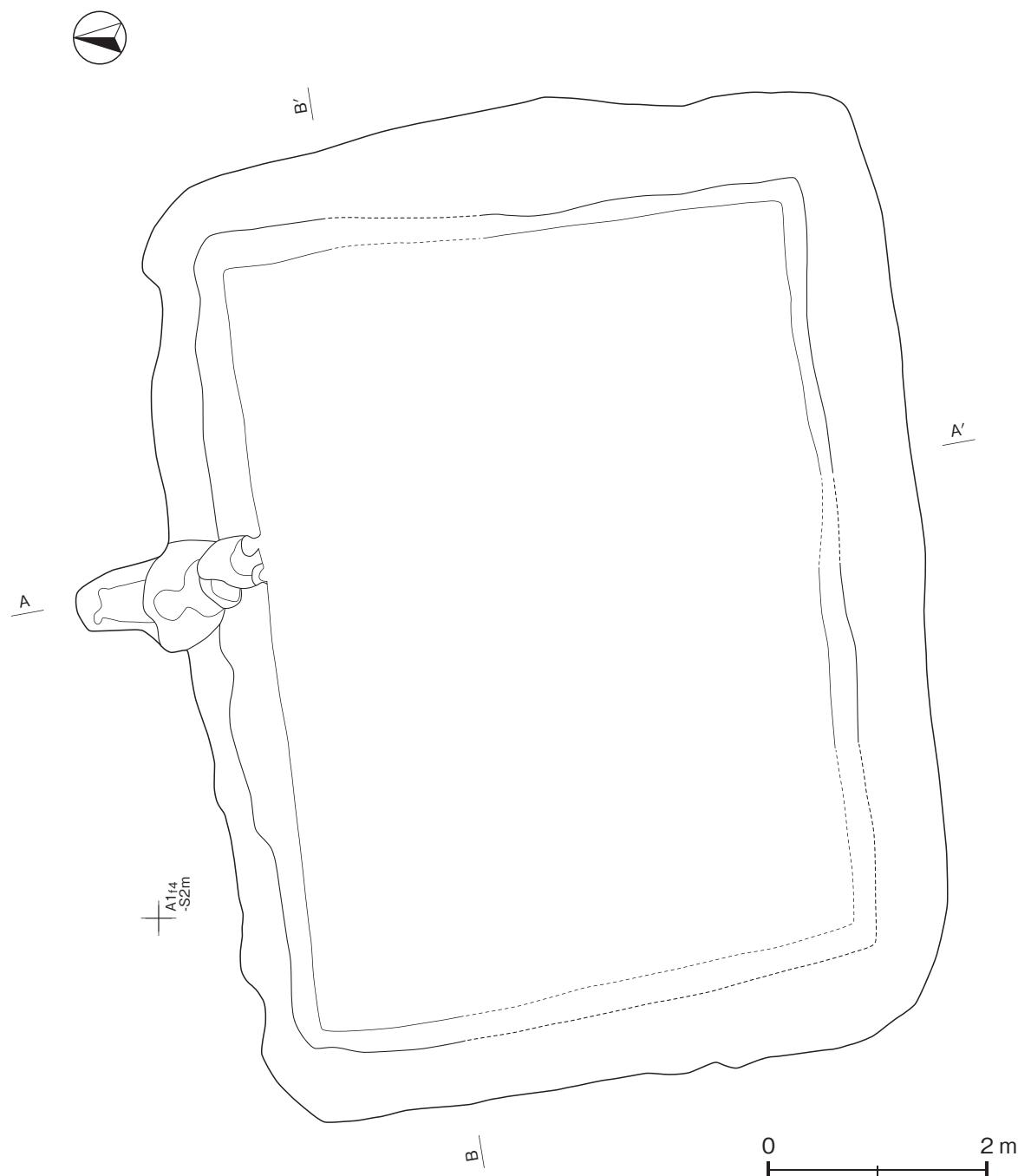
(2) 施設跡

**第 10 号不明施設** (第 50 ~ 53 図)

**位置** 調査区北西部 A1f3 区, 標高 22 m ほどの台地中央に位置している。

**規模と形状** 南北 5.05 m, 東西 6.70 m の方形で深さ 1.10 m の豊穴状を呈している。主軸方向は N - 9° - W である。北壁中央東寄りに階段状の張出しを有している。底面は平坦で、壁面は上端が大きく開き、断面は有段を呈する。

**覆土** 8 層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。



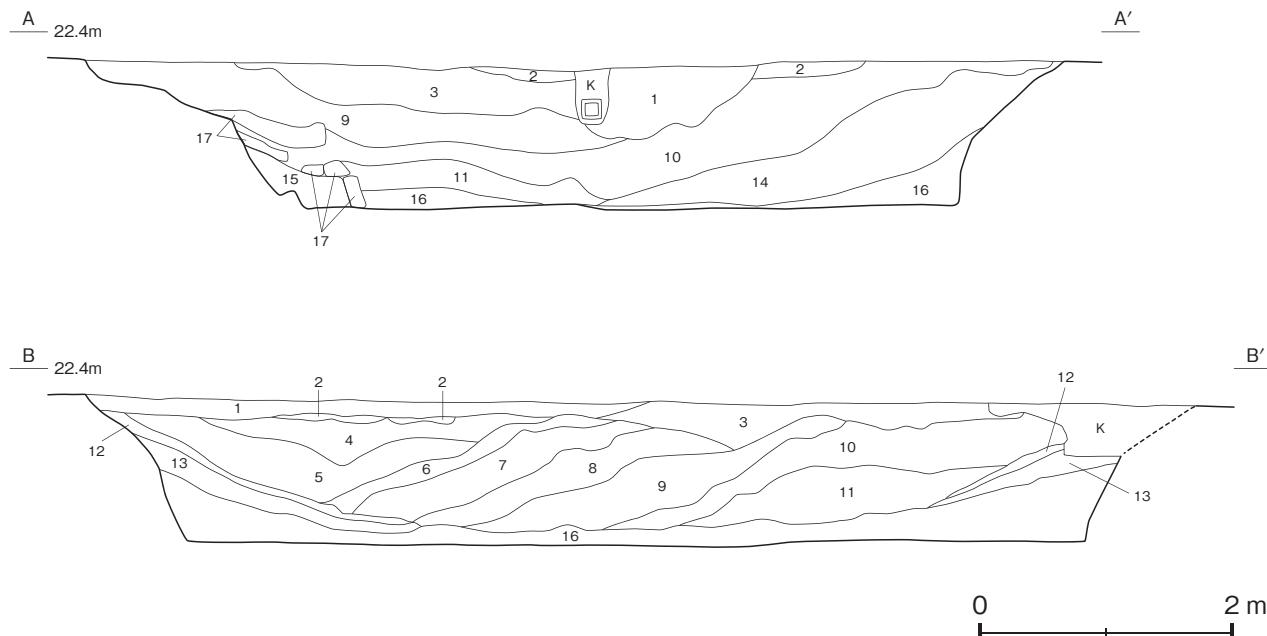
第 50 図 第 10 号不明施設実測図

**土層解説 (A - A', B - B' 共通)**

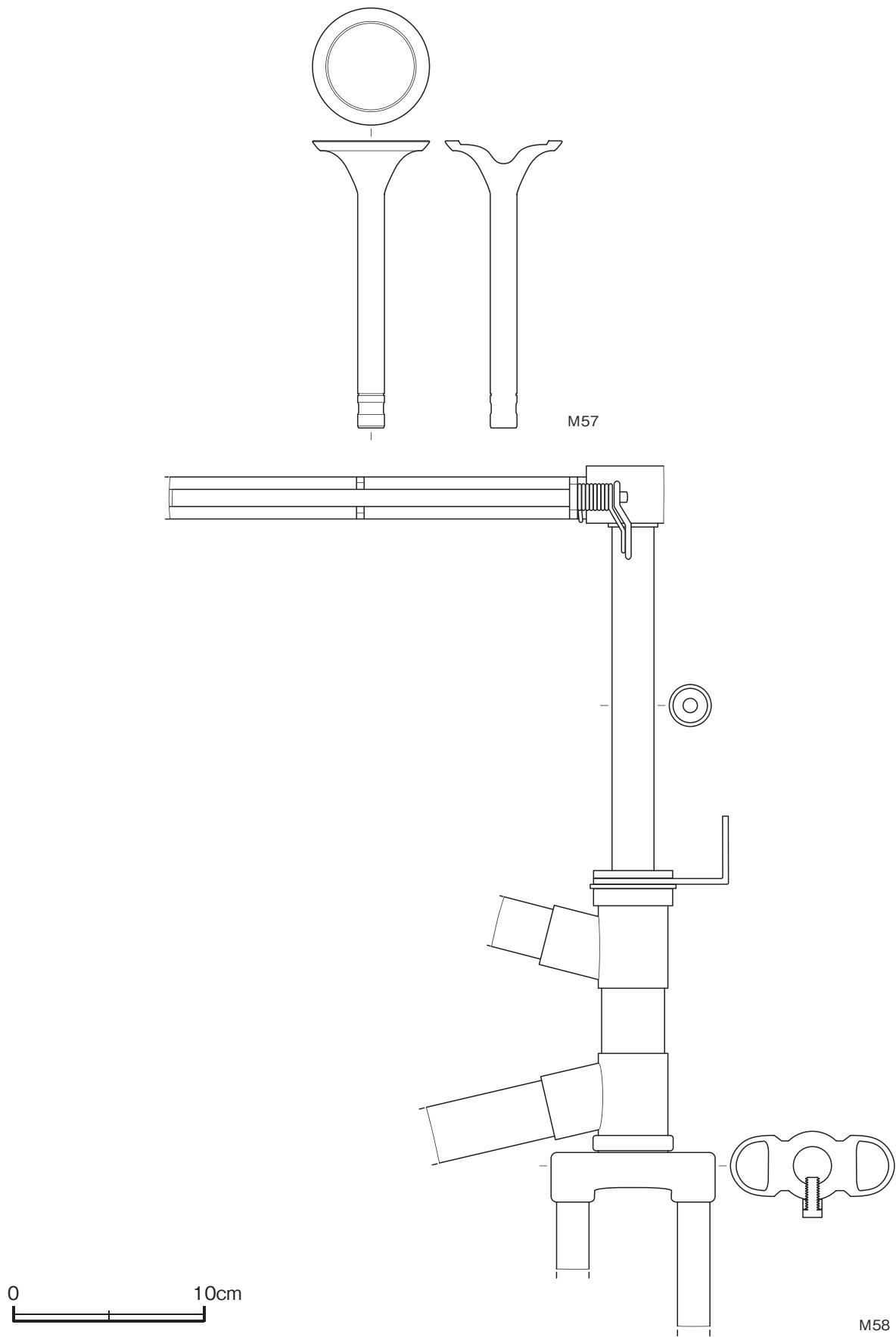
1 暗 褐 色	碎石多量、粘土ブロック中量 (粘性強い、締まり弱い)	9 褐 色	炭化粒子・粘土ブロック少量 (粘性・締まり強い)
2 褐 色	炭化粒子・粘土ブロック少量 (粘性・締まり強い)	10 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い、黒色土粒子を層状に含む)
3 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック中量 (粘性・締まり強い)	11 褐 色	ロームブロック多量
4 暗 褐 色	ローム粒子・炭化粒子・黒色土ブロック中量、白色粘土粒子少量 (粘性・締まり強い)	12 褐 色	ロームブロック多量 (粘性・締まり強い)
5 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)	13 暗 褐 色	ロームブロック中量
6 暗 褐 色	ローム粒子・炭化粒子中量、白色粘土粒子少量 (粘性・締まり強い)	14 褐 色	ロームブロック・白色粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)
7 暗 褐 色	ロームブロック中量	15 褐 色	ロームブロック多量 (粘性・締まり弱い)
8 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック多量 (粘性・締まり強い)	16 褐 灰 色	砂粒多量 (締まり弱い)
		17 黄 褐 色	ロームブロック

**遺物出土状況** 磁器片 3 点 (碗 2, 碗子 1), 瓦片 8 点, 金属製品 27 点 (鉄釘 12, 自転車 12, 機械部品 2, 鉄板 1), ガラス製品 1 点 (瓶), 土製品 3 点 (煉瓦) が出土している。また, 弥生土器片 1 点 (壺) が出土しているが, 混入である。棧瓦 (T 1) は, 覆土中から出土しており, 調査区北側に所在した海軍航空要員研究所建物に葺かれていたものである。自転車 (M58・M59) は底面から出土している。

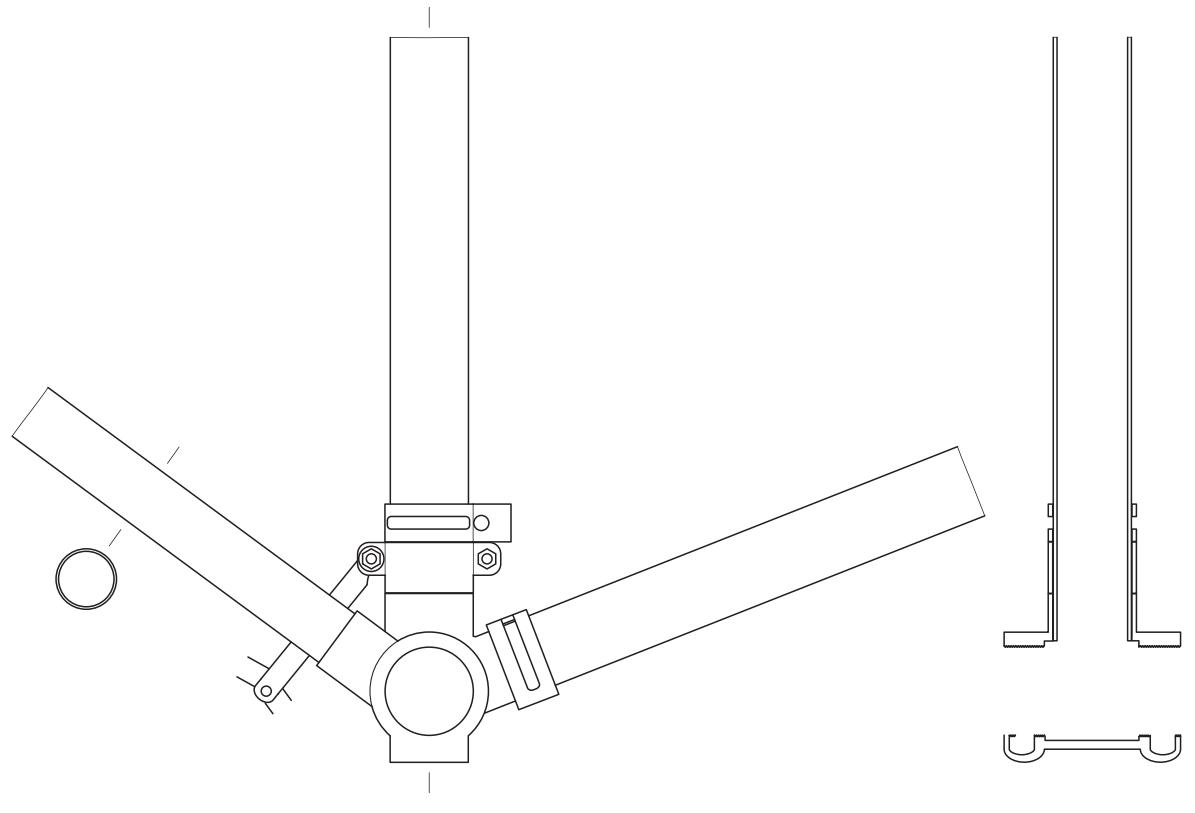
**所見** 昭和時代 (太平洋戦争時) のものである。施設の機能については不明で, 史料においても記載がない。しかし, 1948 年米軍撮影航空写真においては, 何らかの施設が存在した痕跡を見ることができる。



第 51 図 第 10 号不明施設実測図

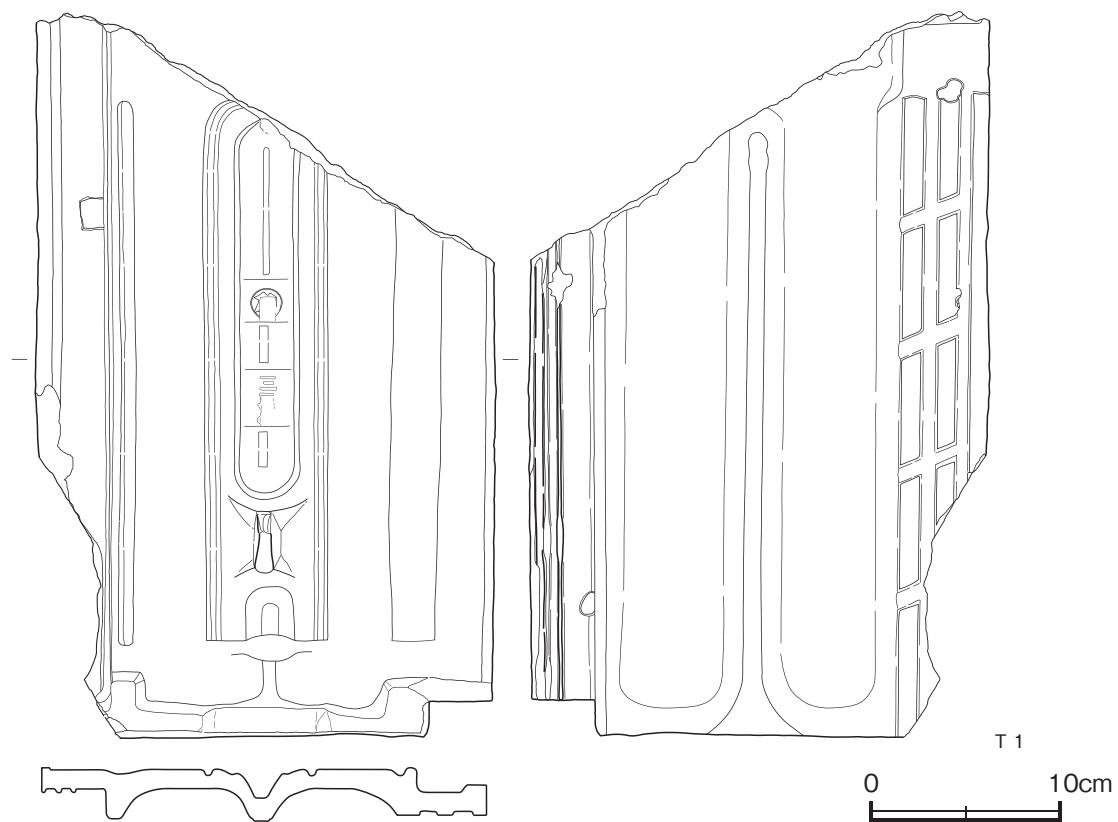


第52図 第10号不明施設出土遺物実測図(1)



M59

0 10cm



T 1

0 10cm

第 53 図 第 10 号不明施設出土遺物実測図(2)

第10号不明施設出土遺物観察表（第51・52図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 59	不明	15	6.2	6.2	289.0	鉄	棒状部分中実	覆土下層	PL18
M 57	自転車	(42.3)	(26.3)	2.2	1780.0	鉄	上管・頭管・クラウン部頭部には荷物置きを設置するためと想定される接続金具を有す	覆土下層	PL18
M 58	自転車	28.7	38.4	2.9	1005.0	鉄	下管・立管・テーンステイ部	覆土下層	PL18
T1	瓦 (棟瓦)	(38.4)	(24.3)	(3.0)	2040.0	石英	「公」か、「三号」陽刻	覆土下層	80% PL18

### (3) 溝跡

#### 第3号溝跡（第54～61図）

**位置** 調査区北部 A1e2～A2c9 区、標高 22 m ほどの台地中央南部に位置する。

**重複関係** 第1号地下壕を掘り込んでいる。

**規模と形状** 西部は大きく搅乱を受けており、長さ 75.8 m しか確認できなかった。A1e3 区でいったん北東方向 (N - 44° - E) へ延び、屈折したのち A2c9 区まで東方向 (N - 82° - E) へ延びている。規模は上幅 34 ～ 120cm、下幅 26 ～ 40cm、深さ 15 ～ 40cm で、東にいくに従ってその規模は小さくなる。東端部は付け替えを行っていることが確認され、南側から北側へ変わったことがわかった。断面は逆台形を呈しているが、2 段に掘り込まれ、上段に浅い掘り込みが確認できた箇所もあった。壁面にピットを確認したが、本跡との関係は分からなかった。

**覆土** 2～4層に分層できる。覆土中層から下層にかけて焼却による焼土・炭化物が多量に検出された。ロームブロック多く含んでいることから、埋め戻されている。

#### 土層解説 (A-A', B-B', C-C', D-D' 共通)

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒少量、炭化物微量（締まり強い） | 3 暗褐色 ローム粒子少量（締まり強い） |
| 2 褐色 ロームブロック多量（締まり弱い）    | 4 青黑色 炭化物多量（締まり弱い）   |

#### 土層解説 (E-E')

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 褐色 ロームブロック多量（締まり強い） | 3 暗褐色 炭化粒子・礫少量（締まり強い） |
| 2 青黑色 炭化物多量           | 4 褐色 ロームブロック多量（締まり強い） |

#### 土層解説 (F-F')

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 褐色 ロームブロック多量（締まり強い） | 3 褐色 ロームブロック多量（締まり強い） |
| 2 暗褐色 炭化粒子・礫少量（締まり強い） |                       |

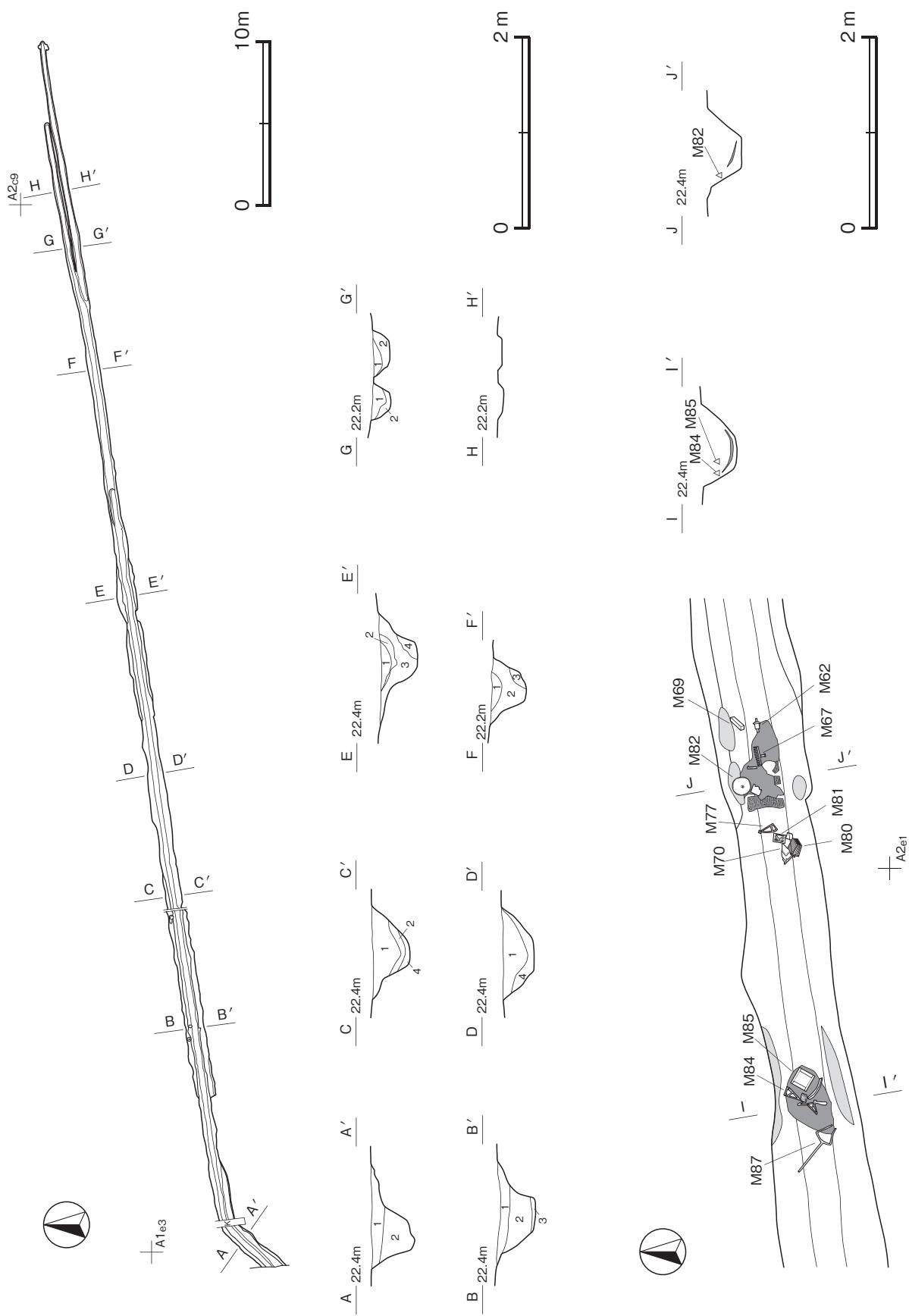
#### 土層解説 (G-G')

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子多量、白色粒子中量 | 2 褐色 ロームブロック少量（締まり強い） |
|---------------------|-----------------------|

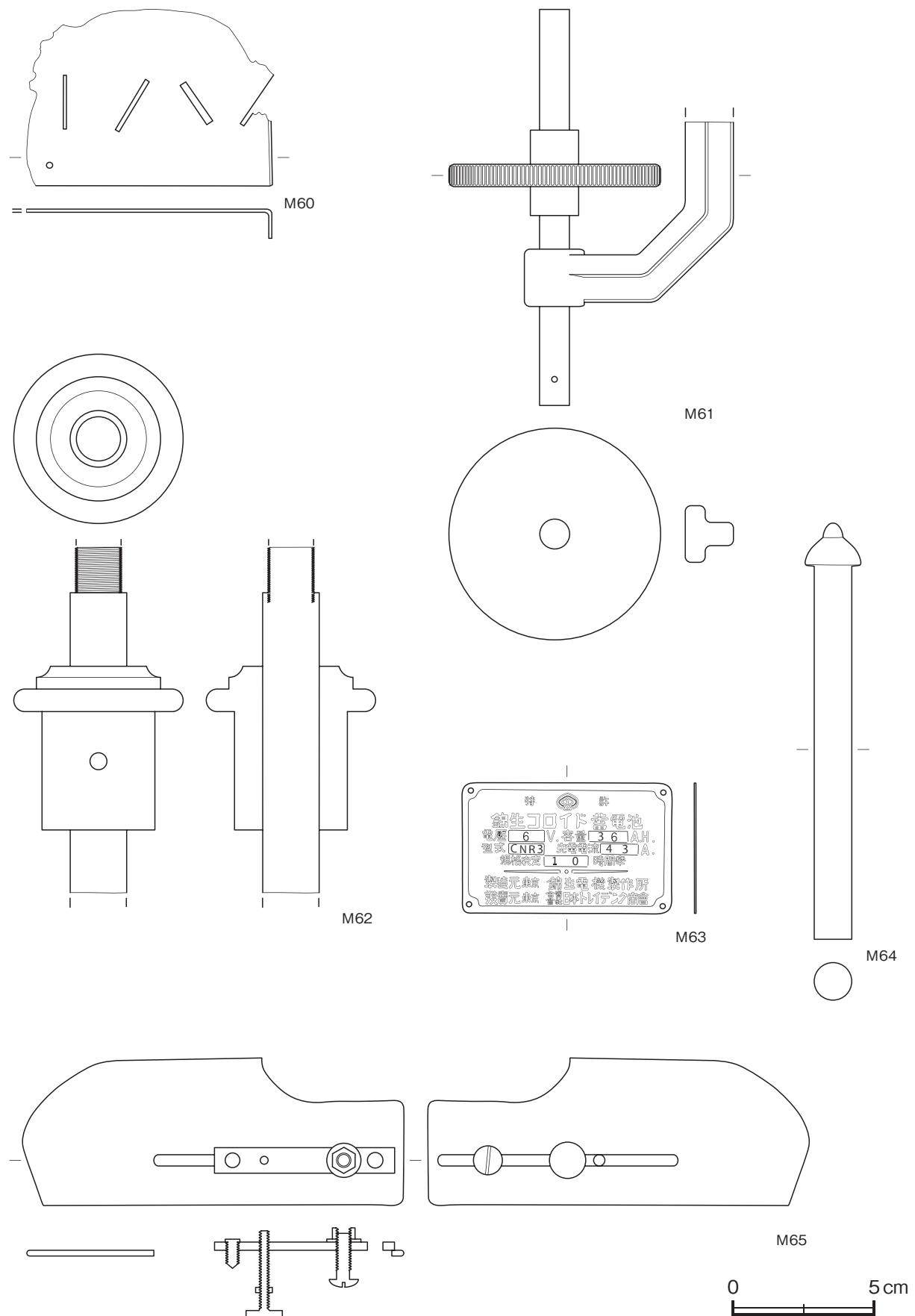
**遺物出土状況** 磁器 17 点（碗 13・碍子 4）、瓦片 18 点、ガラス製品 3 点（瓶）、金属製品 95 点（機械部品）、炭化紙が溝中央の 2 箇所において、焼土とともにまとまって出土している。また、土師器片 3 点（甕 2、壺 1）、埴輪片 2 点が出土しているが、流れ込みである。

機械部品は原形を保っておらず、解体されたのち焼却された可能性が考えられる。出土した機械部品には、視触覚弁別検査器 (M60)、マッチ盤 (M86) など海軍航空要員研究所で使用されたと想定される検査器械が確認できた。

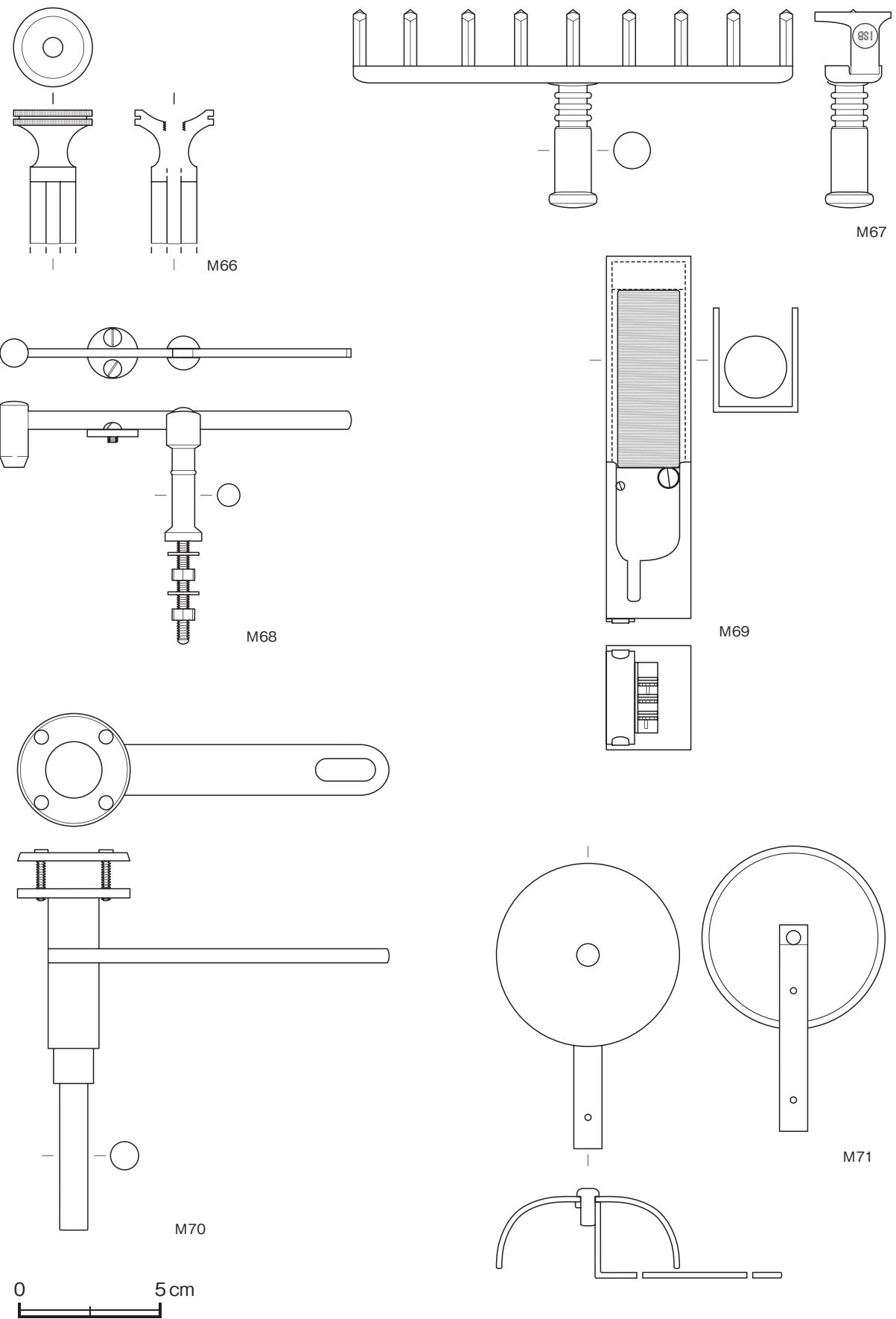
**所見** 1948 年米軍撮影航空写真に、本跡と思われる溝が確認され、昭和時代（太平洋戦争時）のものと判断される。



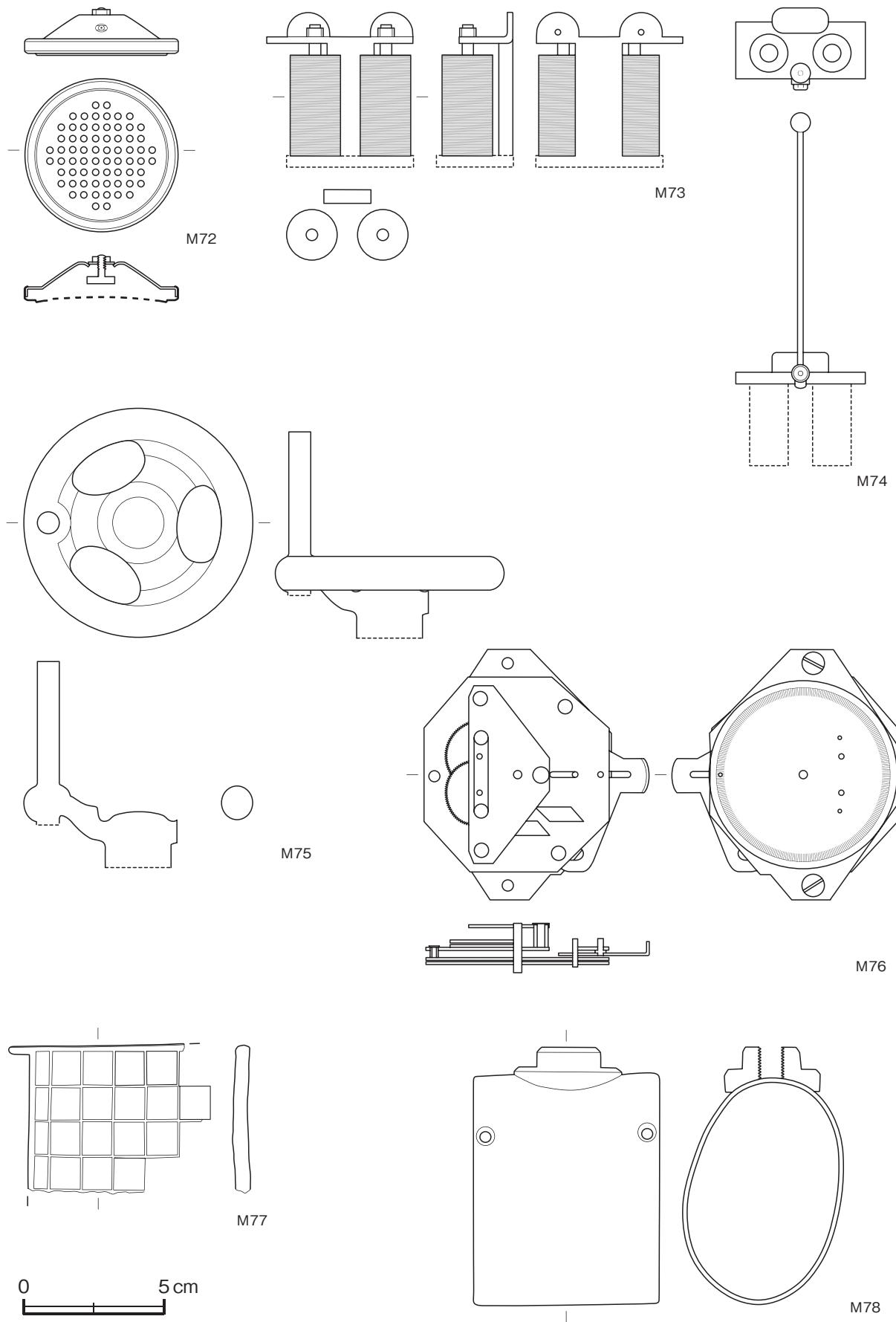
第54図 第3号溝跡実測図



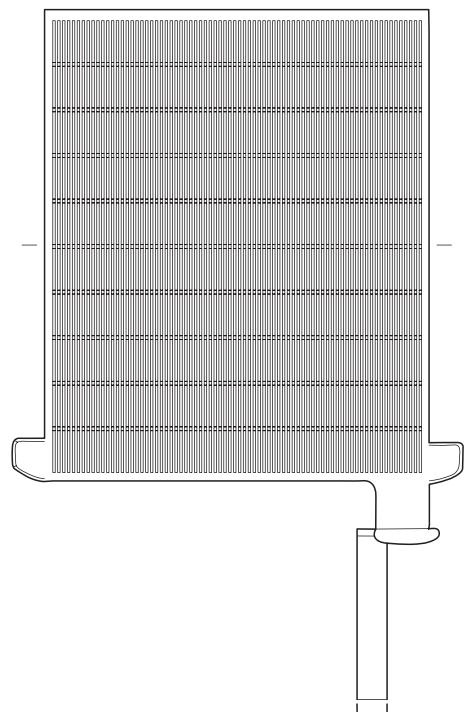
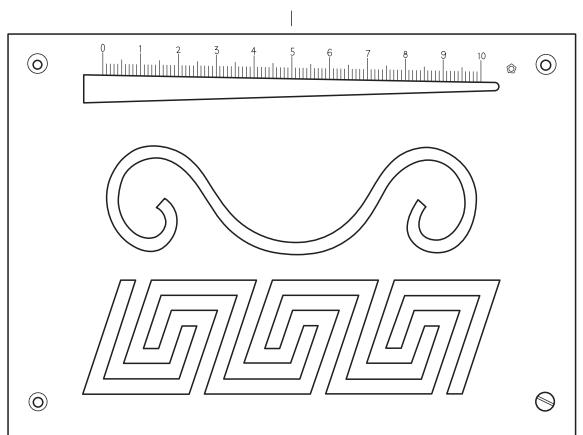
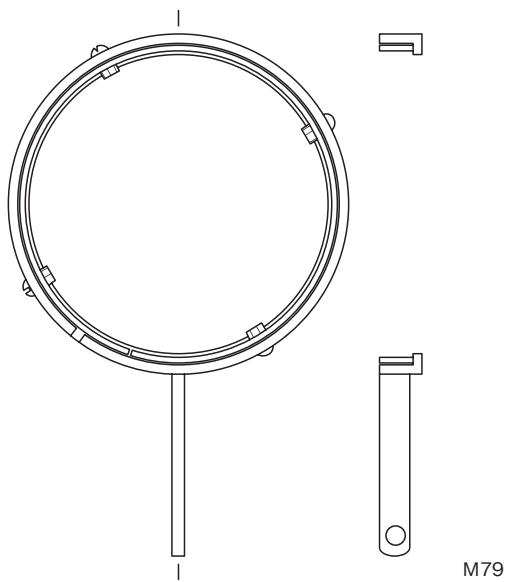
第55図 第3号溝跡出土遺物実測図(1)



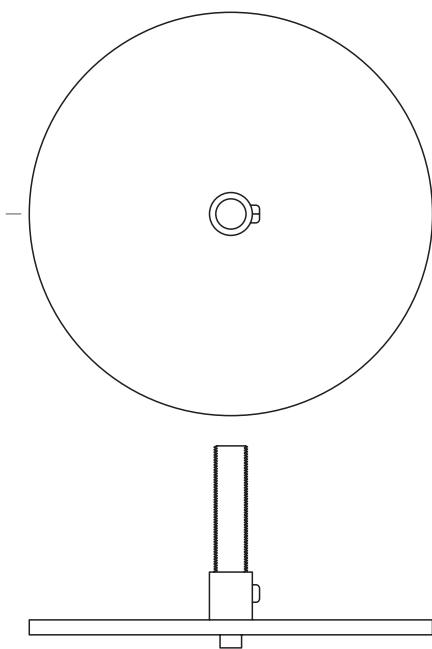
第 56 図 第 3 号溝跡出土遺物実測図(2)



第57図 第3号溝跡出土遺物実測図(3)

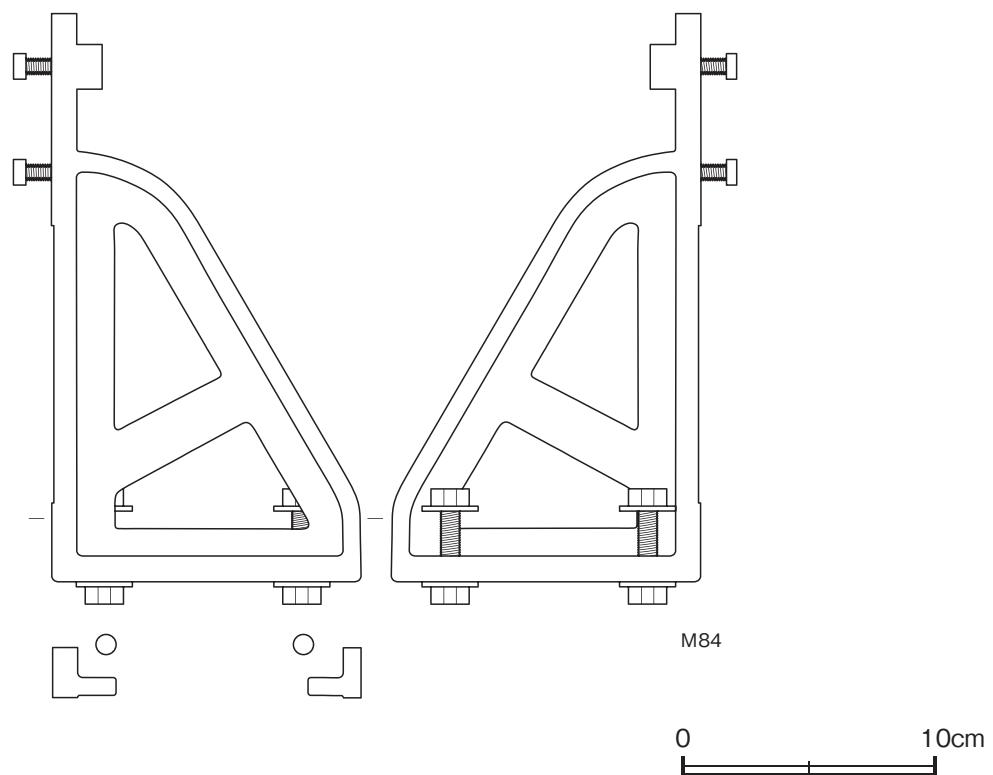
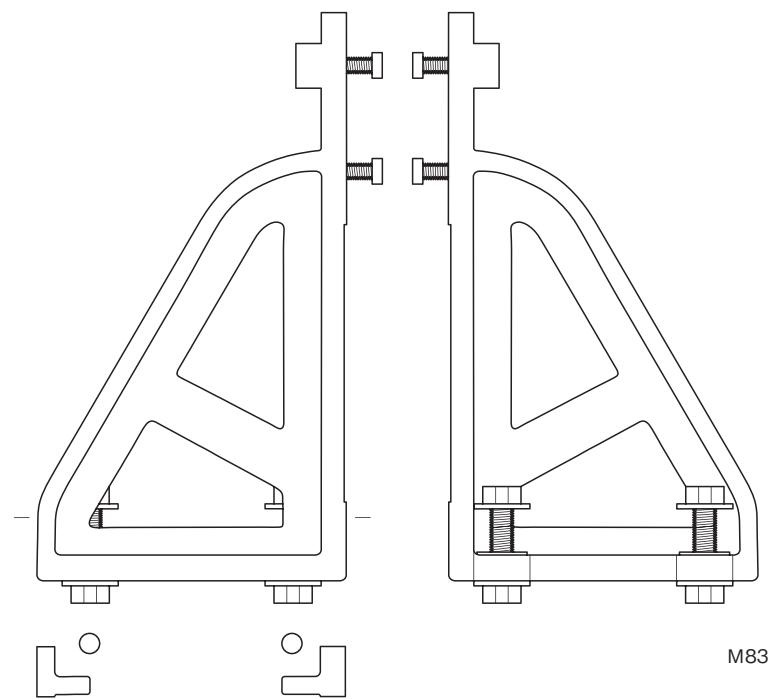


0 5 cm

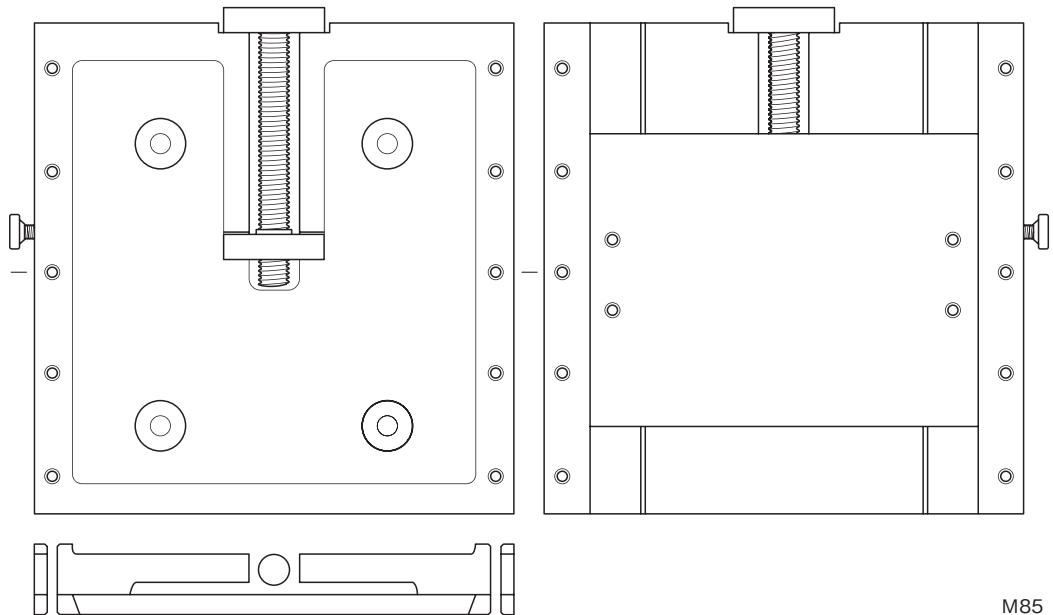


0 10cm

第58図 第3号溝跡出土遺物実測図(4)



第59図 第3号溝跡出土遺物実測図(5)



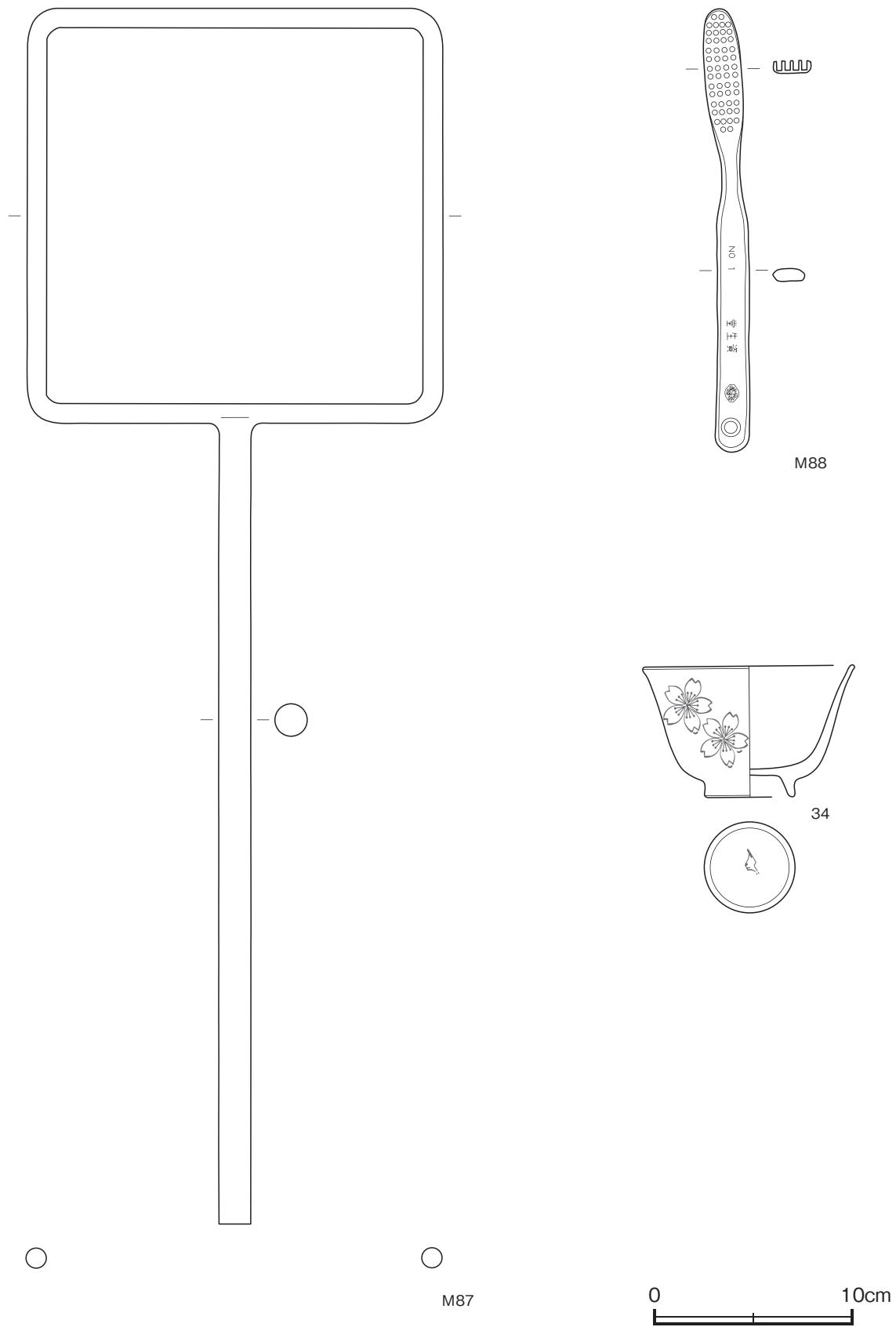
M85

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	$\sum$
ア	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	15
イ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	30
ウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	45
エ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	60
オ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	75
カ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	90
キ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	105
ク	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	120
ケ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	135
コ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	150
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	

M86

0 10cm

第 60 図 第 3 号溝跡出土遺物実測図(6)



第61図 第3号溝跡出土遺物実測図(7)

第3号溝跡出土遺物観察表（第54～60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	磁器	碗	[10.8]	6.6	4.4	精緻	白	外面桜花文 ゴム版 透明釉	覆土中	80% PL22
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M 60	視触覚弁別検査器	6.1	8.7	2.4	43.3	鉄	メダルを挿入するための4孔が残存する		覆土下層	PL18
M 61	不明	(14.6)	10.0	7.5	460.0	鉄・銅合金	鉄芯に円盤・把手状金具が付く		覆土下層	PL18
M 62	不明	(12.3)	5.8	5.8	780.0	鉄・鉛	鉄芯に管状部品が付く		覆土下層	PL18
M 63	蓄電池パネル	4.6	7.4	0.5	122	銅合金	「錦生コロイド蓄電池」 製造元 錦生電機製作所 発売元 合資会社日本トレーディング商会		覆土下層	PL18
M 64	不明	14.7	1.9	1.9	135.4	鉛青銅か	中実の棒状を呈し、先端部を作り出す 鋳造		覆土下層	PL19
M 65	不明	13.8	5.1	3.0	85.5	鉄・銅合金	地金板に穿孔が施され、そこにネジによって締結された小金属片がスライドする		覆土下層	PL18
M 66	把手	(4.9)	2.8	2.8	69.3	鉛青銅か・鉄	平面円形の柄頭に鉄製の柄が付く 柄頭側面にキザミ		覆土下層	PL19
M 67	無線機部品か	7.0	15.6	1.3	325.0	鉛青銅か	側面に「ISB」陽刻		覆土下層	PL19
M 68	不明	8.4	12.5	0.8	61.9	銅合金	上部横長部分2つは中央締結部分を支点として上下に可動する		覆土下層	PL19
M 69	コイル	13.4	3.0	3.9	400.0	銅合金	縦長のコイルおよびコイルケース 同一個体が他1点あり		覆土下層	PL19
M 70	不明	13.5	13.2	4.0	271.4	銅合金・鉄	先端部分に円環2枚がネジによって締結される 同一個体が他3点あり		覆土下層	PL19
M 71	ベル	10.2	6.5	3.1	63.6	鉄	本部部分に締結部品がネジで締結される 同一個体が他2点あり		覆土下層	PL19
M 72	受送話部	5.4	5.4	1.7	36.5	銅合金	側面に不明円形マーク 陰刻 同一個体5点		覆土下層	PL19
M 73	ベル	6.6	5.4	3.0	167.2	鉄	コイル2個 共振部は欠損		覆土下層	PL19
M 74	ベル	13.2	[4.6]	(3.5)	98.0	鉄	下部にコイル2個 その間に長めの共振部を有する		覆土下層	PL19
M 75	ハンドル	8.2	8.2	7.3	246.8	鉄	円環に棒状把手が付く		覆土下層	PL19
M 76	不明	8.9	7.8	1.7	115.8	銅合金	表面に円形目盛板 内部に歯車2点あり		覆土下層	PL19
M 77	不明	(5.2)	(7.2)	0.5	89.7	鉛青銅か	方形区画の金属方形区画に褐色固体が埋め込まれる		覆土下層	PL19
M 78	締結部品	9.3	6.6	5.5	261.5	銅合金	楕円形の金属環の側面に4孔 頂部に1孔のネジ穴を有する		覆土下層	PL19
M 79	不明	13.7	9.0	1.2	113.8	銅合金	二重の円環がネジによって締結される		覆土下層	PL20
M 80	冷却部品か	17.7	11.9	0.8 × 4	2860.0	鉄	両面に押出しピン状の小区画を作る 4連		覆土下層	PL20
M 81	トレモーターか	10.7	15.0	1.1	248.7	銅合金	方形图形、円形图形が鋲抜かれる 10cmの目盛りあり		覆土下層	PL20
M 82	カイモグラフ	8.0	16.0	0.6	950.0	鉄	ネジ山を有する鉄芯に円盤が付く		覆土下層	PL20
M 83	不明	23.3	12.2	2.0	1280.0	銅合金・鉄	三角形の扁平な地金板の下部にネジ2点 上部側面にネジ2点が付く		覆土下層	PL21
M 84	不明	23.3	12.2	2.0	1300.0	銅合金・鉄	三角形の扁平な地金板の下部にネジ2点 上部側面にネジ2点が付く		覆土下層	PL21
M 85	不明	20.1	20.0	2.8	5900.0	鉛青銅・鉄	表面金属板1枚、表面金属板4枚で構成される		覆土下層	PL21
M 86	マッチ盤	29.5	22.4	0.1	565.0	銅合金	方形板に縦10孔、横15孔の計150孔 左端縦列に「ア～コ」、上端・下端横列に「1～15」、右端縦列に「15、30、・・・150」の累計孔数を陰刻		覆土下層	PL20
M 87	不明	61.5	21.0	1.6	965.0	鉄	上部方形環に鉄棒を溶接する		覆土下層	PL20
M 88	ブラシ	14.9	1.2	0.4	7.9	プラスチック	「東京 資生堂」 資生堂社章 陰刻		覆土下層	PL20

(4) 土坑

**第6号土坑 (第 61・62 図)**

**位置** 調査区中央北部 A2d3 区, 標高 22 m ほどの台地中央南部に位置している。

**規模と形状** 長軸 1.31 m, 短軸 0.89 m の隅丸方形である。長軸方向は, N – 71° – E である。底面はほぼ平坦で, 壁面は外傾して立ち上がっている。

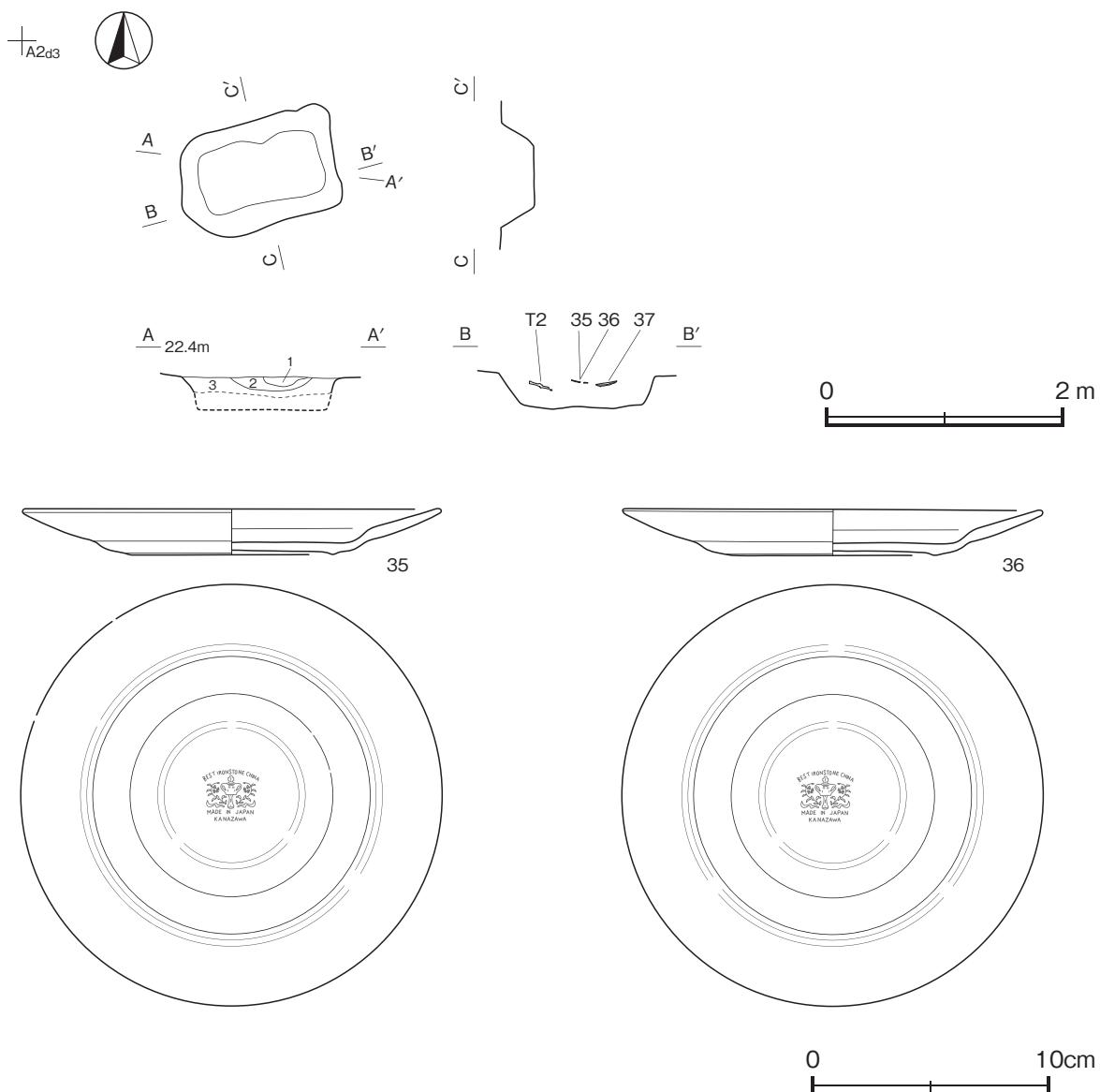
**覆土** 3 層に分層できる。焼却による焼土・炭化物を多く含んでおり, 埋め戻されている。

**土層解説 (A – A')**

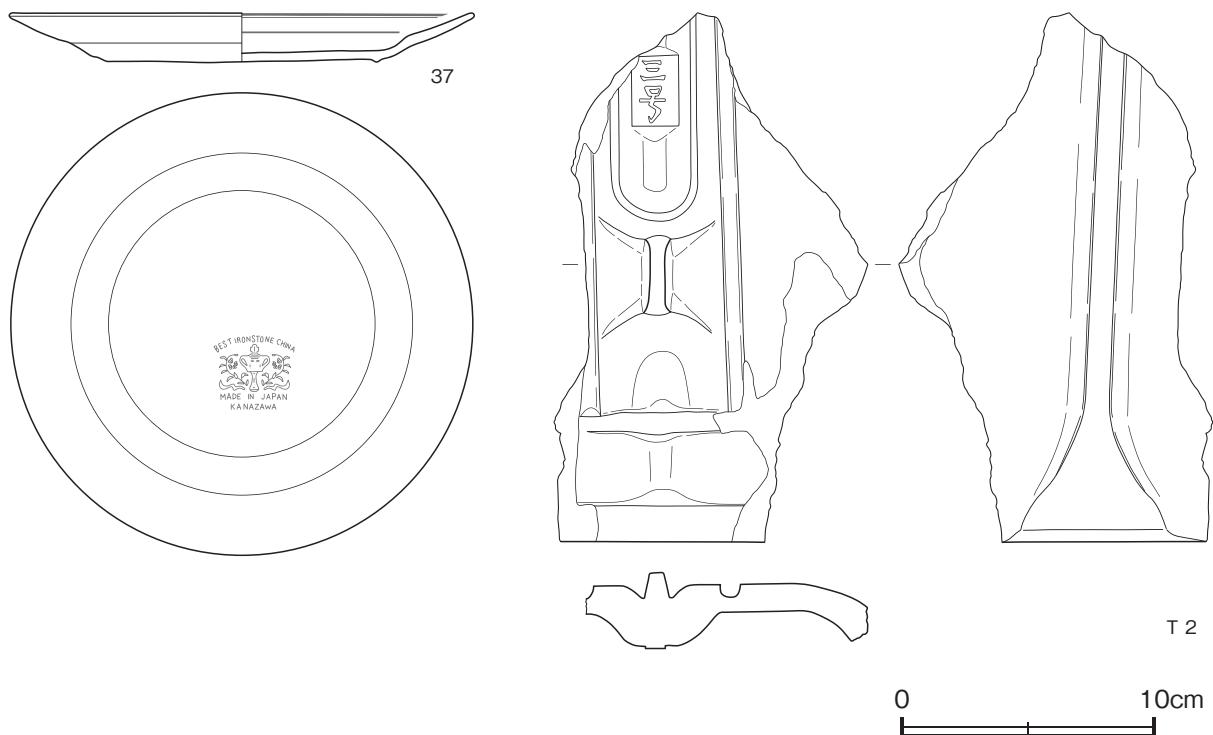
1	褐 色 ロームブロック多量 (締まり強い)	3	暗赤褐色 炭化物多量 (締まり強い)
2	赤褐色 焼土ブロック・炭化物・灰多量 (締まり強い)		

**遺物出土状況** 磁器片 6 点 (碗 1, 皿 3, 碓子 2), 瓦片 4 点, 金属製品 1 点 (鉄釘) が, 覆土上層から焼土とともに出土している。瓦片 (T2) は海軍航空要員研究所建物に葺かれたものである。

**所見** 遺物の帰属時期等から昭和時代のものと判断される。



**第62図 第6号土坑・出土遺物実測図(1)**



第63図 第6号土坑出土遺物実測図(2)

第6号土坑出土遺物観察表（第61・62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	磁器	皿	17.7	2.0	8.6	精緻	白	底面「BEST IRONSTONE CHINA」「MADE IN JAPAN」「KANAZAWA」ゴム版 透明釉	覆土中	100%
36	磁器	皿	17.8	2.0	8.6	精緻	白	底面「BEST IRONSTONE CHINA」「MADE IN JAPAN」「KANAZAWA」ゴム版 透明釉	覆土中	80%
37	磁器	皿	18.4	2.0	10.6	精緻	白	底面「BEST IRONSTONE CHINA」「MADE IN JAPAN」「KANAZAWA」ゴム版 透明釉	覆土中	100% PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	特徴	出土位置	備考
T2	瓦 (棟瓦)	21.0	[11.2]	2.85	石英	良好	表面「三号」陽刻	覆土中	

#### 第24号土坑 (第63図)

**位置** 調査区中央北部 A2c9 区, A2d8 ~ A2d10 区, 標高 22 m ほどの台地南部に位置している。

**重複関係** 第3号溝を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径 7.22 m, 短径 4.07 m の長楕円形である。長径方向は, N - 65° - E である。北側に突出する掘り込みを有する。底面は凹凸をなし, 不整形である。断面は有段で, 壁面は外傾している。

**覆土** 4層に分層できる。灰白色粘土粒子を含むことから, 埋め戻されている。

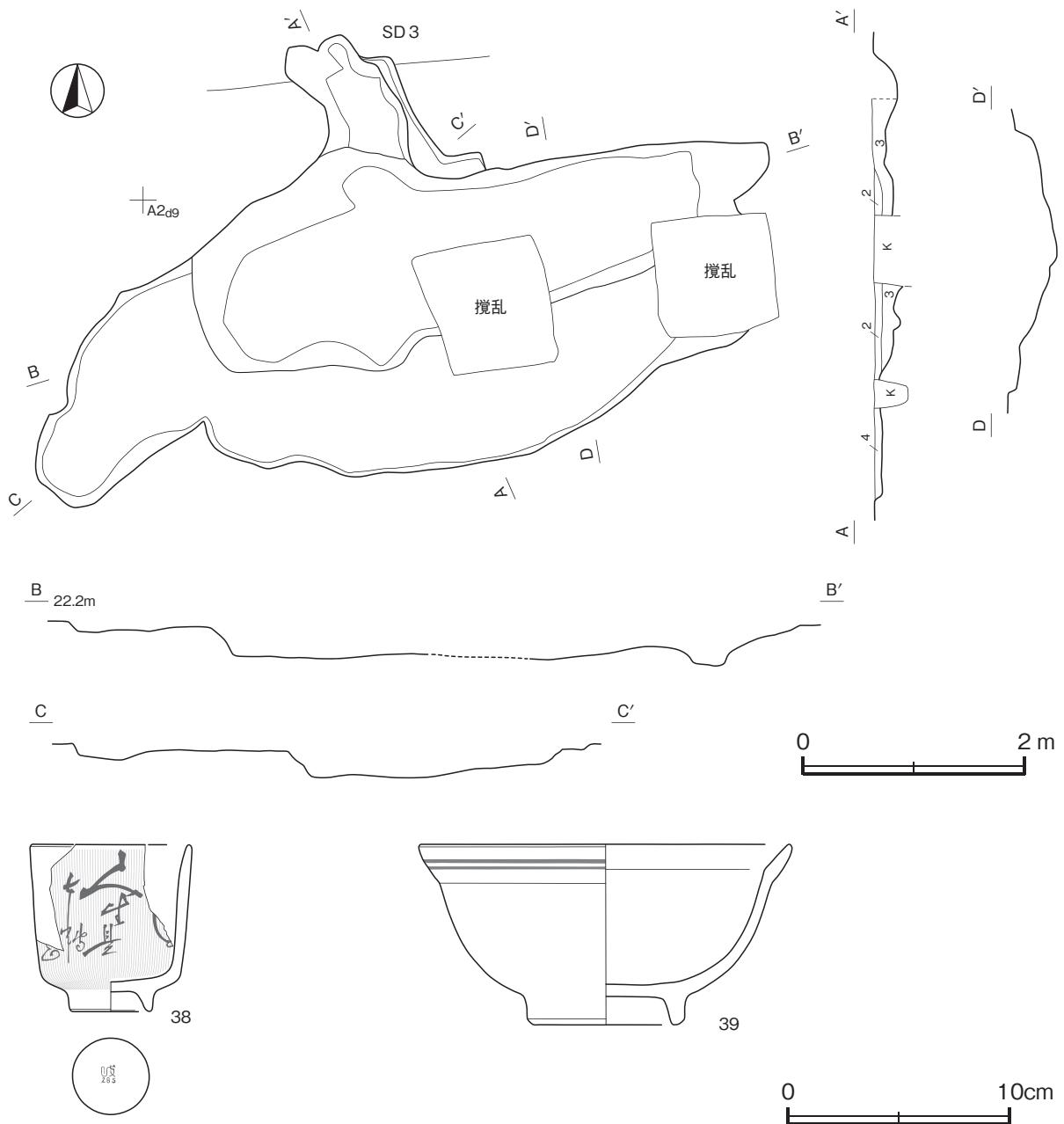
#### 土層解説 (A-A')

- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量, 白色粘土塊少量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量, 白色粘土粒子少量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・白色粘土塊中量   | 4 暗褐色 ロームブロック少量           |

**遺物出土状況** 磁器片 13 点 (碗 11, 碟子 2), ガラス製品 15 点 (瓶 10, アンプル 5) が覆土中から出土している。

38 には統制番号「岐 285」とあり, 39 はいわゆる「工場食器」である。いずれも太平洋戦争中のものである。

**所見** 北側突出部は第3号溝と接続しており, 簡易的な排水施設の可能性が考えられる。第3号溝が昭和時代に位置づけられることから, 本跡も同時期のものと判断される。



第64図 第24号土坑・出土遺物実測図

第24号土坑出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
38	磁器	碗	[7.3]	7.5	3.5	精緻	淡緑	外面「人生甚(不明)」底面「岐285」ゴム版	覆土中	70% PL22
39	磁器	碗	[16.8]	8.1	6.6	精緻	白	外面緑色二重圏線 工場食器	覆土中	70% PL22

表6 現代土坑一覧表

番号	位置	長軸径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
6	A2d3	N - 71° - E	隅丸方形	1.3 × 0.9	28	平坦	外傾	人為	磁器, 瓦, 金属製品	
24	A2c9	N - 65° - E	長楕円形	7.2 × 4.0	59	凹凸	外傾	人為	陶器, 瓦, ガラス製品	SD3 → 本跡

#### 4 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、溝跡3条、土坑15基、柱穴列3条1か所を確認した。ここでは土坑1基、柱穴列の特徴等を記述し、他は一覧表を掲載する。

##### (1) 土坑

###### 第23号土坑 (第65図)

**位置** 調査区中央部のA3f1区、標高ほぼ22mの台地南部に位置している。

**規模と形状** 長軸2.01m、短軸1.35mの長方形である。深さは75cmで、長軸方向は、N-58°-Wである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がっている。

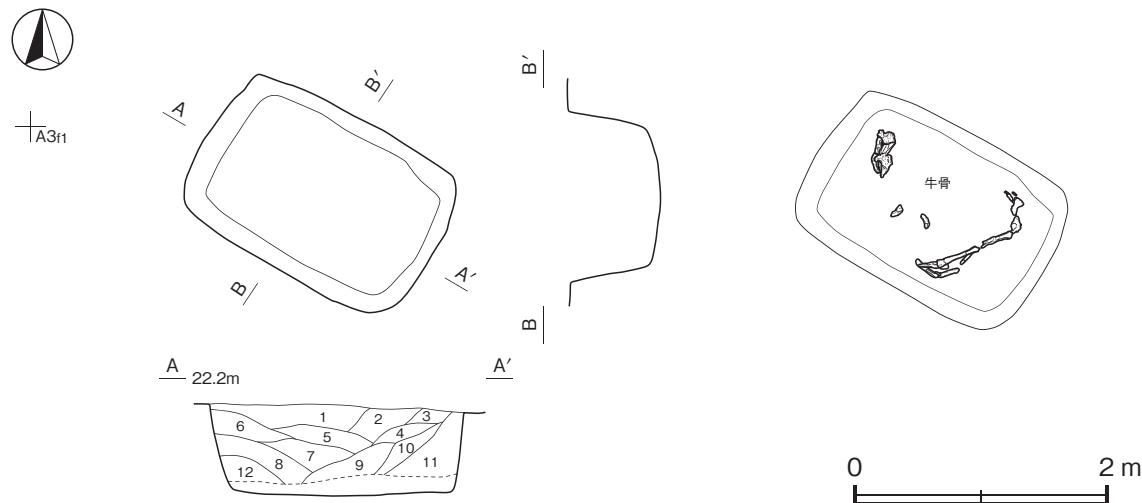
**覆土** 12層に分層できる。炭化粒子を包含しており、とくに第12層では多く検出された。ただし焼土は確認されていない。堆積状況から埋め戻されていると思われる。

###### 土層解説 (A-A')

1	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子微量 (締まり強い)	7	暗	褐	色	ロームブロック微量
2	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子微量 (締まり強い)	8	暗	褐	色	炭化粒子中量、ロームブロック少量
3	褐	色	ロームブロック微量 (締まり強い)	9	暗	褐	色	炭化粒子・ロームブロック微量
4	暗	褐	色	ロームブロック微量	10	褐	色	ロームブロック多量
5	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	11	褐	色	ローム粒子多量	
6	暗	褐	色	炭化材微量	12	暗	褐	色
								炭化粒子多量、ロームブロック中量

**遺物出土状況** 底面から牛骨が一頭分出土している。牛骨は、頭部を北西隅に置き、南東隅に脚部が来るよう埋葬されている。また、混入と思われる土師器片4点（高壺2、甕1、壺1）が覆土中から出土している。

**所見** 牛骨の脚部が折り曲げられていない状況などから、近世の牛を埋葬した土坑と考えられる。



第65図 第23号土坑・出土遺物実測図

表7 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	A1h3	N - 0°	不整形	2.45 × 1.55	95	平坦	外傾	人為	土師器	
2	B1b3	N - 10° - W	(長方形)	1.64 × (0.82)	30	凹凸	外傾	人為	土師器, 金属製品	
4	A1f4	N - 24° - W	円形	1.40 × 1.20	60	平坦	外傾	人為	-	昭和期か
8	A2d4	N - 86° - W	長方形	2.88 × 1.31	54	凹凸	外傾	人為	土師器, 瓦	昭和期か
11	A3f5	N - 41° - W	円形	0.74 × 0.73	33	平坦	外傾	人為	土師器, 金属製品	第2号地下壕→本跡
12	A3f5	N - 34° - W	円形	0.78 × 0.65	13	平坦	外傾	人為	土師器	第2号地下壕→本跡
15	A3h3	N - 11° - E	(長方形)	2.10 × (0.90)	10	凹凸	外傾	自然	-	
17	A3j4	N - 49° - W	(長方形)	(1.34) × 0.54	79	凹凸	外傾	人為	-	
18	A2h7	N - 80° - W	正方形	1.03 × 0.97	17	平坦	外傾	人為	-	現代
19	B1c8	N - 85° - W	(円形)	0.57 × (0.24)	15	平坦	外傾	自然	-	
20	B1b9	N - 80° - W	(円形)	0.50 × (0.31)	14	有段	外傾	自然	-	
21	A2j1	N - 8° - W	円形	1.28 × 1.17	40	凹凸	外傾	人為	-	
23	A2e1	N - 58° - W	長方形	2.01 × 1.35	75	平坦	外径	人為	土師器, 牛骨	
28	A2i9	N - 59° - W	不整形	1.12 × 0.95	32	平坦	外傾	自然	土師器, 金属製品	昭和期か
29	A2i9	N - 53° - W	楕円形	1.86 × 1.03	28	平坦	外傾	人為	土師器	SK30→本跡
30	A2i9	N - 46° - W	長方形	1.51 × 0.75	22	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK29

## (2) 溝跡

時期不明の溝は3条あり、その実測図は遺構全体図に示し、一覧表をここに記載する。

表8 時期不明溝一覧表

番号	位置	方向	形状	規 模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	A1f2 ~ A1f3	N - 62° - E	直線状	(2.2)	0.37	0.7 ~ 0.15	61	U字	直立	自然	-	
2	A1f3 ~ A1i3	N - 20° - W N - 9° - E	く字状	11.4	0.3 ~ 1.2	0.2	27	有段	直立	人為	-	SK 1 → 本跡
7	A2e3 区	N - 72° - W	直線状	(3.9)	0.41	0.27	16	平坦	直立	自然	土師器	

## (3) 柱穴列

## 第1号柱穴列（第66図）

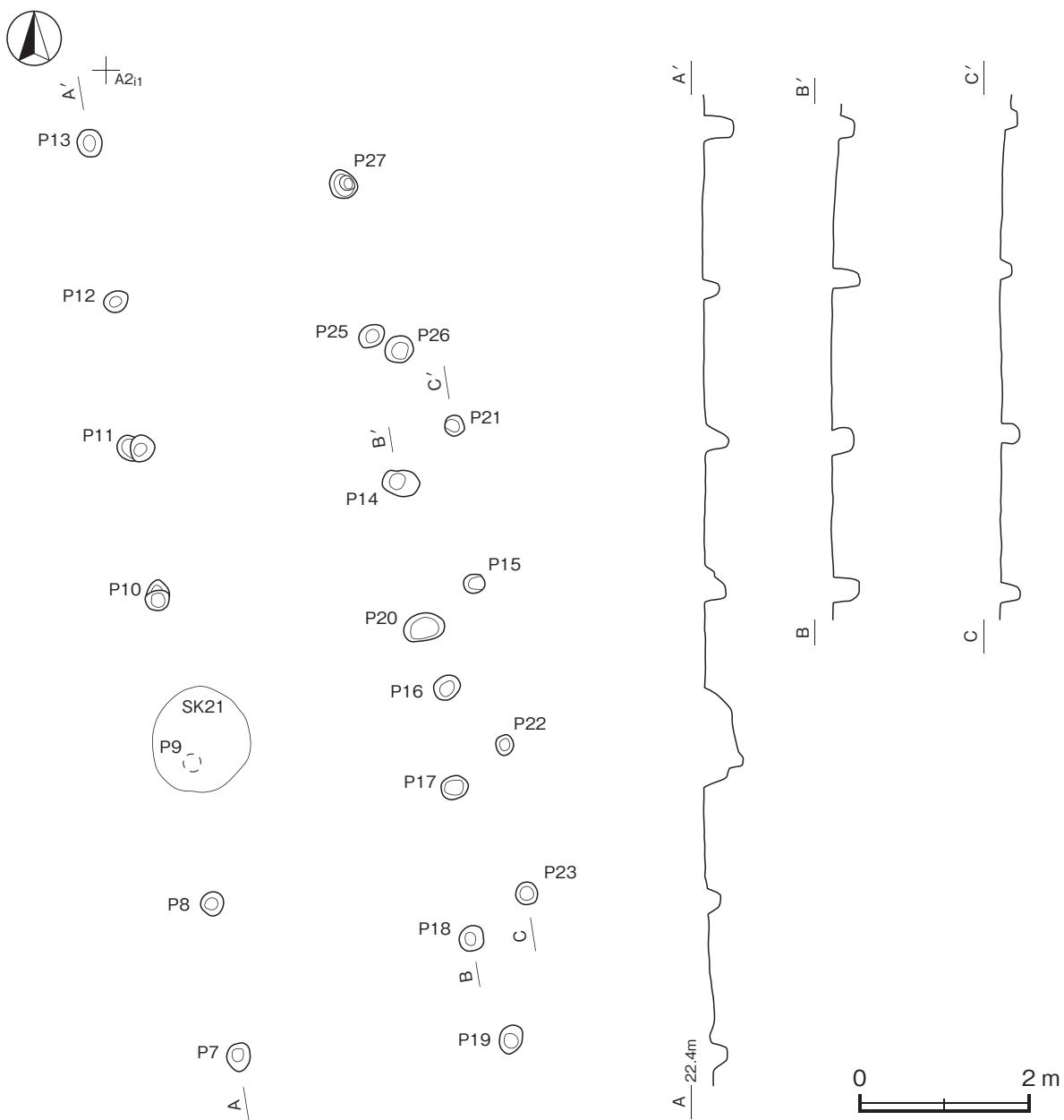
位置 調査区中央南部のA2i1区、標高22mほどの台地南部に位置している。

重複関係 第21号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 3条の柱穴列が南北に延びている。西側に位置する柱穴列(A-A')が最も長く、南北11.3mにわたって延びている。そこから東へ約3mの位置に平行して2条の柱穴列が確認できた(B-B', C-C')。

覆土 いずれもロームブロック・白色粘土ブロックを中量含む单一土層で、埋め戻されている。

所見 遺物は出土していないが、覆土の状況から昭和時代の可能性がある。



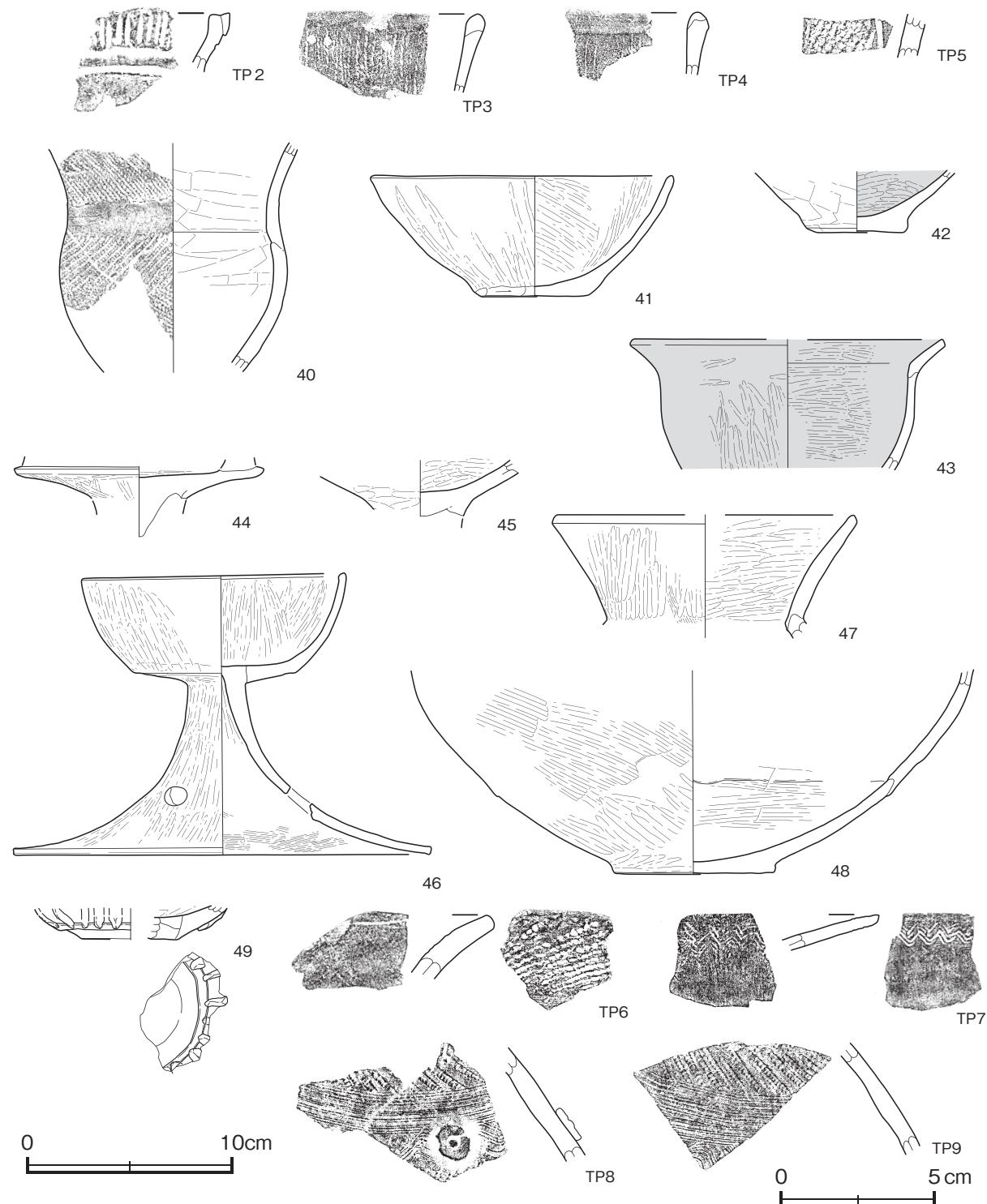
第66図 第1号柱穴列実測図

表9 第1号柱穴列ピット一覧表

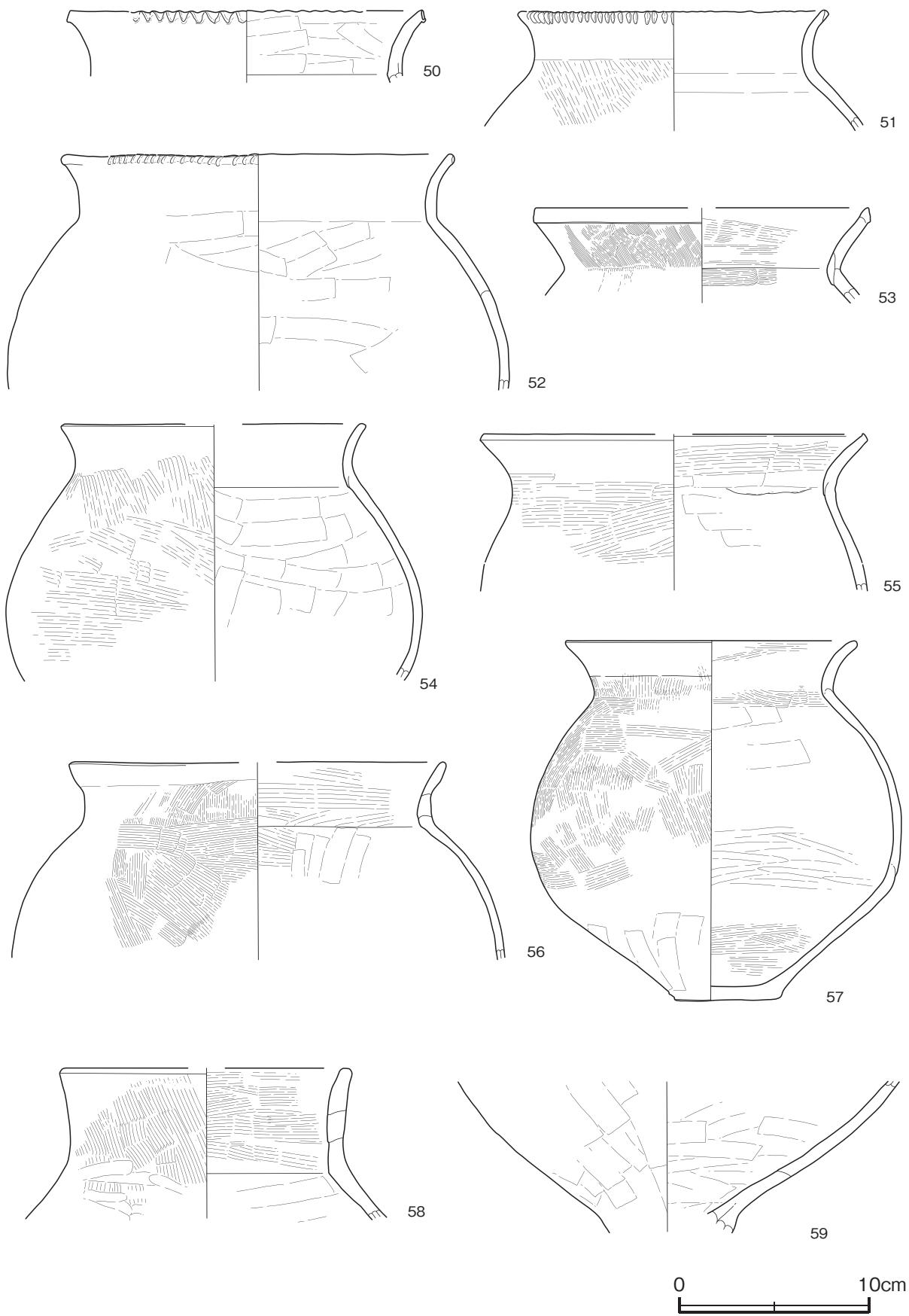
番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
7	32	30	26	17	32	26	32
8	28	28	25	18	29	28	17
9	126	118	45	19	32	28	-
10	38	30	25	20	50	30	26
11	30	26	26	21	24	22	23
12	32	28	18	22	22	20	13
13	34	30	36	23	26	26	13
14	45	30	30	25	32	25	20
15	25	22	22	26	32	32	24
16	33	29	-	27	36	32	4

(4) 調査区中央南部の遺構外出土遺物

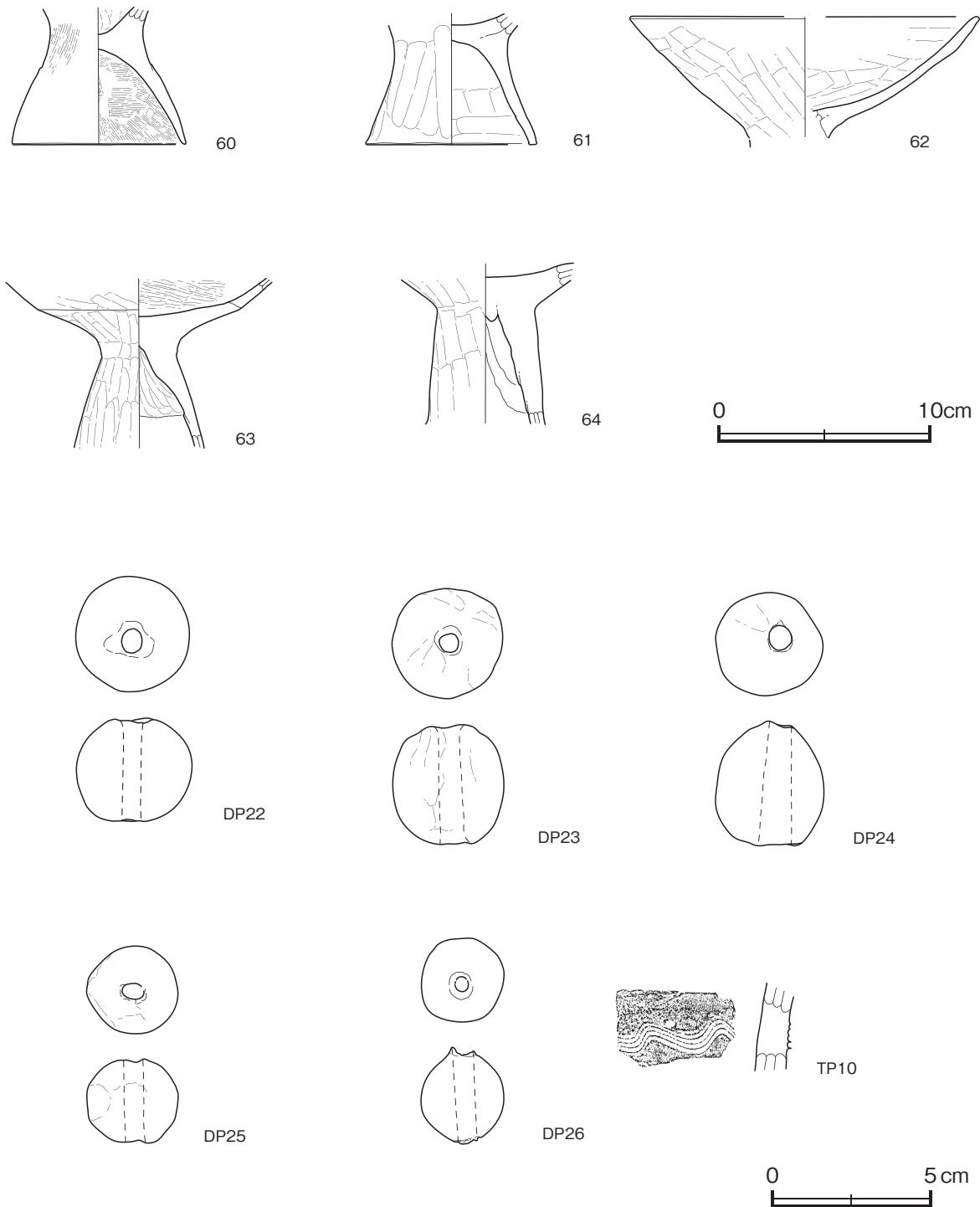
調査区中央南部、B2a6～B2a7にかけての第4号・第8号地下壕陥没坑の覆土中から多くの土師器が出土した。遺構は確認されなかったものの、その出土量から遺構が存在していたことが想定できる。古墳時代前期の土師器を主体としているが、62・63・64のように古墳時代前期末～中期の土師器も確認された。



第67図 遺構外出土遺物実測図(1)



第68図 遺構外出土遺物実測図(2)



第69図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(1) (第67~69図)

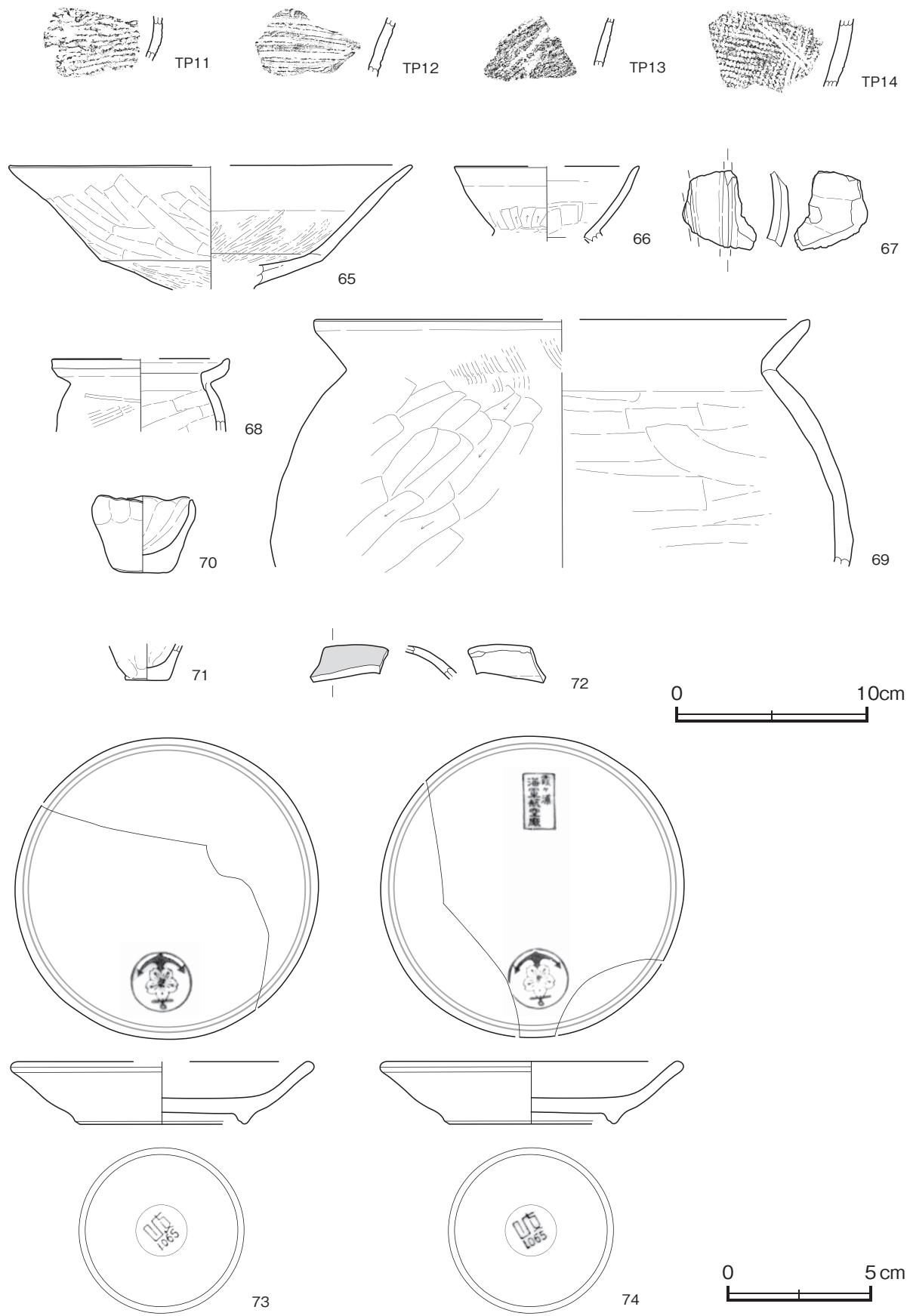
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
40	弥生土器	壺	-	(11.2)	-	石英	黒褐	普通	外面上半附加条1種(RL+L) 下半附加条1種(LR+R) 中位にナデ消しによる無文帯	第8号地下壕	40%
41	土師器	鉢	[14.8]	(5.9)	[5.3]	石英・長石・黄褐色粒子	にぶい黄橙	普通	外面磨き、下端部ヘラケズリ 内面磨き	第8号地下壕	90%
42	土師器	鉢	-	(3.0)	[4.4]	石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい褐色	普通	外面ヘラナデ 内面磨き、赤彩	第8号地下壕	10%
43	土師器	鉢	[15.4]	(6.4)	-	石英・黒色粒子	にぶい赤褐	普通	外面ナデの後、磨き 内面磨き 外内面赤彩	第8号地下壕	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師器	装飾器台	-	(3.4)	-	石英	黄橙	普通	外面磨き 内面磨き	第8号地下壕	10%
45	土師器	装飾器台	-	(2.8)	-	石英・黒雲母	橙	普通	外面磨き 内面磨き	第8号地下壕	10%
46	土師器	高坏	[13.0]	(13.8)	[20.5]	石英・褐色粒子	にぶい黄橙	普通	外面磨き 杯部内面磨き 脚部内面ハケ目 脚部に3孔	第8号地下壕	80% PL22
47	土師器	壺	[14.6]	(6.0)	-	石英	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目の後、磨き 内面磨き	第8号地下壕	5%
48	土師器	壺	-	(10.0)	[7.8]	石英・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目、下端部に粗い磨き 内面ハケ目	第8号地下壕	20%
49	土師器	装飾壺	-	(1.5)	-	石英	にぶい黄橙	普通	外面に細い蔓状粘土を籠状に貼る	第8号地下壕	5% PL22
50	土師器	甕	[19.6]	(3.8)	-	石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁端部押圧によって波状に成形 内面ヘラナデ	第4号地下壕	5%
51	土師器	甕	[16.4]	-	-	石英	黒	普通	口縁端部ヘラ状工具によるキザミ 肩部外面にハケ目 内面ナデ	第8号地下壕	20%
52	土師器	甕	[20.8]	(12.4)	-	石英・赤色粒子	黒褐	普通	口縁端部外面キザミ 体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	第8号地下壕	25%
53	土師器	甕	[17.4]	(5.0)	-	石英・赤色粒子	褐灰	普通	外面ハケ目、口縁端部面取り 内面ハケ目	第8号地下壕	5%
54	土師器	甕	[16.0]	(13.5)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	外面ハケ目の後、口縁部ナデ 内面ナデ	第8号地下壕	25%
55	土師器	甕	[20.0]	(8.2)	-	石英・黒色粒子・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁端部面取り 体部外面ハケ目 口縁部内面ハケ目 体部内面ヘラナデ	第8号地下壕	20%
56	土師器	甕	[19.9]	(10.4)	-	石英・褐色粒子	浅黄橙	普通	外面ハケ目の後、口縁端部ナデ 内面ハケ目の後、体部ヘラナデ	第8号地下壕	20%
57	土師器	甕	[15.3]	(19.0)	[5.5]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目の後、口縁部ナデ、体部下半ヘラナデ 内面ハケ目の後、体部上半ヘラナデ、体部中位細かいナデ	第8号地下壕	80% PL22
58	土師器	甕	[15.4]	(7.9)	-	石英・長石	橙	普通	外面ハケ目の後、肩部一部ナデ 口縁部内面ハケ目 体部内面ヘラナデ	第8号地下壕	5%
59	土師器	甕	-	(8.0)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	第8号地下壕	20%
60	土師器	甕	-	(6.5)	[8.2]	石英・黒色粒子	明黄褐	普通	外面ハケ目の後、ナデ 内面ハケ目	第8号地下壕	30%
61	土師器	甕	-	(6.2)	[8.1]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ナデ 内面上半ヘラナデ、端部指ナデ	第4号地下壕	10%
62	土師器	高坏	[16.6]	(5.7)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	第4号地下壕	40%
63	土師器	高坏	-	(8.0)	-	石英・角閃石	橙	普通	外面密なヘラナデ 杯部内面磨き 脚部内部指ナデ	第4号地下壕	40%
64	土師器	高坏	-	(7.6)	-	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	不良	外面ヘラナデ 坏部内面ナデ 脚部内面指ナデ	第4号地下壕	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP2	縄文	深鉢	石英	にぶい褐	口縁部ヘラ状工具によるキザミ 口縁下には1条の沈線 内面ナデ	第4号地下壕	5%
TP3	縄文	深鉢	石英	にぶい黄橙	外面無節縄文 R	第8号地下壕	5%
TP4	縄文	深鉢	石英・黒雲母	にぶい黄橙	外面無節縄文 R	第8号地下壕	5%
TP5	縄文	深鉢	石英・黒色粒子	橙	外面複節縄文(捺り不明)を沈線で区画	第8号地下壕	5%
TP6	弥生土器	壺	石英	橙	外面ナデ 内面単節縄文 LR	第4号地下壕	5%
TP7	土師器	壺	石英・黒色粒子	明赤褐	外内面櫛描波状文、赤彩	第4号地下壕	5%
TP8	土師器	装飾壺	石英・角閃石・赤色粒子	橙	外面上位より櫛歯状工具による刺突、横線文、波状文 中位に円形浮文 内面ヘラナデ	第8号地下壕	5% PL22
TP9	土師器	装飾壺	石英・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙	外面上位より櫛歯状工具による刺突、横線文、波状文 内面ヘラナデ	第8号地下壕	5%
TP10	須恵器	大甕	石英	灰色	外面櫛描波状文	第8号地下壕	3%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	手法の特徴ほか	出土位置	備考
DP22	土玉	3.6	3.2	0.7	41.1	石英・黒色粒子	指ナデ 一方向からの穿孔	第4号地下壕	100%
DP23	土玉	3.5	3.8	0.6	44.4	石英	不整な指ナデ	第4号地下壕	100%
DP24	土玉	3.4	3.9	0.8	39.8	石英・黄褐色粒子	指ナデ 一方向からの穿孔	第4号地下壕	100%
DP25	土玉	2.9	2.6	0.7	19.3	石英・橙色粒子	不整な指ナデ	第4号地下壕	100%
DP26	土玉	2.6	3.1	0.5	19.9	石英	指ナデ	第8号地下壕	100%

(5) その他の遺構外出土遺物



第70図 遺構外出土遺物実測図(4)

## 遺構外出土遺物観察表(2) (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
65	土師器	高坏	[21.2]	(6.5)	-	石英	橙	普通	外面上半密なヘラナデ 下半ヘラ磨き 内面磨き	第1号地下壕	40%
66	土師器	埴	[9.7]	(3.9)	-	石英	にぶい黄橙	普通	口縁端部外面ナデ、下半部ヘラケズリ 内面ヘラナデ	第3号地下壕	10%
67	土師器	壺	-	(4.2)	-	石英	橙	普通	外面棒状浮文2条 内面ヘラナデ	第1号地下壕	5%
68	土師器	甕	[9.3]	(3.8)	-	石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部受口状 体部外面ハケ目 内面ヘラナデ	第3号地下壕	20%
69	土師器	甕	[23.0]	(14.0)	-	石英・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	外面ハケ目の後、体部ヘラナデ 内面ヘラナデ	第2号地下壕	30%
70	土製品	手捏土器	[5.1]	(4.1)	[3.2]	石英・黒色粒子	明褐	普通	外面指ナデ 内面指ナデ	第3号地下壕	90%
71	土製品	手捏土器	-	(1.9)	[2.3]	石英	にぶい黄橙	普通	外内面指ナデ	第3号地下壕	20%
72	灰釉陶器	壺	-	(2.0)	-	石英	灰色	良好	外面灰釉 内面ナデ	第2号地下壕	5%
73	磁器	小皿	[10.6]	2.3	5.6	精緻	白	良好	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」 桜に錨ゴム版 透明釉	TM2撹乱覆土中	70%
74	磁器	小皿	[10.6]	2.2	5.7	精緻	白	良好	内面二重圈線「霞ヶ浦海軍航空廠」 桜に錨ゴム版 透明釉	TM2撹乱覆土中	70%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	石英	明黄褐	外面無節縄文(Rか)	第2号地下壕	5%
TP12	縄文土器	深鉢	石英	橙	外面集合沈線	第3号地下壕	5%
TP13	縄文土器	深鉢	石英・纖維	橙	外面無節縄文、撚り不明	第3号地下壕	5%
TP14	縄文土器	深鉢	石英・赤色粒子	明赤褐	外面単節縄文 RL	第3号地下壕	5%

## 第4節 まとめ

### 1 はじめに

当遺跡の主な遺構としては、縄文時代の陥し穴3基、古墳3基、古墳時代の竪穴遺構1基、近代の地下壕9基、現代不明施設1基が確認された。当地は、昭和18年に海軍航空要員研究所が建設されたことによりそれ以前の多くの遺構が損壊したことが分かった。とくに確認された古墳時代の遺構は少なかったものの、当時代の遺物は地下壕の崩落土中等から多く検出された。

### 2 古墳時代

古墳時代の遺構は少数ではあったが、遺物を多く検出し、当時代の遺構が存在していたことが想定できる。とくに調査区中央南端部でまとまって出土しており、小規模な集落が存在したと考えられる。

まず古墳時代前期の遺物は、前期前半段階の様相が見られ、とくに4世紀第1四半期の特徴を示すもの多い。甕はハケ目状工具の刺突によるキザミ口縁を有するもの（遺構外-51・52）が認められる。また遺構外-50のように口縁部を波状にするものもある。おそらくこれらは台付き甕と想定されるが、57のような外面ハケ目調整の平底甕も確認できる。開脚高坏（遺構外-46）も確認でき、これらはいずれも南関東地域からの系譜が想定できる。このような南関東地域からの影響は、霞ヶ浦一帯の遺跡でも認めることができ、古墳時代の開始期における大勢を見ることができる。

それらとは異なる系譜が想定される土師器も確認できた。遺構外-49は粘土紐による被籠状の装飾を有する壺で、「被籠状突縁壺」と呼ばれるものの可能性が高い。その系譜は明らかではないが、同様の壺は庄内式期の東海から関東にかけて出土しているという<sup>1)</sup>。また遺構外-TP7・TP8・TP9は、櫛描きによる文様を施

すもので、東海以東の系譜が想定される。遺構外-44は装飾器台や北陸系高坏と呼ばれるもので、霞ヶ浦一帯では比較的多く確認される。その他、遺構外-68のように受口状の口縁部を有するものもある。

このように南関東地域からの影響という大きな流れの方で広域にわたる関係性があったことが指摘できる。なお、S字甕は小片でも確認できず、当地域の特徴と共にしている。

また古墳時代中期に位置づけられる土師器も少量ではあるが確認できた。遺構外-63は古墳時代中期前半に認められる高坏で、遺構外-64はそれより後出するものである。

古墳は3基確認された。第1号墳からは、6世紀初頭に位置づけられる埴輪が出土している。形象埴輪は確認されていないが、確認できた周溝が北西部分だけである点は留意しなくてはならない。第2号墳からは、埴輪は出土せず、6世紀初頭の土師器坏が周溝底面から出土している。周溝底面から坏などの供膳具が出土するものは、東日本を中心とした当時期の古墳群で広く認められており、初期群集墳成立との関係性が指摘されている<sup>2)</sup>。関東においては埼玉県新屋敷古墳群<sup>3)</sup>、群馬県高崎情報団地古墳群<sup>4)</sup>・古海松塚古墳群<sup>5)</sup>・塚廻り古墳群<sup>6)</sup>・本関町古墳群<sup>7)</sup>、栃木県寺野東古墳群<sup>8)</sup>などでも確認されている。

第3号墳は、明確に時期を示す遺物は出土していないが、古墳時代前期から中期の土師器が出土しており、古墳時代中期に位置づけられる可能性が考えられる。

このように古墳時代前期前半段階から集落跡が営まれ、古墳時代中期から後期にかけては古墳群が展開したことが分かる。

### 3 近代

昭和18年に当地に建設された海軍航空要員研究所は、調査区北側に「ヨ」の字形の二階建て建物が2棟建っていたことが分かっている。海軍航空要員研究所とは、採用試験およびその後の操縦要員と偵察要員とに区分する適性検査が行われていた所である。もとは適正部と呼ばれ、昭和15年に現在の私立霞ヶ浦高校のある場所に置かれ、その後、昭和18年に当地への移転が始まり、昭和20年に完成している<sup>9)</sup>。

調査区部分には建物はなかったが、その施設に伴う地下壕が掘削されていた。現在では、それら地下壕入口部分は全て閉塞されているが、台地南側斜面には出入口の痕跡が現在でも見られる(第72図)。地下壕は大規模に掘削されたようで、以前は台地東側斜面から北側斜面にも出入り口が多く開口していたようである。

#### ア 地下壕

地下壕は掘削方法によって大きく二つに分けられる。一つは開削式と呼べるもので、地上部分から掘り込み、後に屋根をかけるものである。もう一つは横穴式と呼べるもので、台地・丘陵などの崖面・法面から横方向に掘削し、そのまま地山が天井部となるものである。前者には第1号地下壕・第4号地下壕北半部分・第5号地下壕が、後者には第2号・第3号・第6号・第7号・第8号・第9号地下壕、第4号地下壕南半部分が該当する。

開削式の第1号地下壕は、中央部分から南東方向へ向かって屈曲しているが、当初は第4号地下壕に見られるように南北にまっすぐ掘削する予定であったと推測される。これは地下壕南半部分にかかる埋没谷による軟弱な地盤が影響していることが、その構築方法から分かる。まず埋没谷は一度底面近くまで掘削される。そしてそれを埋めながら地下壕東壁を構築していく。東壁付近の構築土は細かく盛られていることから、一度全て埋めた後に掘り込んだのではなく、盛土による構築の可能性が考えられる。一方の西壁は地山ロームの掘削によって構築しようとしたため、埋没谷の法面に沿うように南東方向へ屈曲するという不自然な形態をなしたと考えられる。東壁の土留めと考えられる鉄板が検出されたことは、その軟弱な地盤への措置と想定される。

なおその埋没谷における造作は北西側から埋没谷中央を走る作業道（SD16）を用いて行われたと考えられ、その底面には足跡も残っている。

本跡の南部では一端括れた後、さらに南へ伸びているが、そこでは既に壁面は低く最終的には床面硬化面のみとなる。地下壕は未完成であったことが言い伝えられており<sup>10)</sup>、当地下壕も未完成であった可能性が高い。

第4号地下壕は、北側入り口部分から南へ約17mの地点までは、その埋没状況から開削式であったと想定される。それより南側では横穴式で、覆土には天井部分と考えられる地山ローム層の崩落が見られる。

地下壕の出入り口部分が確認された第1号地下壕・第4号地下壕では、その出入り口前面に柱穴が3か所確認された。軍施設における地下壕出入り口部分の構造についての史料は多くは確認できなかったが、昭和15年に財団法人大日本防空協会が発行した『防空壕構築指導要領』が参考になる<sup>11)</sup>。そこでは防毒のために出入り口部分の気密性に留意することが記されている。入口部分に木枠を設け、不浸透性の布や紙を幕として貼ることが記され、入口部分の構築に注意していたことが読み取れる。また出入り口部分の扉の後方約1m以上の所にさらに気密扉または防毒幕を設けるように、とも書かれており、第1号地下壕の上から階段2段目、第4号地下壕の上から階段4段目で確認された壁面の割り込み・仕切り溝はそのような気密性・防毒性を図ったものと推測される。

#### イ 出土遺物

出土した遺物は、いずれもその出土状況から使用時のものではなく、廃棄されたものと想定される。終戦直後、軍関連設備を多量に焼却処分していたことが伝えられており、当遺跡においてもその痕跡と考えられる出土状況が見られた。

まず第1号地下壕は、短期間に人為的に埋められたことが覆土の状況から想定されたが、その埋土底面から機械部品がまとまって出土している。これらはネジなどの締結部品が外されたものが多いことから、製品を分解後に廃棄した可能性が高い。出土した部品には松下電器の社章（M矢）や日本無線電信電話株式会社の銘が認められ、またバリコン等が確認されることから無線機であると推測される。松下電器（当時）は、無線機をはじめ軍需用品を供給しており、その製品の一つと考えられるが、型番等は分からなかった。なお海軍航空要員研究所に勤務する女子技士もモールス信号などの通信法を学んでいたということである。

第3号溝跡からは焼土とともに金属部品・炭化紙が出土した。本跡では、比較的大形の部品が多く、検査器械部品が出土している。マッチ盤（M86）は一定時間内に150本のピンを盤上の孔に何本差し込むかを測定する器械である。性能検査器の一つで手作業の速度や集中力の優劣を判定するものである。視（覚）触覚弁別検査器（M60）は、大きさと厚さの異なるメダル（M43）を盤に開けた相応の孔に入れ、その時間を計測する性能検査器の一つである。目と触覚で弁別する能力を判定するものである<sup>12)</sup>。

また「錦生コロイド蓄電池」のパネル（M63）も出土している。これは配電がままならない戦時下において使用された電池式受信機の蓄電池である<sup>13)</sup>。その他、第3号溝から出土した炭化紙は全て炭化していたが、一部内容が判読できる部分があった。その内容から、二次試験で行われた知能検査の用紙と判断される。それらと同様の検査用紙は、霞ヶ浦高等学校に残っていたものが阿見町の予科練平和記念館で保管されている。その内容は、例えば羅列されたひらがなの中から指定されたひらがなのみを消去したりする注意力検査などがある。

出土した遺物は、国内製造会社によって作られたものが多いが、M39に「DRAEGER」（ドレーゲル）の刻印を認めることができた。その詳細は分からなかったが、ドイツの医療機器メーカーである可能性が考えられ

た。当社は、1889年に創立し、第一次世界大戦以降、ガスマスク等を製造していたようである。当社と日本海軍との関係性については分からなかったが、国外製造会社から需要していたことが分かる。

海軍航空要員研究所においては、防衛省防衛研究所所蔵の『海軍航空要員研究所保管目録綴』（以下、『保管目録綴』）<sup>14)</sup>、『海軍航空要員研究所概要』（以下、『概要』）<sup>15)</sup>および『引渡調書（Inventory for transfer）』<sup>16)</sup>が残っており、終戦後、連合国軍（米軍）へ引き渡すための施設および設備の目録が作成されている。そこには施設の略図および収められている各設備・備品の一覧が記され、当時の状況を窺い知ることができる。『概要』は全4葉、『保管目録綴』は全46葉の「海軍」銘の付いた縦罫用紙に記されており、本節末尾に引用掲載した。『概要』は、設立年月日・施設・編成・人員・研究計画が記されている。『保管目録綴』は、まず総計調書が付き、その後保管場所と想定される第一室から第八室までのそれぞれの目録が付けられている。その後には、前者とは筆跡の異なる保管器具目録が1葉付いている。そして最後に保管書類目録が綴じられている。

『引渡調書』に記されている施設の位置図には「ヨ」の字形の建物2棟が見られ、同敷地内には札場、自転車置き場などが記されている（第71図）。また備品目録には性能検査器など航空要員研究所で使用された機器が記されており、第3号溝跡で出土した視（覚）触覚弁別器やマッチ盤（棒挿検査器）なども記載されている。

ここで注意されるのが、敷地全域にわたって大規模に掘削された地下壕が全く記されていないことである。連合国軍（米軍）へ提出されたと考えられる『引渡調書』は、その日付が1945年（昭和20年）10月11日とされている。そして『概要』及び『保管目録綴』は昭和20年8月15日現在と記されており、その内容からもこれを元に『引渡調書』は作成されたと考えられる。『概要』・『保管目録綴』作成の時点ですでに地下壕は記されておらず、その時点にはすでに埋められていたか未記録にする理由があったのであろうか。

昭和20年6月10日の阿見大空襲の際には、本地下壕（第2号地下壕・第3号地下壕か）に負傷者が運び込まれたことが伝えられており<sup>17)</sup>、その際には地下壕は存在していたことが分かる。また第1号地下壕では埋土直下より当施設設備品が出土しており、さらに隠蔽を図ったかのように分解された状態で出土していることから単なる廃棄ではなく、終戦直後に火急的に廃棄したものと考えられる。おそらくその際に地下壕も埋めたものと考えらえるが、終戦直後にその労働力をどこから確保したのか等疑問の残るところである。

このような機械部品・検査器械の量と比べて什器は多くない。第4号地下壕から出土した霞ヶ浦海軍航空廠の印がある小皿（21～30）は、地下壕の崩落土上面から出土していることから、戦後廃棄された可能性が考えられる。いわゆる統制番号が「岐1065」とあることから美濃窯業株式会社製であることが分かる。日本海軍の什器には陶磁器は少ないため、その使用目的については今後の課題である。ホーロー製の鏡（第1号地下壕-M50）は、什器として使われていたことが分かっている。

#### 4 おわりに

本遺跡からは、海軍航空要員研究所で使用されたと考えられる器械部品が多量に出土し、日本海軍の実態の一部を窺い知ることができる。このような当時の検査器械は、現在、新潟大学、台湾大学、島津製作所創業記念資料館にその一部が所蔵されているが、発掘調査によって出土したものは管見による限り見当たらない。とくに部品一つになるまで分解された出土状況は、終戦時における状況を如実に示すものと理解できる。

#### 註

- 1) 高野陽子 「丹波の土器と地域間交流」『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』 学生社 2011年11月
- 2) 田村隆太郎 「木棺直葬墳の土器群と葬送儀礼」『森町円田丘陵の古墳群 静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第186集』2008年2月、山田俊輔 「古墳時代中期群集墓分析の新視覚」『月刊考古学ジャーナル』 No.528 ニューサイエンス社 2005年4

月など

- 3) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 「新屋敷遺跡（A 区）」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第 140 集 1994 年 3 月
- 4) 長井正欣ほか 「高崎情報団地遺跡」『高崎市遺跡調査会文化財調査報告書第 55 集』 1997 年 3 月
- 5) 太田市教育委員会 『塚廻り古墳群』 2012 年 3 月
- 6) 大泉町教育委員会 『古海松塚古墳群』 2002 年 3 月
- 7) 吉澤学 『本関町古墳群』 2011 年 9 月
- 8) 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団 「寺野東遺跡 7 (古墳時代墳墓編)」『栃木県埋蔵文化財調査報告書第 209 集』 1998 年 3 月
- 9) 阿見町『阿見と予科練～そして人々のものがたり～』2002 年 3 月
- 10) 阿見町『続阿見と予科練～そして人々のものがたり』2010 年 2 月 (197 頁) に収められている森戸すゑ氏の回想による
- 11) 財団法人大日本防空協会 『防空壕構築指導要領』 1940 年 12 月
- 12) 山越工作所 『性能検査法』 1931 年 7 月
- 13) 誠文堂新光社 『無線と実験』1937 年 9 月号 (原本未実見)
- 14) 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011063900、航空隊 引渡目録 2/14 (防衛省防衛研究所)」
- 15) 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011063800、航空隊 引渡目録 2/14 (防衛省防衛研究所)」
- 16) 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011064000、航空隊 引渡目録 2/14 (防衛省防衛研究所)」
- 17) 註 10 文献より

「海軍航空要員研究所保管目録綴」[JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011063900、航空隊 引渡目録 2/14 (防衛省防衛研究所)]

机椅子及機械具類保箋目録 (總計調書)

品名	稱呼	数量	記事
高等官用机	個	二〇	
判任官用机	ヶ	五	
技工士用机	ヶ	一五二	
大卓	ヶ	一六	
中卓	ヶ	二三	
小卓	ヶ	一一四	
高等官用机椅子	ヶ	四〇	
技工士用机椅子	ヶ	八二	
長椅子	ヶ	五四	
戸棚イ型	ヶ	二	
ヶ 口型	ヶ	四	
戸棚ハ型	個	三	
ヶ 二型	ヶ	九	
ヶ ホ型	ヶ	八	
更衣戸棚	ヶ	六	
洋服箪笥	ヶ	一	
製図台	ヶ	一	
金庫	ヶ	一	
木庫	ヶ	六	
一重寝台	ヶ	一七	
二重寝台	ヶ	三三	
衡立	ヶ	一	
藁布団	ヶ	二〇	
非常箱	ヶ	四	
戸棚雜	個	七	
黒板	個	一	
處置判断検査器	台	一八	

品名	稱呼	数量	記事
速度目測検査器	ヶ	三	
操縦動作検査器	ヶ	二	
圓形再生検査器	ヶ	一	
選擇反応検査器	ヶ	一	
直立安定検査器	組	一	
形態想像検査器	ヶ	一	
智能検査器	ヶ	一	
構成力検査器	ヶ	一	
落下速度検査器	ヶ	一	
電氣計数器	個	三六	
瞬間露出器(可動式)	個	二	
ユニバーサルスタンド	ヶ	一	
キネマトメーター	ヶ	一	
電話	ヶ	一八	
マイクロフォン	ヶ	一	
圓盤目測計	ヶ	四	
重量辨別検査器	ヶ	一	
構成検査器	組	一	
視觸覚辨別検査器	個	五	
フィップル迪路盤	ヶ	七	
肺活量計	組	一	
カイモグラフ	台	二	
マグネットマーカー	個	二	
両手協應検査器	台	一	
三方向記録装置	ヶ	一	
糸揮検査器	組	二	
カイモグラフ始動装置	個	三	

品名	稱呼	数量	記事
モンマイ時間智覚装置	ヶ	一	
増幅装置	台	一	
同時作業検査器	ヶ	三	
タイムレコーダー	ヶ	一	
棒挿検査器	組	三	
視野計	台	一	
レコード(検査用)	組	三	
瞬発目測計	台	一	
カード格納箱	個	一	
湯沸器	個	一	
照明用スタンド	台	二	
複雑選擇反応検査器	ヶ	二	
ベルトランス	台	二	
スライダック	個	二	
繼電装置	組	一	
操作盤	ヶ	一	
電池 (6 V)	個	一〇	
顔面固定器	本	一二	
減速装置	個	一	
安全開閉器	ヶ	四	
カンイスタンド	ヶ	一	
高馨器	組	二	
カンイスタンド	個	一	
直線目測計	ヶ	一	
柱時計	ヶ	三	
鐘板	ヶ	一	

## 机椅子保管目録内譯（第一室）

## 機械器具類目録（内譯 第二室）（続き）

品名	称呼	数量	記事
高等官用机	個	一	
判任官用机	〃	二	
技工士用机	〃	二七	
大卓	〃	四	
中卓（小）	〃	八	
小卓	〃	三五	白木造
長椅子	〃	三二	
二重寝台	〃	一二	
一重寝台	〃	四	
戸棚（ニ型）	〃	三	
戸棚（口型）	〃	二	
技工士用机	個	二	
タイプ用机	〃	一	

品名	称呼	数量	記事
棒挿検査器	組	三	
瞬発目測計	台	一	
視野計	台	一	
レコード（検査用）	組	三	
カード格納箱	個	一	
湯沸器	〃	一	
照明用スタンド	台	一一	
複雑選擇反応検査器	〃	二	
高響器	組	二	
ベルトランス	台	二	
スライダック	個	二	
繼電装置	組	一	
操作盤	〃	一	
電池（六V）	個	一〇	
顔面固定器	本	一二	
減速装置	個	一	
安全開閉器	〃	四	
カンイスタンド	〃	一	
直線目測計	〃	一	
柱時計	〃	三	
鍍板	〃	一	
高等及用椅子	〃	六	

## 機械器具類目録（内譯 第二室）

品名	称呼	数量	記事
處置判断検査器	台	一八	
速度目測検査器	〃	三	
操縦動作検査器	〃	二	
図形再生検査器	〃	一	
選擇反応検査器	〃	一	
直立安定検査器	組	一	
形態想像検査器	〃	一	
智能検査器	〃	一	
構成力検査器	〃	一	
落下速度検査器	〃	一	
電氣計数器	個	三六	
瞬間露出器（手動式）	個	二	
電氣計数器	個		
ユニバーサルスタンド	個	一	
キネマトメーター	〃	一	
電話	〃	一八	
カウンタ			
マイクロフォン	個	一	
圓盤目測計	〃	四	
重量辨別検査器	〃	一	
構成検査器	組	一	
視觸覚辨別検査器	個	五	
フィツブル迪路盤	〃	七	
肺活量計	組	一	
迪路盤			
ガイモグラフ	台	三	
マグネットマーカー	個	二	
両手協應検査器	台	一	
三方向記録装置	台	一	
絲捕検査器	組	二	
カイモグラフ始動装置	個	三	
モンマイ時間知覚装置	個	一	
増幅装置	台	一	
同時作業検査器	台	三	
タイムレコーダー	台	一	

## 机及椅子類保管目録（内譯 第四室）

品名	称呼	数量	記事
技工士用椅子	個	三四	
高等及用椅子	〃	二四	
技工士用机	〃	一五	
高等官用机	〃	一二	
判任官用机	〃	二	
中卓	〃	一	
木庫	〃	三	
更衣戸棚	〃	二	
戸棚雜	〃	八	
〃 小型	〃	五	
〃 二型	〃	二	
戸棚口型	個	一	
大卓	〃	三	
製図台	〃	一	
戸棚ハ型	〃	一	
小卓	〃	一	

## 机椅子類保管目録（内譯第五室）

品名	個	数量	記事
大卓	〃	五	
中卓	〃	二	
技工士用机	〃	二	
戸棚イ型	〃	二	
〃 口型	〃	一	
〃 ハ型	〃	一	
〃 小型	〃	一	
更衣戸棚	〃	二	
金庫	〃	一	
衡立	〃	一	
藁布団	〃	二〇	
二重寝台	〃	八	
一重寝台	〃	一一	
机	〃	一七	

## 机及椅子類保管目録（内譯第六室）

品名	稱呼	数量	記事
高等官用椅子	個	二	
技工士用椅子	〃	二三	
長椅子	〃	三〇	大
〃	〃	四	小
小卓	〃	一五	
中卓	〃	六	
技工士用机	〃	四四	
木庫	〃	二	
戸棚ハ型	〃	一	
〃 二型	〃	三	
〃 小型	〃	一	
非常持出箱	〃	三	
高等官用机	〃	四	
黒板	〃	一	
二重寝台	〃	五	
一重寝台	〃	一	

## 机及び椅子類保管目録（内譯第七室）

品名	稱呼	数量	記事
技工士用机	個	二五	
小卓	々	五四	
中卓	々	五	
高等官用椅子	々	一〇	
技工士用椅子	々	一九	
更衣戸棚	々	一	
長椅子	々	一二	大
々	々	二	小
二重寝台	々	三	
判任官机	々	一	
長机	々	一	
タイプ机	個	一	

## 保管器具目録（地上適性科）

種別	員数	種別	員数	種別	員数
操縦動作検査器	二	マイクロホン	一	蓄電池	二
協應動作検査器	四	拡声器	一	々	一四
位置判断検査器	二	增幅器	一	カウンター	四
圓形再生検査器	一	直流電圧計	一	測時計	五
同時作業検査器	二	交流計	一	スラキダック	五
速度調整検査器	一	音盤	箱一	単座操縦演習機	九
関係判断検査器	一	蓄電池	一四	複座操縦演習機	三
カイモグラフ	一	抽出記憶検査器原盤	組三	低圧タンク	一
保管検査用紙（地上適性科）					
海軍精神作業検査用紙 約一万					
海軍航空智能検査用紙 約一万					

## 机及び椅子類保管目録（内譯第八室）

品名	稱呼	数量	記事
二重寝台	個	五	
一重寝台	々	一	
技工士用机	々	一	

保管書類目録（地上適性科）	一
第一四期甲種（一次）区分検査成績	一
一九年度後期甲飛成績（舞團）	一
二十年度前期甲飛受検者成績名簿	一
十五期二次予備学生区分時検査成績	一
第十四期甲種二次検査成績（舞空）	一
十三期甲種二次銓衡要表	一
第十五期甲飛操偵別銓衡要表	一
十一期甲飛銓衡要表	一
十二期甲飛銓衡要表	一
甲飛採用者名簿	一
十六甲入隊時成績名簿	一
第十二期甲飛二次検査成績	一
第十三期甲飛（一次）区分時成績	一
第十三期豫備学生銓衡要表	一
下士官候補者検査成績	一
十四期航空局二次成績	一
下士官候補者銓衡要表身体検査成績	一
第一回飛行科下士官候補成績綴	一
第十一期丙採用時成績	一
十三期甲二次区分時成績	一
十八年度後期甲二次検査成績表	一
十八年度後期甲採用時心理検査成績	一
十八年度後期甲二次検査成績	一
二十年度前期甲飛受検者成績名簿	一
第一期甲区分時成績綴	一
十四期甲操偵区分時検査成績	一
十一期甲二次検査成績	一
十二期甲区分時成績	一

十五期甲区分検査銓衡要表	一
十九年度前甲受検者名簿	一
二期甲飛成績	一
十三期飛行專修予備学生名簿	一
十三期予学（一次）区分成績	一
十四期飛行予備学生区分成績	一
特十四期丙銓衡要表	一
十三期丙銓衡要表	一
第四期乙期銓衡要表	一
十一・十二期丙銓衡要表	一
五期丙（採用）銓衡要表	一
十六期丙（三次）銓衡要表	一
十七期丙銓衡要表	一
第一・二期丙種銓衡要表	一
機関学校生徒心理成績表	一
十四甲操偵別銓衡資料通信成績表	一
七期丙採用検査銓衡要表成績	一
八一・七期丙種銓衡要表	一
十期丙採用検査銓衡要表	一
十三期予備学生二次成績	一
六期丙採用検査銓衡要表	一
九期甲飛二次検査成績	一
七期甲飛成績	一
八期甲飛成績	一
十期甲飛二次検査成績	一
十三期甲二次検査成績	一
六期甲成績	一
一期甲成績	一
九期甲区分検査銓衡要表	一

十五甲二次検査成績	一
二十年度前甲受検者成績	一
十九年前期甲二次成績	一
十四甲一次銓衡要表	一
五甲関係書類	一
四甲関係書類	一
三甲関係書類	一
十二甲区分成績	一
十期甲区分成績銓衡要表	一
十五期予学区分時成績	二
十五期甲操偵別銓衡要表	一
第十三期甲（一次）区分時検査成績	一
第十四期甲（二次）銓衡要表	一
第十四期予学銓衡要表	一
昭和十八年度兵学校第七十二期成績	一
第十五甲銓衡要表	二
第十四甲（一次）銓衡要表	一
第十五期（一次）予学名簿	一
第八・九期丙銓衡要表	一
第十五期予学採用成績	一
第十五期（二次）預学区分時成績	一
第十四甲（二次）銓衡要表	一
第十四甲（一次）再銓衡要表	一
第十五期預學名簿（一次）	一
第十三甲（二次）検査成績	一
第十四甲区分時成績	一
第十四甲（二次）銓衡要表	一
第十三甲操偵別銓衡要表	一
第十四甲二次成績	二

第十三甲二次成績	一
(空欄)	(空欄)
(空欄)	(空欄)
(空欄)	(空欄)
第十八年度乙採用時分布表綴	七
特ニ乙分布表綴	一
二〇乙区分時分布表綴	一
十九年乙分布表綴	六
十八期乙区分時分布図	一
十九年度乙追加分布表綴	一
航空局第十三期分布図	一
十四甲区分時(二次)分布表綴	一
十三甲区分時分布表綴	一
十四甲区分(一次)分布表綴	一
十三甲区分時(一次)布時表綴	一
下士官候補者分布表綴	一
十四期予學(区分時)分布表綴	一
十三甲区分時分布表綴	一
十八年度後期甲分布表綴	一
十八年度後期甲協應關係分布表綴	一
十八年度前期甲分布表綴	一
十八年度後期甲分布表綴	一
十九年度後期甲分布表綴	一
十九年度前期甲分布表綴	二
十八年度後期甲处置分布表綴	一
十三甲二次区分分布表綴	一
十五期予學二次採用分布表	一
十五期予學分布表綴	一
十五期予學二次区分採用成績分布表	一
十五期予學区分時分布表	一
十三期予學区分時(二次)分布表綴	二
下士官候補生分布表綴	一
十八年度乙採用時分布図	九

第十八期乙分布図	一
二十年度乙採用時成績表	一
昭和十九年度乙分布表綴	五
昭和十九年度乙追加分布表綴	五
第十三期乙分布表綴	一
昭和二十年度乙採用時分布表綴	一
第三九~四十二期飛練分布表綴	一
十九年度後期甲智能電信分布表	一
第十一甲分布図	一
十九年前期甲分布表綴	三
十九年度前期甲二次検査成績綴	一
昭和十八年度後期甲智能精作綜合分布表	一
十二期甲分布(区分時)表	一
昭和十八年甲採用時分布表	三
第十一期甲分布表綴	一
昭和十八年度後期甲智能精作分布表綴	一
第十一期甲分布図	一
十九年度後期甲二次検査成績分布表	一
十九年度前期甲分布表綴	一
昭和十八年度後期甲心理適性検査分布表綴	一
(空欄)	(空欄)
(空欄)	(空欄)
(空欄)	(空欄)
十九年度前甲分布表綴	二
特十一丙分布図綴	一
第十二期丙分布図綴	一
第十三期丙分布図綴	一
自動車講習員分布表綴	一
七二期兵学校分布図	一
第七・八・九期丙分布図	一
第六期丙分布図	一
第十七期丙成績資料	一
航空局十三期分布表	一

予備学生分布図	一
館山砲術学校分布図	一
第十四期乙分布図	一
◎電信検査実施済用紙	資材室
十五甲飛一次	
十六甲入隊時	
十五甲区分時	
十九年度後期甲舞空(十五甲)	
十四甲(研究検査)	
佐空採用時(十期甲)	
土空十一期甲成績	
土空九期甲採用時成績	
土空十二甲採用時成績	
心理検査成績表	
土空電信成績表	
(空欄)	
第十九期乙分布図	一
第十五期乙分布図	一
第七・八・九期甲分布図	一
昭和十八年前甲区分時分布図	一
十期甲区分時分布図	一
特十四・五丙分布表綴	一
三・四・五期丙分布図綴	一
第七二期兵学校分布図	一
第十二甲(区分時)電信検査分布図綴	一
昭和十八年機関学校分布図	一
十六期丙分布図	一
縣別適性検査分布	一
十八年度前甲第十三期操縦生(航空局)分布図	一
十四丙分布綴	一
十七丙分布綴	一
十六丙分布表	一
適正調査表	一〇

### 「海軍航空要員研究所概要」「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011063800、航空隊 引渡目録 2/14 (防衛省防衛研究所)」

海軍航空要員研究所概要(昭和二十年八月十五日現在)

一. 設立 昭和二〇年七月二〇日

研究施設ノ大部ハ未完成ニシテ所員ノ大部ハ未発令ナリ

三. 編成

總務課 會計課 第一課 第二課 第三課

二. 施設

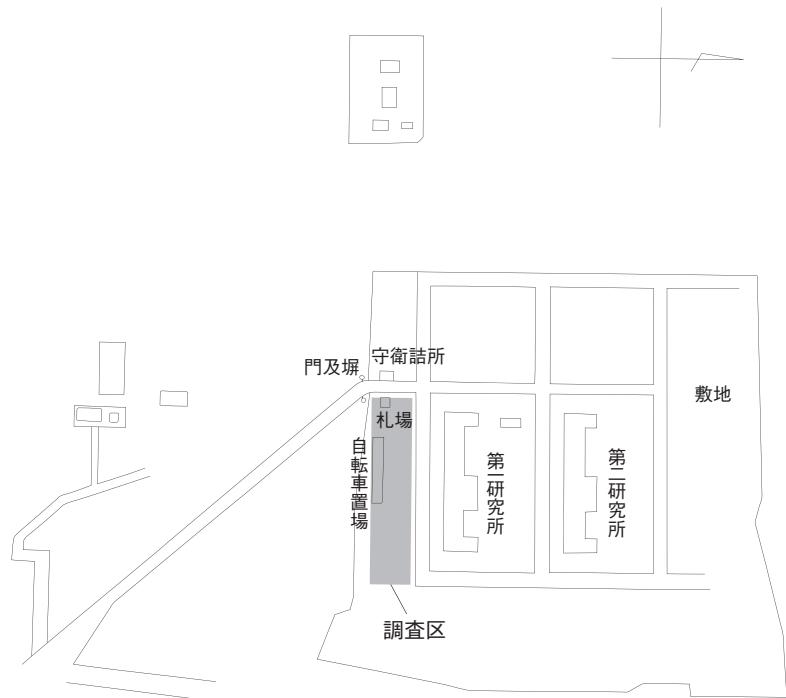
事項	構造	数量	記事
敷地	土砂	約四二,〇〇〇平米	
道路	砂利敷	〃三七〇平米	幅員六米
構内通路	同	〃一,〇〇〇平米	同
第一研究所	木造二階家	約二,七三〇平米	(乙級)
第二研究所	同	〃二,六七五平米	(々)
守衛詰所	木造平家	約一五平米	(乙級)
札場	同	〃八平米	(々)
自轉車置場	同	〃六〇平米	(丙級)
門及棚廻	木造	一式	
水道設備			
内			
鑿井	エタニット管又は銅管	一ヶ所	門一ヶ所柱石造木?付
揚水唧筒	ギアホール	一ヶ所	揚水量毎時五〇耗及豫?発動機一台 其ノ他附属品共
送水唧筒	タービン	同	揚水量毎時五〇耗附属品共
唧筒所	木造平家	約二〇平米	(乙級)
配水池	石及コンクリート造上家木造	一ヶ所	容量約二五〇耗 塩素滅菌設備共
送水管	エタニット管	約二〇〇米	内径二〇〇耗

四. 人員

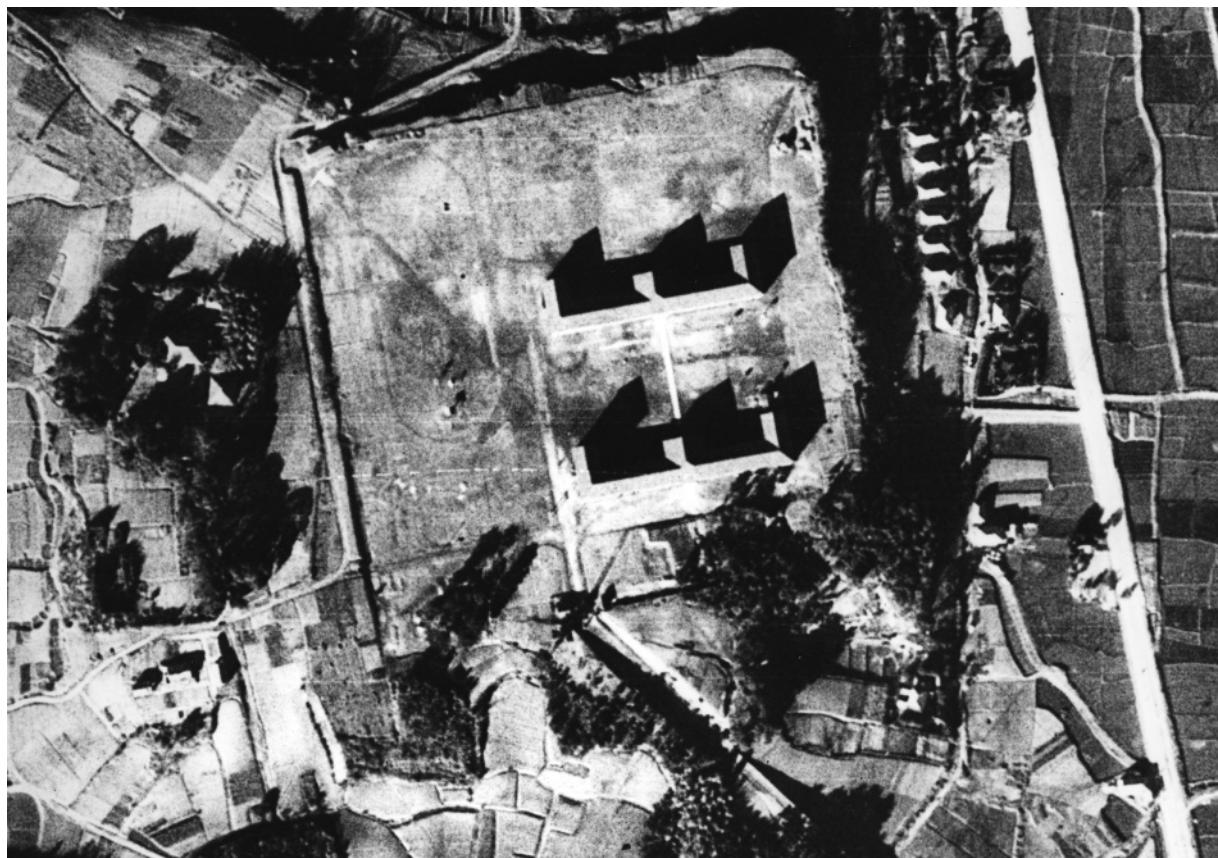
所長	海軍少将 藤吉直四郎(兼務)
總務部長	未発令
第一課長	海軍技師 高木貫一
第二課長	海軍医中佐 足立恒二(兼務)
第三課長	未発令
會計課長	海軍主計少佐 三井一郎(兼務)

五. 研究計畫

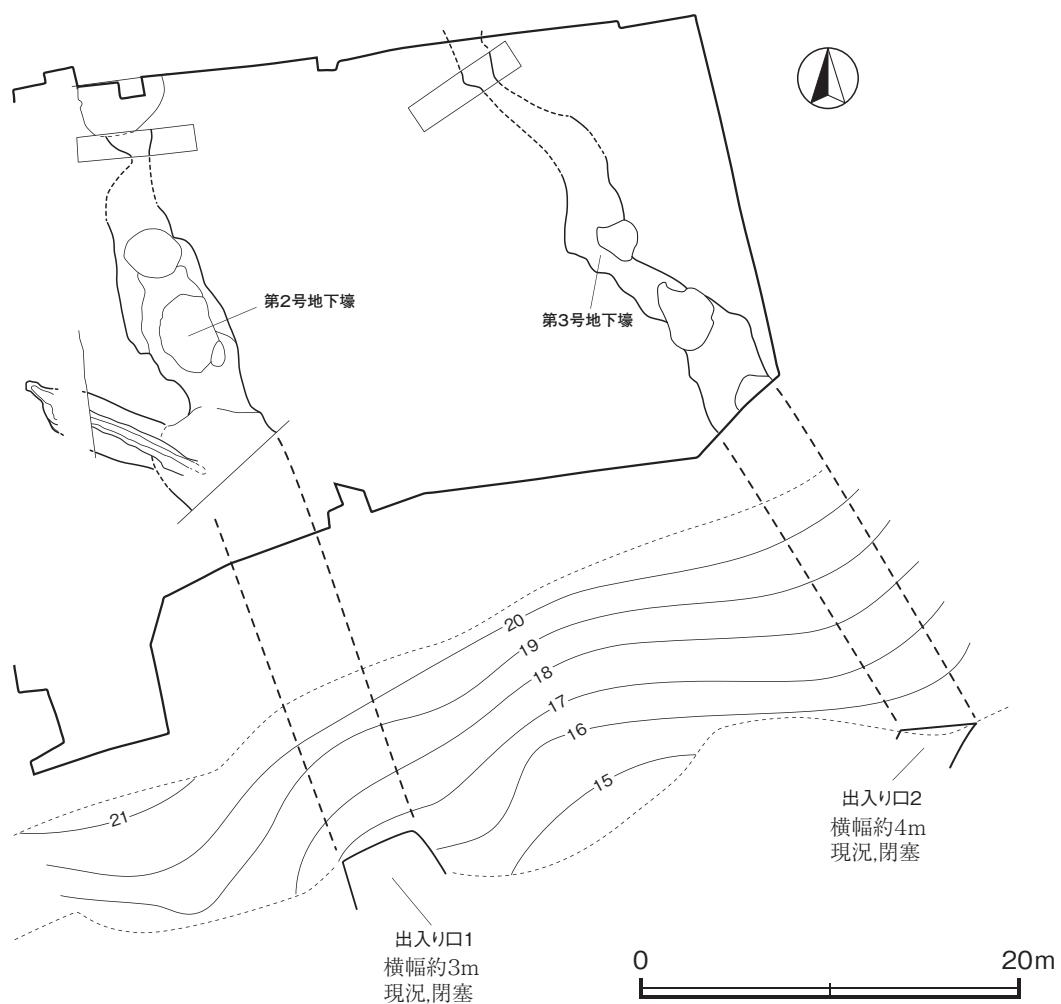
第一課	心理学的研究 航空機搭乗員適性検査法並訓練法等
第二課	医学的研究 身体検査法 疲労 食餌等
第三課	体育的研究 感官能力 運動能力 耐久力等



第71図 海軍航空要員研究所位置図  
「引渡調書」(「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011064000、航空隊 引渡目録 2／14 (防衛省防衛研究所)」より一部改変作成)



海軍航空要員研究所（1948年米軍撮影 R2232 - 83 上が北）



出入り口1現況



出入り口2現況

第72図 地下壕入口現況位置図



第73図 五歳遺跡遺構全体図

## 写 真 図 版



検査器械（左 視触覚弁別検査器、右 マッチ盤）

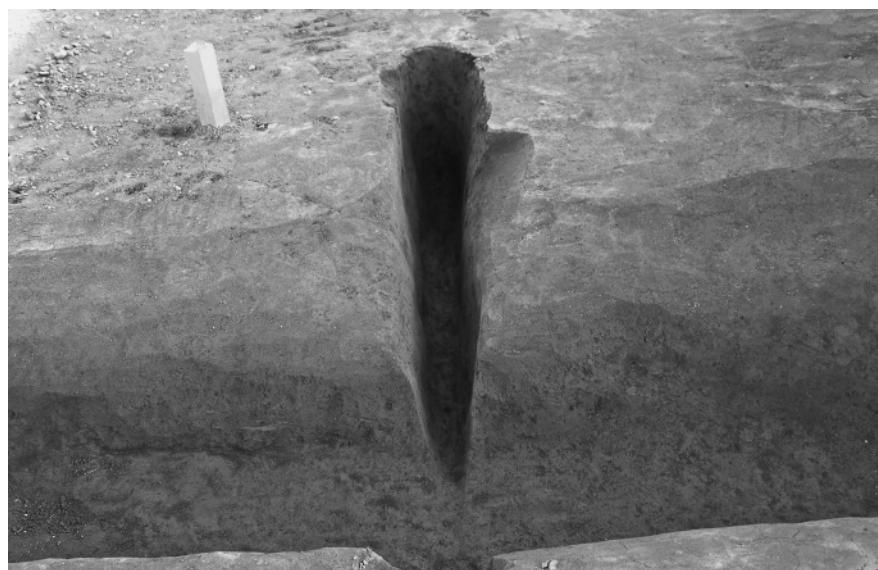




調査区全景  
(北西から)



調査区全景



第5号土坑  
完掘状況

PL2



第1号豎穴遺構  
完掘状況



第1号墳  
周溝遺物出土状況



第1号墳  
完掘状況

第 2 号 墓  
周溝遺物出土狀況



第 1 号 地 下 墓  
I—I' 堆積狀況



第 1 号 地 下 墓  
L—L' 堆積狀況



PL4



第 1 号 地 下 壕  
壁 材 出 土 状 況



第 1 号 地 下 壕  
遗 物 出 土 状 況



第 1 号 地 下 壕  
完 挖 状 況

第 1 号 地 下 壕  
出入り口完掘状況



第 1 号 地 下 壕  
括 れ 部 完 掘 状 況



第 1 号 地 下 壕  
作 業 道 (SD16)  
完 掘 状 況



PL6



第 2 号 地 下 壕  
B - B' 堆積狀況



第 2 号 地 下 壕  
崩落土 検出狀況



第 3 号 地 下 壕  
A - A' 堆積狀況

第3号地下壕  
崩落土検出状況



第4号地下壕  
遺物出土状況



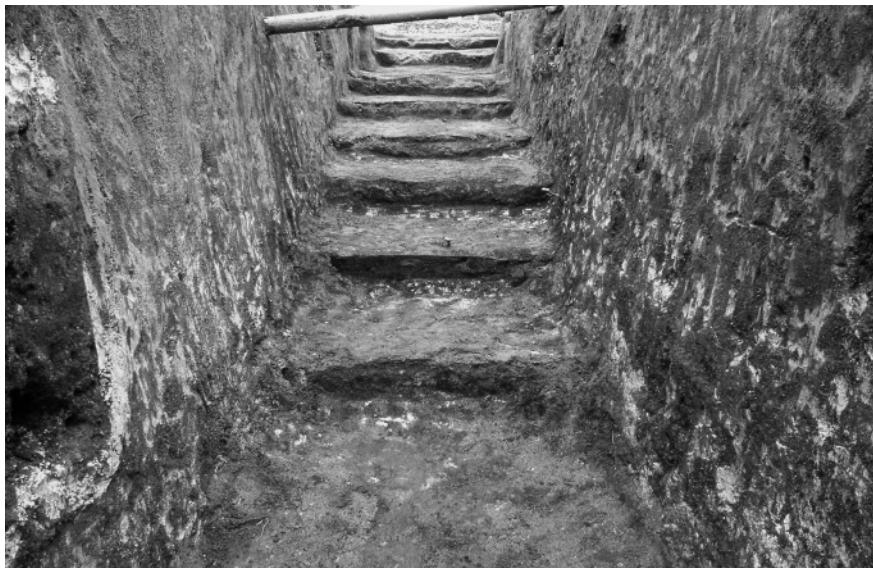
第4号地下壕  
D-D'堆積状況



PL8



第4号地下壕  
北側完掘状況



第4号地下壕  
階段完掘状況



第4号地下壕  
階段断ち割り状況

第 5 号 地 下 壕  
遺 物 出 土 状 況



第 6 号 地 下 壕  
完 挖 状 況



第 8 号 地 下 壕  
崩 落 土 檢 出 状 況



PL10



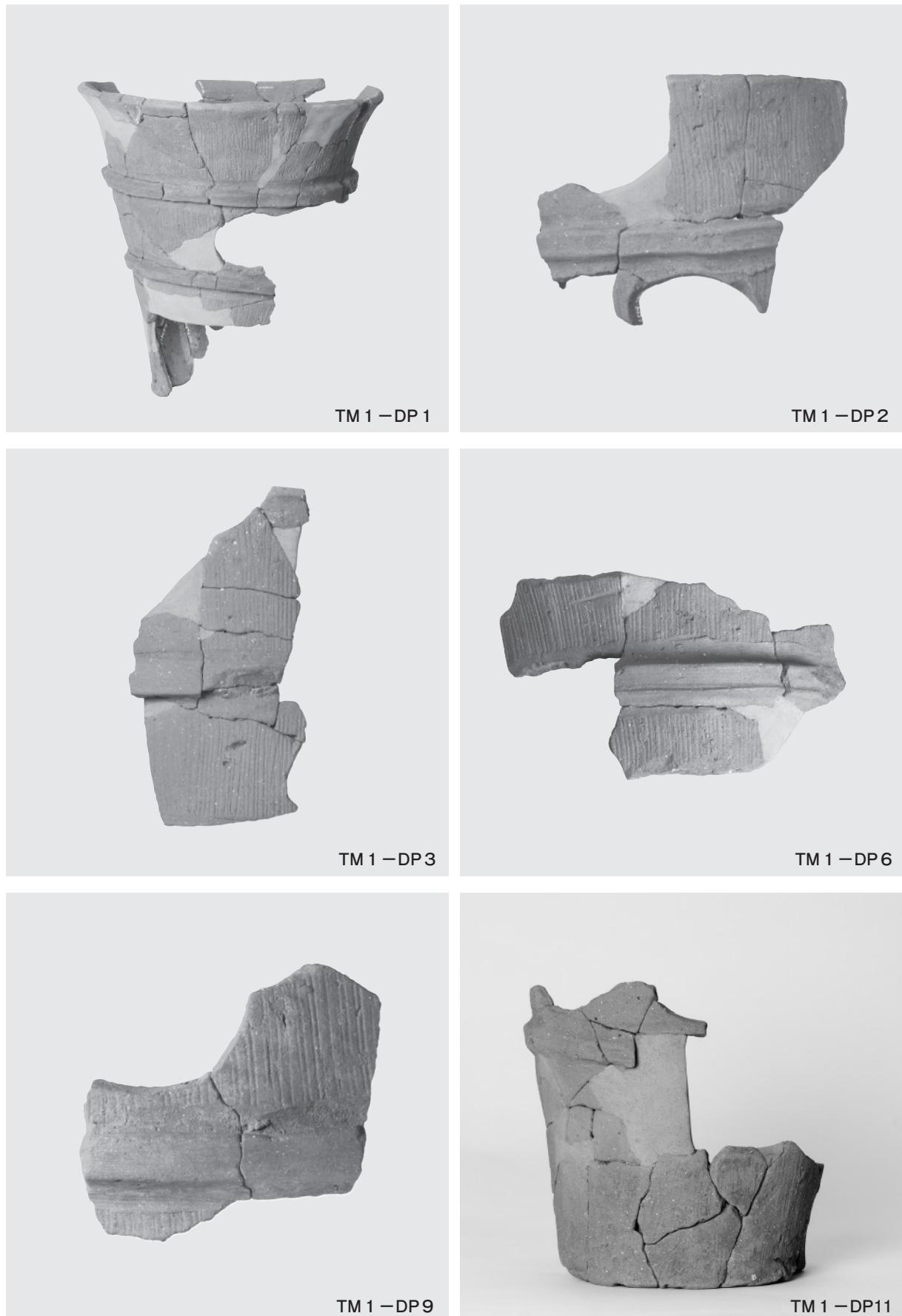
第3号溝跡  
遺物出土状況



第10号不明施設  
完掘状況



第6号土坑  
遺物出土状況



第1号墳出土埴輪

PL12



TM 1 - DP 4



TM 1 - DP 5



TM 1 - DP10



TM 1 - DP13



TM 1 - 1



TM 2 - 2



TM 3 - DP15



TM 3 - 5



TM 3 - DP16



SK25 - TP 1

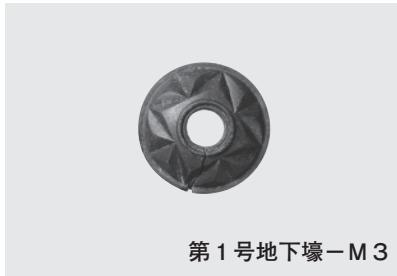
第1・2・3号墳、第25号土坑出土埴輪・土器・土製品



第1号地下壕-M1



第1号地下壕-M2



第1号地下壕-M3



第1号地下壕-M4



第1号地下壕-M5



第1号地下壕-M6



第1号地下壕-M7



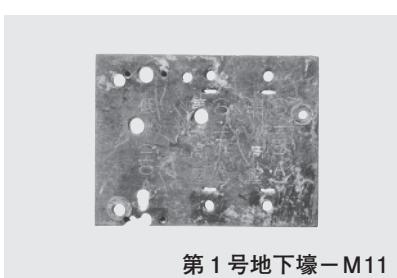
第1号地下壕-M8



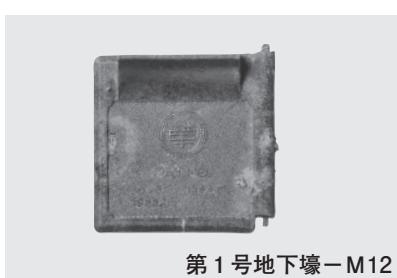
第1号地下壕-M9



第1号地下壕-M10



第1号地下壕-M11



第1号地下壕-M12



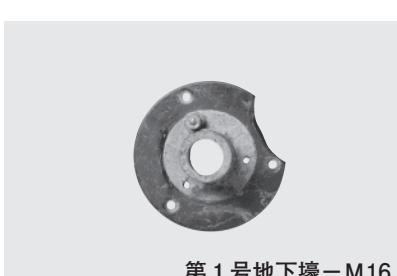
第1号地下壕-M13



第1号地下壕-M14



第1号地下壕-M15



第1号地下壕-M16



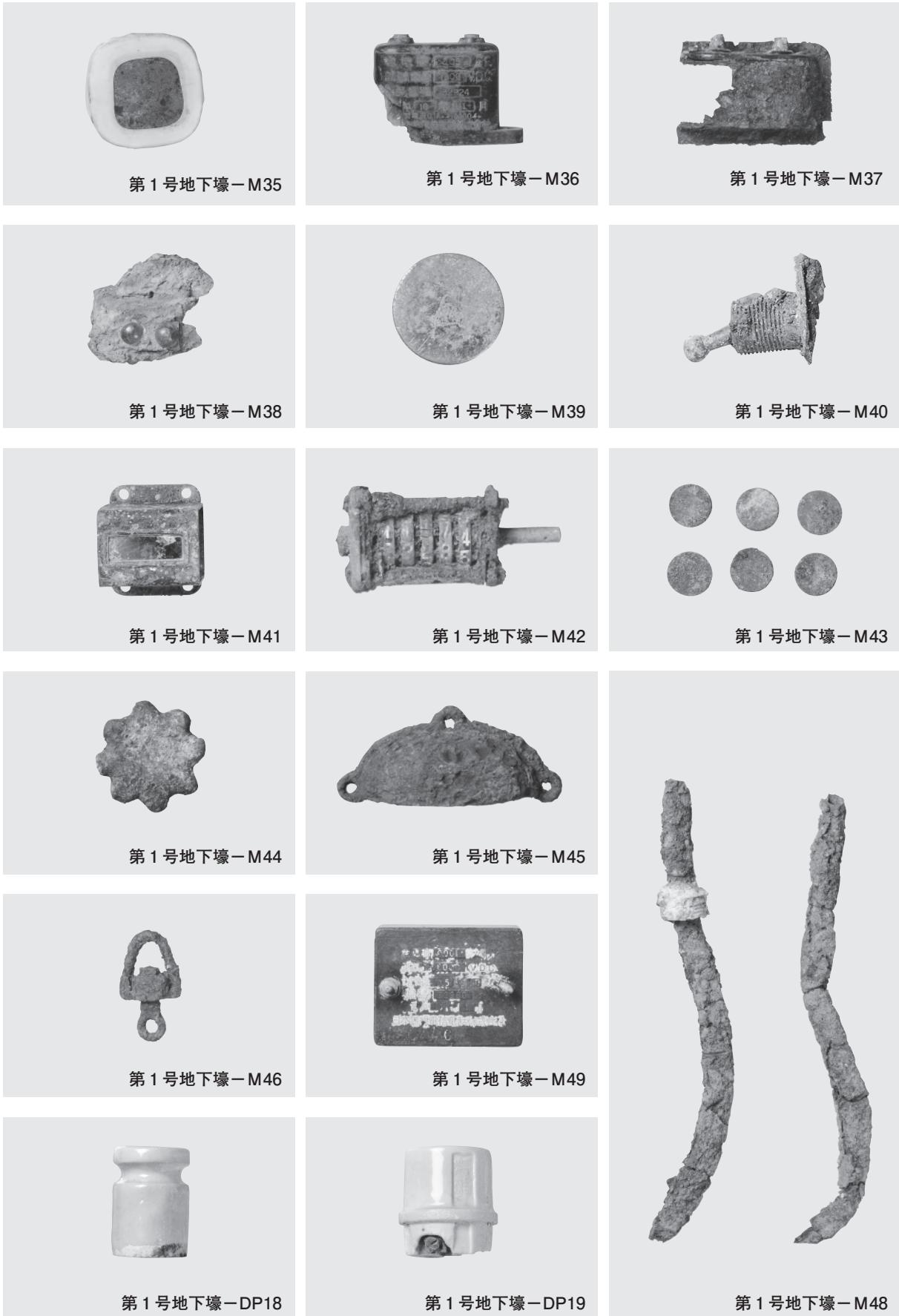
第1号地下壕-M17



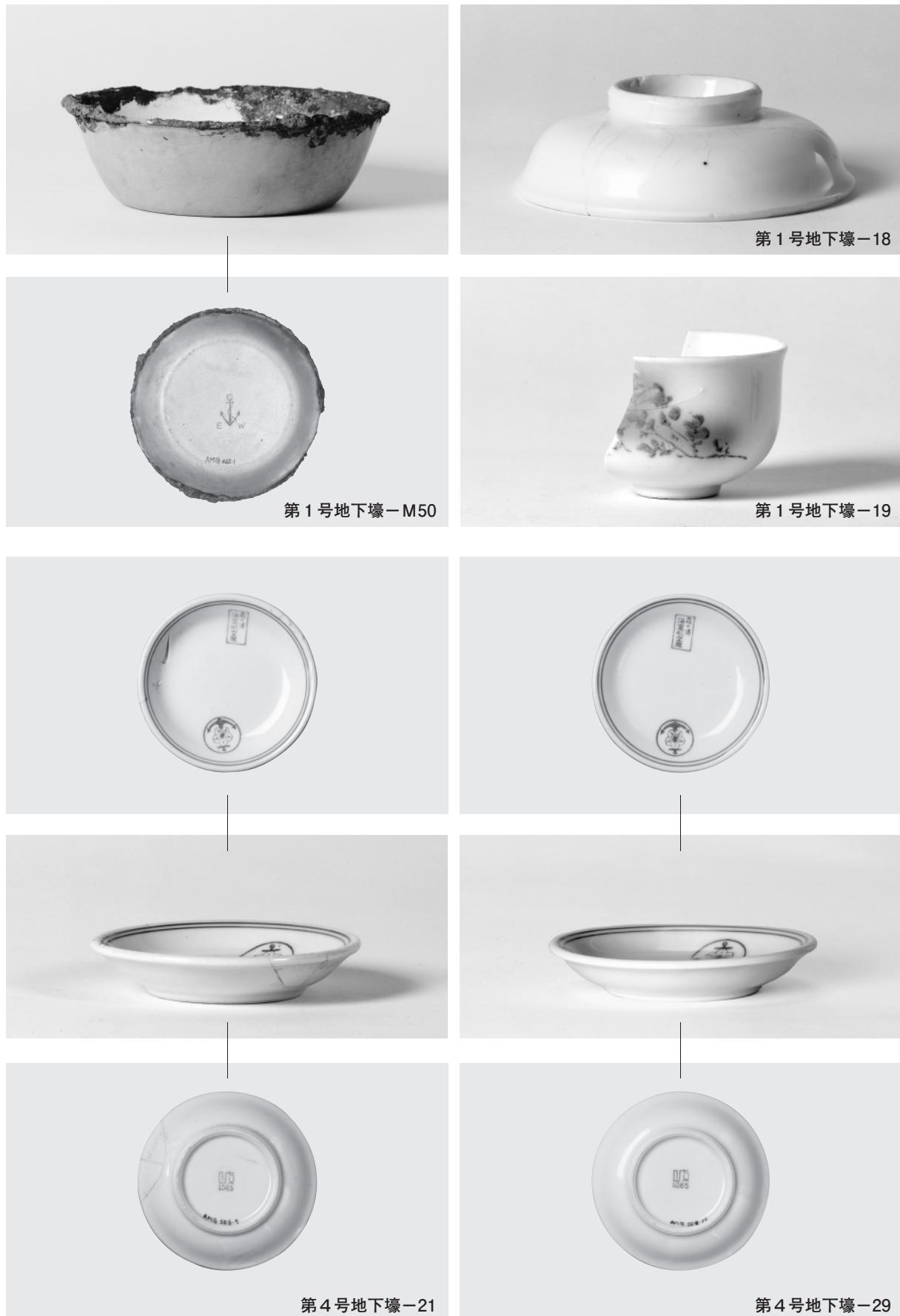
第1号地下壕-M18



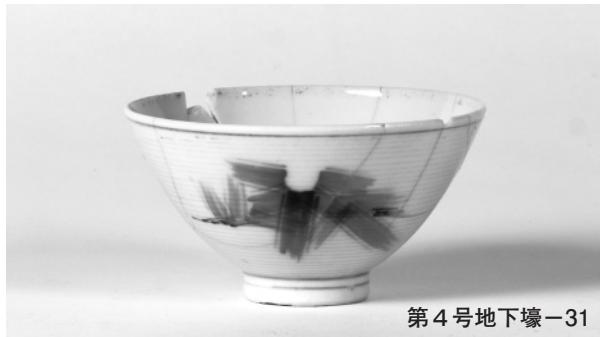
第1号地下壕出土金属製品・機械部品



第1号地下壕出土金属製品・機械部品・土製品



第1・4号地下壕出土土器・金属製品



第4号地下壕-31



第4号地下壕-DP21



第5号地下壕-G 3



第4号地下壕-G 1



第5号地下壕-33



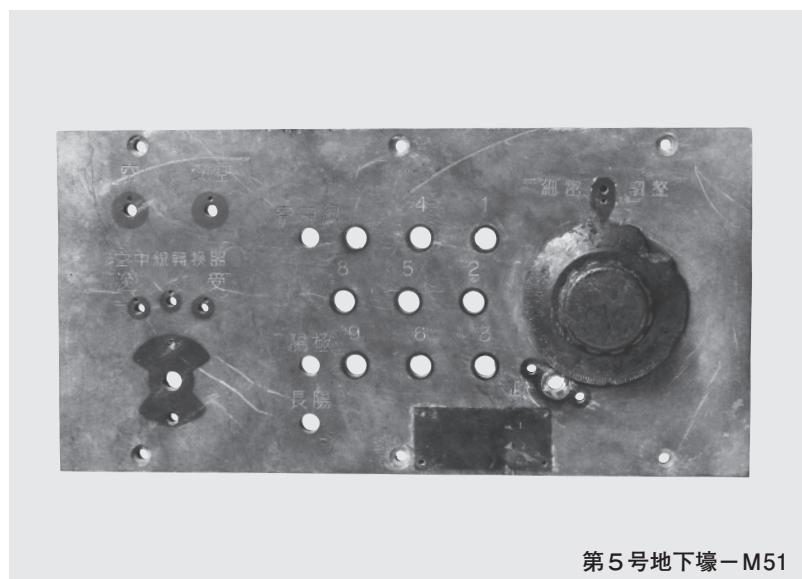
第5号地下壕-M 53



第5号地下壕-M 54



第5号地下壕-M 55



第5号地下壕-M 51



第5号地下壕-G 2

第4・5号地下壕出土土器・土製品・ガラス製品・機械部品

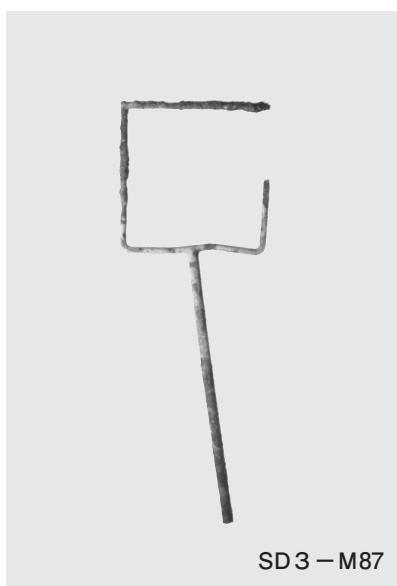
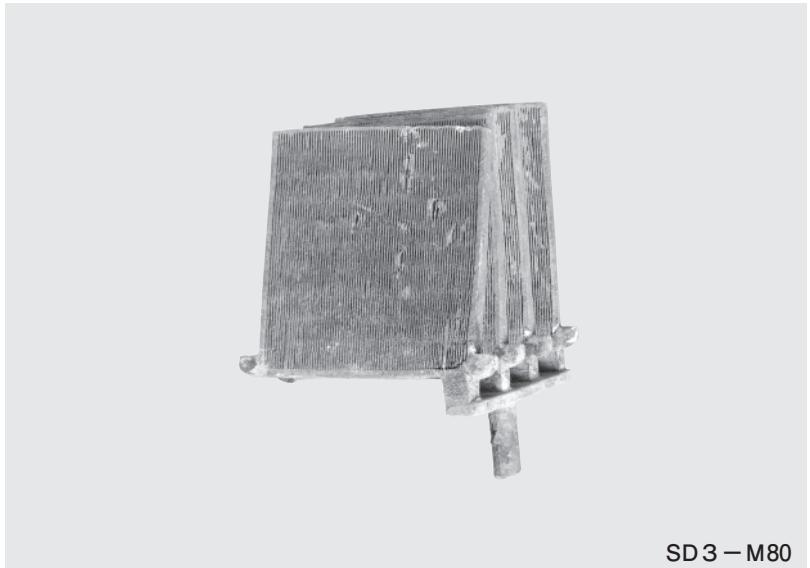


第10号不明施設・第3号溝跡出土瓦・金属製品・機械部品

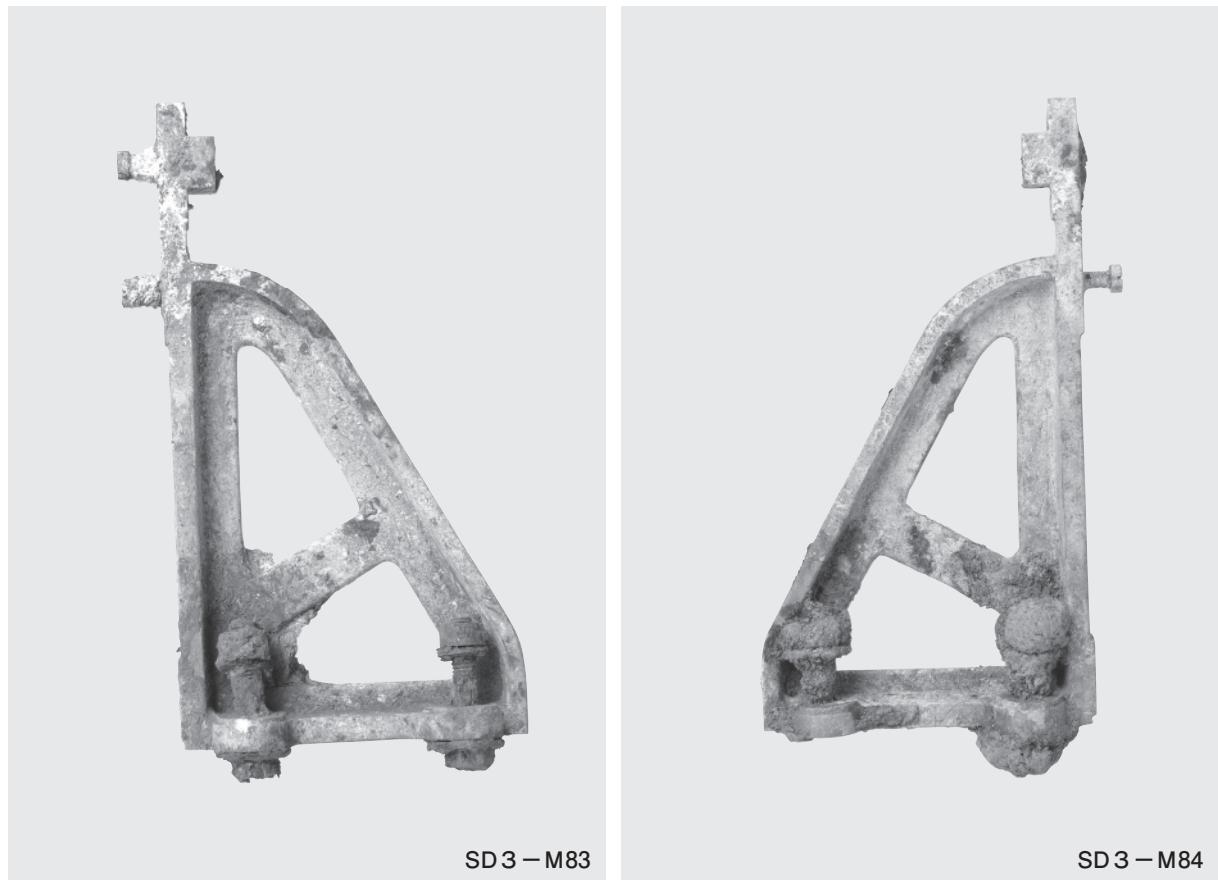


第3号溝跡出土機械部品

PL20

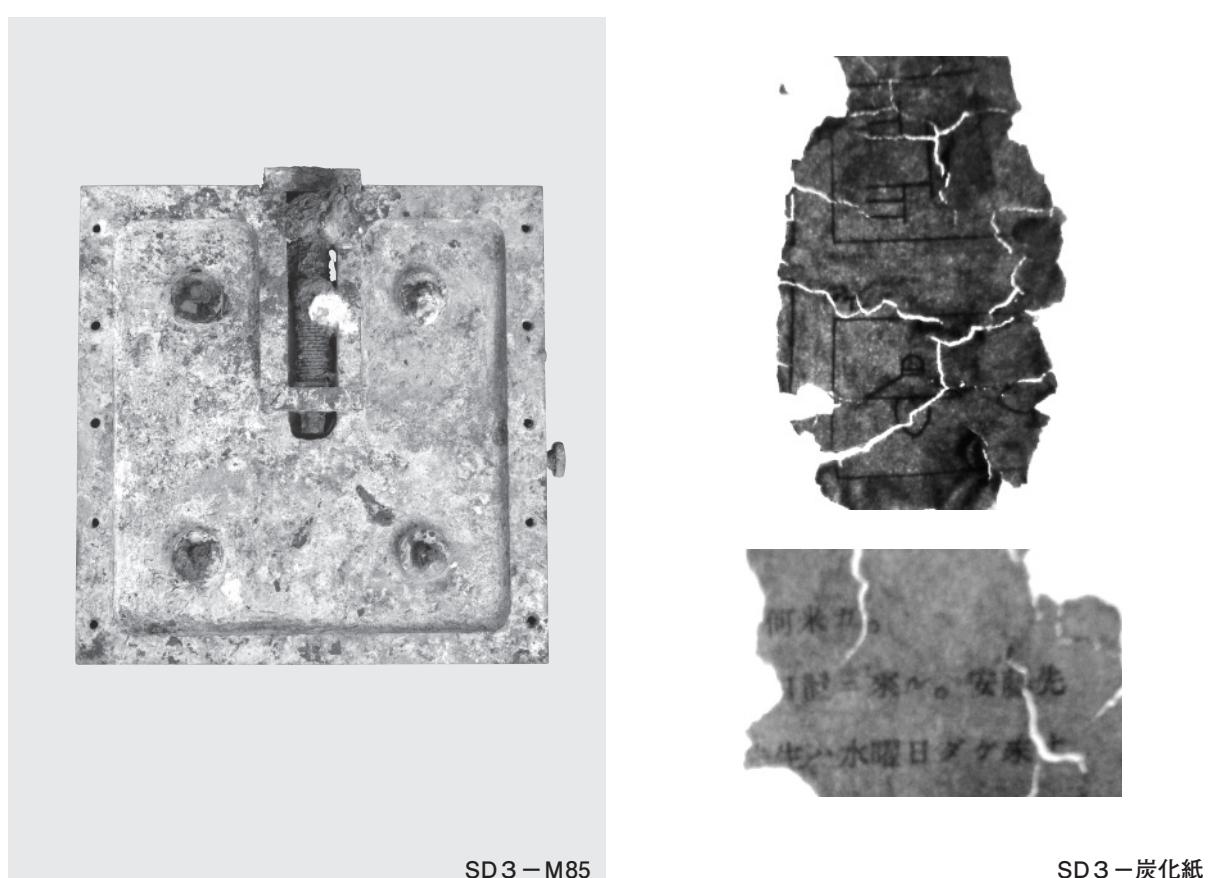


第3号溝跡出土金属製品・機械部品



SD 3 - M83

SD 3 - M84



SD 3 - M85

SD 3 - 炭化紙

第3号溝跡出土金属製品・機械部品・炭化紙

PL22



第3号溝跡・遺構外出土土器

抄 錄

## 印 刷 仕 様

編 集 OS Microsoft Windows XP  
Professional ServicePack3  
編集 Adobe InDesign CS2  
図版作成 Adobe Illustrator CS2  
写真調整 Adobe Photoshop 6  
Scanning 6 × 7 film EPSON GT-X970  
図面類 DocuScan C1500  
使用 Font OpenType リュウミン Pro・L・中ゴ・見出ゴ  
印 刷 オフセット印刷  
印刷所へは、AdobeInDesignCS2でレイアウトして入稿  
写真製版 スクリーン線数 モノクロ 175 線・カラー 210 線以上

### 茨城県教育財団文化財調査報告第 381 集

## 五 蔵 遺 跡

県立土浦第三高等学校老朽校舎改築  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 25 (2013) 年 3 月 12 日 印刷  
平成 25 (2013) 年 3 月 15 日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団  
〒 310 - 0911 水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029 - 225 - 6587  
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 朝日印刷工業株式会社  
〒 371 - 0846 群馬県前橋市元総社町 67  
TEL 027 - 251 - 1212